

関西学生陸上競技連盟 100年の歩み

—第1章— 学生陸上競技のはじまり

札幌農学校（現在の北海道大学の前身）へ招かれたアメリカ人教師ウィリアム・スミス・クラークが1886（明治19）年に、彼の助手をしていたウィリアム・ホイラーとダベット・ペンハローに命じて学生に陸上競技を伝授した。1888（明治21）年5月には札幌で第1回競技会を開催している。これが学生陸上競技の始まりとされている。

1893（明治26）年から東京の大学等で運動会が行われ、1907（明治40）年頃より、一高、東京帝大、東京高師をはじめ、学習院、慶應義塾、早稲田、明治等が集まって競技会を開催している。この1907（明治40）年が学連（学生団体）として陸上競技の開始年とされている。

—第2章— 関西における学生陸上競技のはじまり

大阪毎日新聞記者の西尾守一が1913（大正2）年マニラの第1回東洋オリンピック大会（第2回大会から極東選手権大会に名称変更。現在のアジア大会）に派遣され、大いに啓発されて帰国後早速、同年に箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄の前身）が設置した豊中運動場にて大阪毎日新聞社主催で第1回日本オリンピック大会を開催した。これが関西における陸上競技の最初の大会とされている。神戸高等商業学校（現在の神戸大学、以下神戸高商と略する）の北村栄二郎は野球部主将であったが、北野中学（現在の大阪府立北野高校）時代から足が速く、個人の資格でやじ馬的に何気なく申し込んで出場した。決勝は12秒2で走り、日本一のスプリンターであった東京帝大の明石和衛を破り優勝、陸上競技に専念することにした。北村は1915（大正4）年上海の第2回極東選手権大会（以下極東選手権と略する）に出場を果たし、1918（大正7）年には走幅跳で6m08の日本記録を樹立している。当時の神戸高商には数多くの日本記録樹立者がいた。200mの奥村良一、110mHの鈴木吉雄、奥山一三、砲丸投・円盤投の中村正祐、円盤投の日野俊夫らは、「日本陸上界神代の偉人」と呼ばれた強者精鋭であった。1917（大正6）年の第5回日本陸上競技選手権大会（以下日本選手権と略する）では、200m奥村、110mH鈴木、200mH福井孝一、立幅跳藤井二三、砲丸投中村、ハンマー投日野の6名が選手権者となっている。

朝日新聞社主催の東西対抗競技会も1916（大正5）年に行われ、関西の学生陸上競技の発展に大きな役割を果たした。同志社大学（旧制専門学校令で「同志社大学」と称した。以下同大と略する）の佐伯巖は1918（大正7）年、1919（大正8）年の第6回、第7回日本選手権400m、800mで連覇し、1919（大正8）年マニラの第4回極東選手権に有田志朗と同志社在学中に1500m、10マイルロードで日本選手権を制し明治大学（旧制専門学校令で「明治大学」と称した）に進んだ加藤富之助とともに出場し、880ヤードで金メダルを獲得している。関西学院（以下関学と略する）の伊達宗敏は1919（大正8）年の第7回日本選手権100m、200m2種目制覇、翌年の第8回日本選手権200mで連覇を成し遂げている。また、1921（大正10）年上海の第5回極東選手権の120ヤードH、220ヤードHに出場した関学の渡辺文吉は、2種目で銀メダルを獲得している。

この時期は神戸高商、同志社大学、関学が関西の学生陸上競技界をリードしていた。

—第3章— 関西学生陸上競技連盟の設立

当時は、上記の競技会以外に大学間の対校戦や各大学が行う運動会の招待リレーにチームで出場、もしくは1911（明治44）年に設立された大日本体育協会（初代会長：嘉納治五郎）の全国陸上競技大会に個人で出場が活躍の場であり、各学校が一場に会して覇を争う総合的な競技会は行われて

いなかった。

1919（大正8）年に関東で設立された全国学生陸上競技連合（現在の関東学生陸上競技連盟）の影響を受け、翌年秋から全国学生陸上競技連合の規約を参考に、東京帝大の木下東作、東京高師の東口真平や前述の同大の佐伯、神戸高商の北村、奥村、奥山などの卒業生にも指導を仰ぎ、神戸高商の平岡国雄、米屋誠治、関学の渡辺、深山武夫、同大の半井修一（関西学生競技連盟元会長）、榎原如一、大阪高等商業学校（現在の大阪市立大学、以下大阪高商と略する）の菊池辰雄、大阪医科大学（現在の大阪大学、以下大阪医大と略する）の毛利一郎、関西大学（旧制専門学校令で「関西大学」と称した。以下関大と略する）の金田格などが規約を作成し、1921（大正10）年の秋に全国大学高専陸上競技連盟（現在の関西学生陸上競技連盟、以下本連盟と略する）を発足させた。

—第4章— 関西学生陸上競技対校選手権大会の開催

大正後期から昭和初期にかけて本連盟が行っていた大会は関西学生陸上競技対校選手権大会（以下関西インカレと称する）だけであったが、中国地区の学校も関西インカレ第1回大会から参加していた。第1回大会は、本連盟発足年の1921（大正10）年12月3日、4日に鳴尾運動場で開催、神戸高商、関学、同大、関大、大阪医大、第六高等学校（現在の岡山大学、以下六高と略する）、山口高等商業学校（現在の山口大学、以下山口高商と略する）の7校が参加している。雪も降りそうな寒風のもと、選手は焚火にあたりながら出場するという状況下で初の覇権が争われた。前年の日本選手権100mを制した神戸高商の平岡は短距離3種目と三段跳、五種競技の個人5種目で優勝、特に200m（直走路）では23秒2の日本記録を樹立し、母校の第1回大会優勝に大きく貢献した。第2回大会は1922（大正11）年京阪グラウンドで開催された。六高と関学が総合得点同点で1位に、さらに1点差で神戸高商と同大が続く大接戦となり、六高が得点内容で初優勝を成し遂げている。京都帝国大学（以下京都帝大と略する）入学後に走高跳で日本記録を樹立した曾根慶二郎が同種目で優勝。六高の優勝者は曾根のみであったが、各種目で万遍なく得点していることが結果につながった。なお、当時の六高は陸上競技だけでなく、柔道を始め各種の体育において優秀な成果をおさめている。同大会で神戸高商の中川康一が200m、400m、800m、1500mの短距離、中距離4種目で優勝という異色の活躍をしている。また、同大の猿丸吉雄はハンマー投で31m30の日本記録を樹立して優勝、猿丸は通算4度日本記録を更新し日本選手権も制している。なお、ハンマー投の日本記録は猿丸以外に関学の寺田辰次郎、同大の塚本篤之助が更新し、大正後期から昭和初期にかけては早大の沖田芳夫を除き、関西の学生が日本記録を保持続けるという時代であった。

1923（大正12）年の第3回大会から1942（昭和17）年の第22回大会（第2次世界大戦前）までは大阪市立運動場か甲子園南運動場のいずれかで開催されていた。1923年の第3回大会から広島高等師範学校（現在の広島大学、以下広島高師と略する）、松江高等学校（現在の島根大学、以下松江高と略する）も参加、後に日本人として初の五輪金メダリストに輝いた広島高師の織田幹雄は100m、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳の5種目に出場し、走高跳、走幅跳、三段跳の3種目に優勝している。110mHでは同大の榎原が16秒8で走り抜け、自身2度目の日本記録をこの大会で樹立し、同大の総合初優勝に花を添えた。また、六高の久保佐一が100m、200m、400m3種目において優勝、翌年の第4回大会でも同じ種目で2連覇するという快挙を成し遂げている。

—第5章— 京都帝大、関大の黄金期

1925（大正14）年の第5回大会から1938（昭和13）年の第18回大会までは京都帝大、関大が総合優勝争いをするという時期で、京都帝大は1926（大正15）年の第6回大会から5連覇、関大は1931（昭和6）年の第11回大会から8連覇という偉業を成し遂げている。1925年の第5回大会では京都帝大の井街謙が110mHにおいて16秒0で優勝し、自身3度目となる日本タイ記録を樹

立。神戸高商の今里麟次郎もこの年に同記録を樹立し、この種目の関西学生のレベルの高さを証明した。今里は同年、400mHでも1分0秒0の日本記録を樹立している。

日本学生陸上競技連合の設立

1921（大正10）年秋に全国大学高専陸上競技連盟が設立された際に全国学生陸上競技連合は全国の加盟大学一本化の組織作りを持ちかけたが、全国大学高専陸上競技連盟は時期尚早と、この話に乗らず、以後しばらく東西それぞれで全国組織を名乗って活動を行った。

1925（大正14）年、全日本陸上競技連盟（現在の公益財団法人日本陸上競技連盟、以下陸連と略する）が設立されるが、東西の学生組織は学生の統括団体としてその組織に加わらず活動を続けた。

1927（昭和2）年、東西の学生組織は合同するための準備交渉を10月31日、関西側から京都帝大の井街、土居弘雄、鈴木武、神戸高商の山成源太郎、関大の小森竜が上京し、東京農大の北沢清、東京帝大の永田安之輔、法政大の小川良三、早大の沖田、東京高師の高田通、選手側を代表して早大の織田幹雄、東京高師の福井行雄が加わって交渉を行い、日本学生陸上競技連合（現在の公益社団法人日本学生陸上競技連合、以下連合と略する）の規約起草に入った。

1928（昭和3）年5月東京で第1回日本学生陸上競技対校選手権大会を開催し、併せて組織の創設宣言を行うこと、全国中等学校陸上競技大会を全国学生陸上競技連合から連合が継承して主催すること、北海道、東北、北陸、東海、中国、四国、九州と当時日本が併合、建国した朝鮮、満洲に学連組織結成を促し加盟校とすること、これを機に全国を名乗った東、西の組織を関東学生陸上競技連盟、関西学生陸上競技連盟と名称を改めて連合に加盟することを決めたが、関東は「連合」の名称に固執し、関東学生競技連合として発足させ、その後「連盟」に名称を変更した。

京都帝大は旧制全国高等学校大会（以下インターハイと称する）で活躍した選手や旧制高等学校選手も出場可能であった関西インカレにおいて活躍した選手が数多く入学したことにより、この時期黄金時代を築いている。内藤資忠は第三高等学校（現在の京都大学、岡山大学の前身、以下三高と略する）で100m11秒0の日本タイ記録を樹立し、福間三徳は1923（大正12）年大阪市立運動場であった第6回極東選手権に松江高からやり投で出場している。1928（昭和3）年のアムステルダム五輪100m、200m、4×100mRに出場、本連盟初の五輪選手となった第四高等学校（現在の金沢大学）の相沢巖夫はインターハイ100m、200mを優勝している。相沢はアムステルダム五輪前年の1927（昭和2）年に100mと200m（直走路）で日本記録を樹立し、五輪の年にも200mで再び日本記録を更新して五輪出場に花を添えている。1936（昭和11）年のベルリン五輪三段跳で16m00の世界記録を樹立し、本連盟出身者として初の金メダリストに輝いたOBの田島直人は山口高等学校（現在の山口大学）で100mと走幅跳、また同五輪同種目で銀メダルを獲得したOBの原田正夫は第七高等学校造士館（現在の鹿児島大学）で三段跳において優勝している。なお、原田は唯一本連盟現役生として世界記録を三段跳（15m75）で樹立している。甲南高等学校（現在の甲南大学、以下甲南高と略する）で砲丸投、円盤投、ハンマー投の3種目においてインターハイチャンピオンとなった松野栄一郎は、同五輪の円盤投とハンマー投に出場するという輝かしい戦績を有するチームであった。1928年から始まった天皇賜盃日本学生陸上競技対校選手権大会（以下日本インカレと称する）の第1回大会の4×400mRで京都帝大（土居、相沢、野間清、高柳常雄）は日本学生記録を樹立して優勝、この種目関西勢で唯一の優勝チームとなっている。土居、高柳は甲南高、野間は六高の在学中にインターハイで活躍した選手である。なお、原田（OBの時期を含む）は走

幅跳、三段跳で7回、相沢は100m、200mで3回、松野は円盤投、ハンマー投で2回、田島は三段跳で1回日本選手権者になっている。

インターハイ開催の裏話

京都帝大を強力なチームにするためには、各高等学校の俊秀を集めなければならないとの考えに基づき、既に東京帝大が全国高等学校リレー大会を開催していたが、京都帝大は単独開催で18種目に亘る全国インターハイ対校陸上競技大会を、1925（大正14）年7月下旬、京都帝大運動場にて2日間の日程で開催。その結果、幾多の優秀な選手を入学させることができ、開催の目的を達成している。翌年、東京帝大が全種目に亘るインターハイの開催を目論み、文部省から当時の1000円を後援費として獲得したが、結果的には両大学共同主催で、文部省後援の全国インターハイを1926（大正15）年の夏、明治神宮外苑競技場で行っている。

他方、関大は大島鎌吉（本連盟元会長）が金沢商業高等学校から入学し、1932（昭和7）年のロスアンゼルス五輪三段跳で銅メダルを獲得、本連盟初の現役五輪メダリストとなっている。金メダル候補であった大島は大会直前に風呂で大やけどを負うというアクシデントがあったが、持ち前の精神力で銅メダルを獲得した。1936（昭和11）年のベルリン五輪では主将としてチームをまとめ、残念ながら本人は三段跳6位入賞にとどまったが、田島が金メダル、原田が銀メダルを獲得し、日本および本連盟出身者の三段跳が世界を席卷した。関大には大島と同じ五輪2大会に連続出場し、日本記録も樹立したやり投の長尾三郎がいた。関大黄金時代と重なったベルリン五輪にはOBの大島、長尾が、現役では直走路21秒2の日本記録保持者の谷口睦生が200mと4×100mR、日本学生記録15m86を樹立した三段跳の戸上研之が出演している。谷口と戸上は出身中学は違うものの同じ熊本県出身であった。また、福岡の中学から関大予科に進み、110mHに出場した古田康治は、後に福岡陸上競技協会の理事長を務めた。さらに400mHの福田時雄を加え、計6名の関大出身者が選手として出場している。一大学が一つの五輪に出場した人数（OBを含む）としては本連盟最多人数となっている。京都帝大も上記の3名が出演、立命館大学（以下立命大と略する）からは400mHの市原正雄が初めて出場し、本連盟関係者として過去最多となる10名の選手が出演した。福田、市原はともに日本学生記録も樹立している。なお、長尾がやり投で3回、谷口が100m、200mで3回、OBの大島が三段跳で1回、市原が400mHで1回日本選手権者となっている。

京都帝大、関大が雌雄を決して戦っていた当時の1934（昭和9）年の日本インカレ第7回大会は、関大では谷口、長尾の両エースが100mとやり投で優勝し、京都帝大では田島が走幅跳と三段跳で優勝、柳井深造が110mHで優勝する活躍をして、日本インカレにおける本連盟の男子総合として最高の成績である2位を関大が、京都帝大も3位となっている。三段跳では1位田島、2位原田、3位戸上、4位宮川行雄（中央大）、5位古田、6位高橋栄次（同大）が入賞しており、4位以外は本連盟加盟校の選手という素晴らしい結果を残している。

日本インカレの戦前の大会（計15回、第14回は中止）における本連盟加盟校の戦績（総合8位まで）は、関大が11回（最高順位2位）、京都帝大7回（最高順位3位）、同大3回（最高順位6位）、関西学院大学（以下関学大と略する）2回（最高順位5位）、立命大1回（最高順位7位）で、関大と京都帝大が本連盟の他の大学より当時は格段に競技力が高かったことを示している。

日本インカレの優勝者は、関大では谷口（7回）、800mで日本記録を2度更新し、日本選手権者にもなった藤枝昭英（4回）、大島（2回）、戸上（2回）、走幅跳の川岸兵二、100mの川手輝典、800mの小西秀夫、福田、800mの門田逸郎、100mの長田年弘、やり投の入野昌志と4×100mR、京都帝大では田島（3回）、相沢（2回）、柳井、原田、松野、ハンマー投の徳永博太郎と4×400mRとなっている。その他の学校では立命大から市原（2回）、関学大から800mの戸田一雄、棒高跳

の前田巖、和歌山高等商業学校（現在の和歌山大学、以下和高商と略する）から400mで三木重雄が優勝者に名前を連ねている。

現在のユニバーシアード（2021(令和3)年からはワールドユニバーシティゲームズに名称変更）にあたる国際学生競技会には、相沢、大島、同大の西貞一、田島、原田、谷口、長尾、前田が選ばれ、田島は1935（昭和10）年ブダペスト大会の走幅跳で7m52を跳躍し優勝、原田も7m37で3位となっている。また、谷口は1939（昭和14）年ウィーン大会の100mで10秒9をマークして銅メダルを獲得、同大会に関学大から初めて代表になったOBの前田は当時棒高跳で世界ランキング10位以内に相当する4m25の記録を有していたが、大会2日目の夜に、ドイツとポーランドの両国が国交を断絶したため、日本チームは第2次世界大戦の戦局により、大急ぎで引きあげる事態となり、出場せずに帰路についている。

—第6章— 関西インカレの1部、2部、3部制時代

1932（昭和7）年の第12回大会より1部、2部制が採用され、この年は関大、京都帝大、同大、立命大、神戸商業大学（現在の神戸大学、以下神戸商大と略する）の5校が1部校として、その他18校は2部校として出場している。1939（昭和14）年の第19回大会からは3部制となり、1949（昭和24）年の第26回大会まで継続された。現在の男子1部12校、2部約50校から比べると、当時の加盟校数は現在の半分程度であったにもかかわらず、3部制をとっていた理由は定かではないが、関西インカレ参加大学の競技レベルを均一にすることが主たる目的と推察される。なお、1部から3部まで1種目3名までエントリー可能であったことが当時のプログラムから判明している。

1934（昭和9）年に中国四国学生陸上競技連盟が設立されたため、この年以降は関西地区の大学（予科を含む）・旧制高等学校・旧制専門学校だけで関西インカレを行っている。当時の本連盟事務所は連関西事務所と同じ京都市内に置かれていたが、既に京都支部、大阪支部、兵庫支部の3支部が設けられており、京都支部には三高、同大、同志社高等商業学校（現在の同志社大学、以下同高商と略する）、京都府立医科大学（以下京医大と略する）、京都帝大、京都薬学専門学校（現在の京都薬科大学、以下京薬専と略する）、京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学、以下京高工と略する）、京都高等蚕業学校（現在の京都工芸繊維大学、以下京高蚕と略する）、大谷大学（以下大谷大と略する）、立命大、龍谷大学（以下龍谷大と略する）の11校が、大阪支部には関大、浪速高等学校（現在の大阪大学の前身の一つ、以下浪速高と略する）、日本大学専門学校（現在の近畿大学、以下日大専と略する）、大阪外国語学校（現在の大阪大学、以下大外語と略する）、大阪帝国大学（現在の大阪大学、以下大阪帝大と略する）、大阪高等医学専門学校（現在の大阪医科薬科大学、以下大高医専と略する）、大阪高等学校（現在の大阪大学の前身の一つ、以下大阪高と略する）、大阪歯科医学専門学校（現在の大阪歯科大学、以下大歯専と略する）、大阪商科大学（現在の大阪市立大学、以下大阪商大と略する）、和高商、昭和高等商業学校（現在の大阪経済大学、以下昭和和高商と略する）の11校が、そして兵庫支部には関学大、神戸商大、県立神戸高等商業学校（現在の兵庫県立大学、以下神高商と略する）、甲南高の4校が加盟していた。

—第7章— 支部インカレの開催

1935（昭和10）年4月28日京都植物園で三高、同大、同高商、京医大、京都帝大、京薬専、京高工、京高蚕、大谷大、立命大、龍谷大の11校が1部、2部制のもと第1回京都学生陸上競技対校選手権大会（以下京都インカレと称する）が行われ、1部は京都帝大が、2部は三高が初優勝している。また、同年6月9日大阪市立運動場で関大、浪速高、日大専、大外語、大阪帝大、大高医専、大阪高、大歯専、大阪商大、和高商、昭和和高商の11校が出場して第1回大阪学生陸上競技対校選手権大会（以下大阪インカレと称する）が開催され関大が初優勝している。なお、残存する本連盟

の資料では第1回大会は1953（昭和28）年となっており、大阪インカレがどのような経緯をたどって現在に至ったかは残念ながら不明である。また、同年6月23日神戸市民運動場で第1回兵庫学生陸上競技対校選手権大会（以下兵庫インカレと称する）が関学大、神戸商大、神高商、甲南高の4校が出場して行われ、関学大が初優勝している。

—第8章— 関西学生対校駅伝競走の開催

箱根駅伝に遅れること16年後の1936（昭和11）年2月2日、平安神宮から神戸大倉山公園までの8区間で第1回3支部対校駅伝競走が開催され、大阪支部が京都支部との接戦を制して優勝している。翌年の1937（昭和12）年1月31日に平安神宮から上甲子園までの7区間65.6kmで第1回関西学生対校駅伝競走大会（以下関西学生駅伝と略する）が行われ、関大、関学大、日大専、大阪商大の4校が出場し、関大が初優勝を成し遂げている。

ところで、1920（大正9）年に始まった箱根駅伝（第1回は早大、慶大、明大、東京高師の4校が参加し、「四大校駅伝競走」の名称でスタートしている）は有楽町報知新聞社前～箱根関所址（往復約195km）で開催されている。現在のように正月開催ではなく2月14日13時スタート、翌日の2月15日は7時スタートで行われていた。14日は土曜日のため午前中の授業が終了してから大会が開催されたため、ゴールの合図は花火で行っていたようである。箱根駅伝は関東学生対校駅伝競走大会のため、他地区学連の大学は原則参加できないが、戦前の1928（昭和3）年の第9回大会、1931（昭和6）年の第12回大会、1932（昭和7）年の第13回大会に関大が、1964（昭和39）年の第40回大会に立命大が、2004（平成16）年の第80回記念大会に京産大2名、立命大1名の選手が日本学連選抜としてオープン参加している。

さて、関西学生駅伝は1938（昭和13）年の第2回大会までは京都から神戸に向けて走っていたが、1939（昭和14）年の第3回大会から中断される1943（昭和18）年の第7回大会までは、神戸から京都に変更され、区間が9区間となり距離も約85kmに伸ばして開催された。第3回大会から第7回大会まで立命大が5連覇を成し遂げている。

関西学生駅伝よりも9年前の1928（昭和3）年1月に、京都にある大学、旧制高等学校、旧制専門学校、京都帝大、三高、同大、京薬専、大谷大、立命大、京医大の7校が参加して第1回京都学生対校駅伝競走大会が行われ、京都帝大が初優勝している。この大会は10区間約90km（京都御所→比叡山→浜大津→宇治→嵐山→京都御所）で行われ、関西学生駅伝よりも距離が長く、区間数も多いものであった。現在は、洛北周回コースで区間、距離を短縮して回数（2021（令和3）年で第88回大会）を重ねている。

—第9章— 第2次世界大戦までの関西インカレの猛者たち

1921（大正10）年第1回大会から110mHで4連覇を達成した同大の榎原は、同種目において4度日本記録を更新している。1924（大正13）年の第4回大会の投擲4種目（内、円盤投は優勝）で上位入賞し、五種競技でも優勝し関学総合初優勝に大きく貢献した渡部武寿は五種競技で1922（大正11）年の第2回大会から4連覇を達成。ハンマー投で日本記録を樹立した関学の寺田は1926（大正15）年の第6回大会を除く1923（大正12）年の第3回大会から1927（昭和2）年の第7回大会まで4回優勝している。大島は三段跳において1930（昭和5）年の第10回大会を除く1928（昭和3）年の第8回大会から1932（昭和7）年の第12回大会で4回優勝、大島と同じロスアンゼルス五輪の200m、400m、4×400mRに出場した同大の西は400mで1929（昭和4）年の第9回大会から4連覇、日本選手権も2回制している。関大の全盛期を支えた藤枝は800mで1933（昭和8）年の第13回大会を除く1930（昭和5）年の第10回大会から1935（昭和10）年の第15回大会で5回優勝、谷口は100mで1934（昭和9）年の第14回大会から4連覇、200mは1933年の

第13回大会、1935年の第15回大会を除く1932（昭和7）年の第12回大会から1938（昭和13）年第18回大会で5回優勝、長尾はやり投で1931（昭和6）年第11回大会から5連覇を達成。大室は三段跳で1939（昭和14）年第19回大会から4連覇し、関大の伝統を受け継いだ。総合優勝争いで常に関大に後塵を拝した京都帝大の松野は砲丸投、円盤投、ハンマー投で4年間に11回優勝し、砲丸投とハンマー投で1934年の第14回大会から4連覇する偉業を成し遂げている。

戦前の関西インカレ1部において4連覇（4回以上の優勝を含む）を成し遂げた選手は合計12名で、学校別では関大6名、京都帝大、関学、同大が各2名となっている。

中止になった連合主催の戦前の競技会

一般対学生陸上競技大会

この大会は、1931（昭和6）年の第6回明治神宮体育大会の一部として、明治神宮外苑競技場で第1回が開催された。第1回大会では、早大の織田が三段跳15m58、同じく早大の南部忠平が走幅跳7m98の世界記録を樹立し、また6種目で日本記録が誕生する大会であった。この大会は不定期に開催され、1940（昭和15）年の第5回大会頃から戦局が激化し、軍隊への召集者が増え記録への期待も薄れていった。翌年の第6回大会ではやり投とハンマー投の代わりに戦時色の濃い手榴弾投が行われた。本連盟から藤枝、原田、大島、西、柳井、市原、長尾、門田たちが出場し、学生勝利に貢献している。この大会は、1955（昭和30）年に復活し、第6回大会まで実施されたが、その後1961（昭和36）年から現在行われている秩父宮賜杯実業団・学生対抗陸上競技大会（以下実学対抗と称する）として新しいスタートを切ることになる。

全日本学生東西対抗陸上競技大会

1938（昭和13）年から毎日新聞社により、新しいタレントの発掘の場、陸上競技会への登竜門として中学校東西対抗戦とともに開催された大会であったが、東軍が常に圧勝し、対抗戦としては魅力に欠ける大会であった。戦前の大会は全て関西の競技場で行われた。第4回大会を最後に第2次世界大戦のため中止となっている。谷口、前田、戸上、三木、大室、円盤投の佐久間秀明（京都帝大）、入野がこの大会で優勝している。1947（昭和22）年、戦後の学連再建の原動力となった早大の鈴木義博と関大の入野が毎日新聞社に同大会の再開を申し入れ、新聞社側の担当者であった関大OBの中島直矢の献身的な協力で実現し、1957（昭和32）年には女子の部も新設されたが、1960（昭和35）年で中止となっている。

—第10章— 第2次世界大戦でインカレ、駅伝中断

1942（昭和17）年4月、体育の戦時体制化のため大日本体育協会は大日本体育会（会長：東条英機内閣総理大臣）に改称し、加盟競技団体を解消して運動部会として組織され、陸連は陸上競技部会となった。また、学生や生徒の体育に関する国家的な統制組織の確立をはかるため、各種目団体（連合等）は解散し大日本学徒体育振興会（1941（昭和16）年12月24日発足）に合流させられることになる。以後この振興会は、第2次世界大戦が終結するまで、学生や生徒の体育運動に関する統制組織（文部大臣を長とする文部省の外郭団体）として中心的役割を果たすことになる。このような状況となったため、関西インカレは1942年6月の第22回大会で、また関西学生駅伝も1943（昭和18）年1月の第7回大会で中断された。

1943年以降の体育運動は行軍、銃剣道、射撃等の軍事訓練と海洋、航空等の特技訓練に重点が置かれ、戦力増強に直接役立たない体育は中止させられ、陸上競技も従来の競技種目はなくなり、重量運搬、手榴弾投、25km団体継走などの種目が実施された。

—第 11 章— 関西インカレ、駅伝が再開。西日本インカレ始まる

終戦の翌年の 1946 (昭和 21) 年 7 月、西京極陸上競技場で全関西学生陸上競技選手権大会が舉行されている。100m、400m、1500m、10000m、110mH、4×100mR、4×400mR、走高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投の計 12 種目を出場校が少なかったため 1 部制の対校戦として 1 日で行われた。関学大が優勝しているが関西インカレの優勝回数にはこの大会は含まれていない。

関西インカレ再開に先立ち、1947 (昭和 22) 年 2 月に第 8 回関西学生駅伝が神戸駅から京都岡崎公園までの 9 区間 86km で行われ、摂南工業専門学校 (現在の大阪工業大学、摂南大学の前身) が初優勝を成し遂げている。1948 (昭和 23) 年の第 9 回大会から 1954 (昭和 29) 年の第 16 回大会までは 1951 (昭和 26) 年の第 13 回大会を除いて立命大が優勝 5 回・準優勝 2 回、関大が優勝 2 回・準優勝 5 回と雌雄を決するレースを繰り返していった。第 13 回大会は関大が優勝したが、走路間違いを起こしており、その記録は参考記録として当時の新聞には記載されている。1955 (昭和 30) 年の第 17 回大会で近畿大学 (以下近大と略する) が初優勝し、翌年の第 18 回大会も連覇した。1958 (昭和 33) 年の第 20 回大会から 1961 (昭和 36) 年の第 23 回大会までは、2 日間に亘り、びわ湖を 1 周するコースで実施されている。距離は 13 区間約 170km で、選手は両日とも出場可能であったため有力選手の多くは 2 日間出場していた。

関西インカレは 4 年の空白期間の後、1947 (昭和 22) 年 6 月、第 24 回大会として西京極陸上競技場で開催されている。同大会は戦前と同様に 3 部制で実施され、戦前の強豪校であった関大、京都大学 (以下京大と略する) に代わり、いち早く戦力が補強できた関学大が 1 部で 3 度目の総合優勝を果たし、第 25 回大会、第 26 回大会も優勝し 3 連覇を達成した。1952 (昭和 27) 年の第 29 回からは 1 部、2 部制に変更され、京大が戦前の大会として最後の大会となった 1942 (昭和 17) 年の第 22 回大会以来、8 度目の総合優勝を成し遂げているが、1 部総合優勝はこの大会が最後となっている。なお、京大は 1956 (昭和 31) 年の第 33 回大会で初の 2 部降格を経験することになる。戦力が充実してきた関大が 1950 (昭和 25) 年の第 27 回大会以降総合優勝するようになり、前述の第 29 回大会以外は 1962 (昭和 37) 年の第 39 回大会まで継続している。この間、清水省三が砲丸投、大原正義がやり投で 4 連覇を達成し、関大の総合優勝に貢献した。

1948 (昭和 23) 年 7 月、中モズ競技場にて秩父宮賜杯第 1 回西日本学生陸上競技対校選手権大会 (以下西日本インカレと称する) が開催され、立命大が総合優勝している。立命大は関西インカレの総合優勝はこの時まで一度も成し遂げていないが、1500m、10000m で田辺晃義、400mH で村山治実、走高跳で太田庄次、走幅跳・三段跳で下部賢一が優勝、実施 18 種目中 6 種目で優勝し総合優勝に貢献した。1949 (昭和 24) 年の第 2 回大会は関西インカレ 3 連覇を達成した関学大が 1947 (昭和 22) 年の日本インカレ第 16 回大会のハンマー投に優勝した榎内重之、1950 (昭和 25) 年の日本インカレ第 19 回大会、翌年の第 20 回大会のやり投を連覇する堀内哲二、400m の矢野嘉一郎、110mH の児島欣一が個人で優勝し、また 4×100mR、4×400mR でも優勝して初の総合優勝を成し遂げている。1950 (昭和 25) 年の第 3 回大会以降、中止となった 1952 (昭和 27) 年の第 5 回大会をはさみ、関大が 1956 (昭和 31) 年の第 9 回大会まで 5 連覇したが、翌年の第 10 回大会以降は中京大学 (以下中京大と略する) が躍進し、関大の総合優勝は 1961 年 (昭和 36) 年の第 14 回大会が最後となっている。

個人では戦後も引き続き競技者として活躍した関大の入野が 1947 (昭和 22) 年の日本インカレ第 16 回大会、翌年の第 17 回大会のやり投で連覇し、戦前の第 15 回大会を含めると 3 連覇を成し遂げ、1946 (昭和 21) 年に再開された日本選手権でもそれ以降 3 連覇を達成した。また、京大の中井善夫が 110mH で日本インカレ第 17 回大会、翌年の第 18 回大会で連覇、2 部校からも第 16 回大会の三段跳で京都工業専門学校 (現在の京都工芸繊維大学) の山本忠が、1952 (昭和 27) 年の第 21 回大会の 20km で神戸商科大学 (現在の兵庫県立大学) の浜崎芳宏が当時の日本学生記録となる 1 時間 8 分 28 秒で、翌年の第 22 回大会では京都学芸大 (現在の京都教育大学、以下京教大と略

する)の花田登が400mHで優勝している。

1951(昭和26)年、ニューデリーで開催されたアジア大会に関大の田尾一郎が800mと4×400mRに出場し、4×400mRで銀メダルを獲得している。戦後、はじめて五輪への出場が可能となった1952(昭和27)年のヘルシンキ五輪には、同大的場諄吉が400m、4×400mRに出場、同大会の400mで49秒56の電気計時日本記録(非公認)を樹立、京大の山本弘一は4×400mR、女子で本連盟初の五輪選手となった帝塚山学院短期大学の吉川綾子は、日本選手権を制した100mと走幅跳で五輪に出場している。吉川は前年、広島で行われた国民体育大会で本連盟女子選手初の日本記録となる100m12秒0を樹立した。ヘルシンキ五輪では100m13秒00の電気計時日本記録(非公認)を樹立している。1952(昭和27)年の日本インカレ第21回大会では走幅跳で優勝した。

なお、五輪における電気計時が正式に採用されたのは1972(昭和45)年のミュンヘン五輪からとなっている。また、1975(昭和50)年以降、電気計時日本記録は公認記録となっている。

—第12章— 光華女子短期大学、日本インカレ2度総合優勝

戦後になってから女子の部が各インカレで開催されるようになる。最初の大会は1948(昭和23)年の日本インカレで、西日本インカレは1949(昭和24)年、関西インカレは1953(昭和28)年から始まっている。当時、女子で本格的に陸上競技に取り組んでいた学校は関西では光華女子短期大学(以下光華短大と略する)のみであった。大谷大で十種競技をしていた小池良一が光華短大の監督に就任し、関西で初のアンツーカーグラウンドを整備して強化に努めた結果、関西インカレは1953(昭和28)年の第30回大会から1963(昭和38)年の第40回大会まで11連覇を達成している。この記録は大阪体育大学(以下大体大と略する)の25連覇に次ぐ偉大な記録となっている。また、日本インカレは初参加の1950(昭和25)年の第19回大会で総合3位となり、1963(昭和38)年の第32回大会まで毎年総合8位以内に入賞し、1953(昭和28)年の第22回大会と1960(昭和35)年の第29回大会で総合優勝を達成している。西日本インカレは1954(昭和29)年の第7回大会から1963(昭和38)年の第16回大会まで中京女子短期大学(中京大学の前身)、中京大と総合優勝争いを演じ、優勝8回と準優勝2回を成し遂げている。

個人では、日本選手権を現役とOGで2回制した宮下美代が1952(昭和27)年のヘルシンキ五輪80mHに出場、1954(昭和29)年のマニラアジア大会にもOGで80mHに出場し銀メダルを獲得。南部敦子(走幅跳の日本記録保持者であった南部忠平の長女)も同じアジア大会の100mにおいて12秒5で金メダル、200m、走幅跳、4×100mRでは銀メダルを獲得した。南部は、同大会の200mで25秒3の日本記録を樹立し、五種競技でも2度日本記録を樹立している。光華短大から1953(昭和28)年に同大に編入した岡本貴美子は同じアジア大会の100m、200m、4×100mRに出場し、4×100mRで銀メダルを獲得している。1958(昭和33)年の東京アジア大会の4×100mRに藤井芳枝が出場し金メダルを獲得、1961(昭和36)年、小林祐子はOGでユニバーシアードソフィア大会の200mに出場した。林孝子は1962(昭和37)年、彦根で当時実施されていた関西学連対東海学連対抗戦の400mで59秒5の日本記録を樹立し、同年の日本選手権者にもなっている。1963(昭和38)年に走高跳で2度の日本記録、3度の日本学生記録を樹立し、同年開催されたユニバーシアードポルト・アレグレ大会の80mHと走高跳に出場した鳥居充子は、1964(昭和39)年の東京五輪にOGで走高跳に出場した。

日本インカレにおける個人の戦績は、1952(昭和27)年の第21回大会で岡本が100mと200m、宮下が80mH、野村妙子が砲丸投、円盤投、やり投の3種目で優勝している。岡本は同大に編入後の1953(昭和28)年の第22回大会の100mと200mで連覇を達成した。また、南部が走幅跳で初優勝、野村が円盤投で連覇を果たし、1954(昭和29)年の第23回大会で南部が100m、200m、走高跳の3種目で優勝、1958(昭和33)年の第27回大会では藤井が100m、200mで優勝している。1959(昭和34)年の第28回大会で小林が200m、4×100mRで優勝、1960(昭和35)年の

第 29 回大会で小林が 100m で優勝、200m で連覇を達成し、また同年の日本選手権 100m、200m も制した。梅田登喜子は第 29 回大会の 80mH で優勝、4×100mR も連覇した。4×100mR は 1962 (昭和 37) 年の第 31 回大会で 4 連覇を達成、同大会では鳥居が走高跳で優勝している。しかしながら、この大会を持って光華短大の日本インカレの優勝者は途絶えることになる。なお、大島セツ子 (一般財団法人京都陸上競技協会名誉会長田中セツ子) は、1957 (昭和 32) 年の第 26 回大会の砲丸投と翌年の第 27 回大会の砲丸投、円盤投に出場し、惜しくも表彰台は逃したもののともに 4 位に入賞する活躍をしている。

—第 13 章— 戦前の私学伝統校、再び国際舞台に

1956 (昭和 31) 年のメルボルン五輪の走幅跳に関大の園田裕四郎 (本連盟元会長) は OB として出場している。1953 (昭和 28) 年の国際学生スポーツ週間ドルトムント大会 (ユニバーシアード大会の前身) の走幅跳、三段跳、4×100mR に出場し、1954 (昭和 29) 年の日本インカレ第 23 回大会の 110mH、走幅跳、三段跳の 3 種目で優勝している。同年のマニラアジア大会の走幅跳では銀メダルを獲得している。同大会には関大の玉江和男も OB で三段跳に出場している。1955 (昭和 30) 年の学生スポーツ週間サン・セバスティアン大会にも走幅跳、三段跳、4×100mR、アカデミーレーの 4 種目に出場、1958 (昭和 33) 年の東京アジア大会の走幅跳にも出場した。また、日本選手権の走幅跳を OB で 2 回制している。

1957 (昭和 32) 年の学生スポーツ週間パリ大会には、立命大の宮田孜が 100m、200m に出場、1959 (昭和 34) 年の日本インカレ第 28 回大会 100m で優勝した同大の長田義昭は、同年ユニバーシアードトリノ大会の 100m、4×100mR に、また関大 OB の河野八郎が走幅跳に出場している。

関学大の短距離がこの時期躍進している。1957 (昭和 32) 年、200m で 21 秒 7 の日本学生記録を樹立した柳恭博は、1958 (昭和 33) 年の東京アジア大会の 200m、4×100mR に出場し 4×100mR で銀メダルを獲得、同年の日本インカレ第 27 回大会 200m で優勝、後輩の上田康も 400m で優勝し、彼らが出場した 4×100mR は 1951 (昭和 26) 年の第 20 回大会に次ぎ関学大として 2 度目の優勝を果たし、翌年の日本選手権でも同じメンバーで 4×100mR を制している。1960 (昭和 35) 年の日本インカレ第 29 回大会の走幅跳で 7m50 を跳んで 2 位になった蝦名純は、同年のローマ五輪に関学大から初の五輪出場を果たした。1961 (昭和 36) 年のユニバーシアードソフィア大会に浅井浄が 100m、4×100mR に出場し、4×100mR で銀メダル、翌年のジャカルタアジア大会の 4×100mR にも出場し、銀メダルを獲得している。三宅克宏は 110mH でユニバーシアードソフィア大会に続き 1963 (昭和 38) 年のユニバーシアードポルト・アレグレ大会に連続出場し、同大会では 4×100mR も出場した。三宅は 1961 年の日本インカレ第 30 回大会 110mH、浅井は 1963 年の第 32 回大会 100m、また二人は同大会の 4×100mR でも優勝している。優勝メンバー (三宅、小西廉造、井口宜紀、浅井) はこの年北九州市鞆ヶ谷で行われた五輪候補記録会で日本代表チームを破り 40 秒 9 の日本記録を樹立した。三宅は 110mH、小西は 200m、井口は走幅跳、浅井は 100m のインターハイチャンピオンであった。また、浅井は戦前の関大の谷口に次ぎ関西インカレ 100m で 1960 (昭和 35) 年の第 37 大会から 4 連覇を達成している。1964 (昭和 39) 年の東京五輪には浅井が 4×100mR、西日本インカレ 110mH で 1960 年の第 13 回大会から 4 連覇を達成した田中章が OB で 110mH に出場を果たし、田中は 1965 (昭和 40) 年のユニバーシアードブダペスト大会の 110mH にも出場した。関学大が単独チームで 4×100mR の日本記録を出した大会において田中は 14 秒 5 の日本学生記録を樹立し、OB で日本選手権を 2 回制している。なお、「短距離の関学」と言われていた当時、正木定雄が 1500m で関西インカレ 4 連覇を達成、男子 1 部 1500m で初めての偉業を成し遂げている。同大からは西日本インカレの 100m や砲丸投で優勝経験のある林寿男が浅井と同じ東京五輪の 4×100mR の代表選手に選ばれ、足立長彦が西日本インカレの走高跳で 1963 年の第 16 回大会から 4 連覇を成し遂げている。

1967（昭和42）年のユニバーシアード東京大会には、関大の池田豊が800mに出場して戦前の藤枝たちの伝統を、関学大の星加利樹が4×400mRに出場して「短距離の関学」を引き継いでいる。また、星加は関西インカレ400mで1964（昭和39）年の第41回大会から4連覇も達成している。関大の増田皓三が1968（昭和43）年の日本インカレ第37回大会から20kmで3連覇、1969（昭和44）年の第38回大会では1時間2分5秒の日本学生記録を樹立した。1970（昭和45）年、1971年（昭和46）年の日本インカレ第39回大会、第40回大会の400mHで同大の吉田彰が、走幅跳で関大の前田幹郎が連覇している。また、西村（旧姓吉田）彰はOBで1974（昭和49）年のテヘランアジア大会の400mH、4×400mRに出場し、400mHでは日本選手権を2回制している。

1961（昭和36）年9月、一般対学生陸上競技大会の流れをくむ第1回実学対抗が小田原で開催されている。現在もこの大会は継続して行われているが、第1回大会から関東学連加盟校の学生の競技成績が高いために、本連盟加盟校の出場選手は少なく、この大会の結果は資料編に記載しているが、約60回を重ねる大会において優勝者は50名（延人数）を下回っている。

また、関西インカレの総合優勝に関しては、1963（昭和38）年の第40回大会から初の2連覇を達成した同大、1966（昭和41）年の第43回大会において10数名の部員で6度目の総合優勝を果たした関学大以外、関大が1969（昭和44）年の第46回大会まで総合優勝を重ねるが、この大会をもって関大の関西インカレの1部総合優勝は途絶えることになる。なお、関大の1部総合優勝26回は現時点で男子1部校の最多優勝回数となっている。

—第14章— インカレ、駅伝の勢力図に大きな変化

1970（昭和45）年を過ぎると、関西の大学でも学園紛争の影響で、伝統校の多くが低迷期に入っている。関大、立命大、関学大が数度2部校として出場するのもこの時期である。伝統校に代わり、1963（昭和38）年に初めて関西インカレ1部校に昇格した大阪商業大学（以下大商大と略する）が1970（昭和45）年の関西インカレ第47回大会で初優勝を果たしている。大商大の総合優勝はこの年のみであるが、本吉栄樹は砲丸投で1967（昭和42）年から4連覇を達成している。本吉は、1969年（昭和44）年、翌年の日本インカレ第38回大会、第39回大会の砲丸投で2連覇を果たし、第39回大会では円盤投でも優勝、ハンマー投では同僚の河添文夫が優勝している。

戦後のベビーブームを反映して、1965（昭和40）年以降に設置された大学が新たに加盟し活躍するようになる。特に大体大と京都産業大学（以下京産大と略する）が目覚ましい活躍を残している。男子1部では大体大が1971（昭和46）年の関西インカレ第48回大会から1978（昭和53）年の第55回大会まで8連覇、京産大が1979（昭和54）年の第56回大会から1981（昭和61）年の第58回大会まで3連覇を達成し、その後1996（平成8）年の第73回大会まで、京産大が15回、大体大が11回成し遂げるといふ、「二強時代」であった。

なお、1976（昭和51）年の第53回大会から関西インカレの活性化を目的に「ボーナス得点制」が導入されている。

ボーナス得点制の効果

- ① **6点制で総得点238点を大体大が獲得し女子総合優勝**
1984（昭和59）年の第61回大会で関西学生記録2、大会記録4、大会タイ記録1のボーナス得点で女子総合得点として過去最高得点の238点を獲得。
- ② **関学大が棒高跳1種目で56点を獲得し総合優勝に貢献**
2008（平成20）年の第85回大会で日本学生記録1、関西学生記録1、大会記録1を出してボーナス得点とあわせて56点を獲得。

女子については光華短大に代わり、大体大が頭角を現してくる。1966（昭和41）年の第43回大会で関西インカレ総合初優勝を果たしてから、1977（昭和52）年の第54回大会、翌年の第55回大会、1982（昭和57）年の第59回大会に武庫川女子大学（以下、武庫女大と略する）が総合優勝を成し遂げている以外、2007（平成19）年の第84回大会まで39回総合優勝を達成しており、この優勝回数は男女を含めて最多となっている。関西インカレの女子対校戦の実施回数は69回となっており、その半数以上は大体大が総合優勝していることになる。

関西学生駅伝は、1964（昭和39）年以降は西京極から須知折り返しのコースとなり5年間開催、1969（昭和44）年以降は西京極から福知山のコースに変更され4年間行われている。この頃から交通事情により、関西学生駅伝を実施する場所が制限され、1973（昭和48）年の第35回大会からは近江八幡市内の農道を含むコースに変更し、1983（昭和58）年の第45回大会までの11年間は、このコースで大会が行われた。1984（昭和59）年の第46回大会から1986（昭和61）年の第48回大会までの3大会は淀川河川敷折り返し7区間85kmで実施されたが、学生駅伝とは言い難い環境の大会であった。1987（昭和62）年の第49回大会から、現在開催されている丹後半島で行われることになり学生駅伝らしい大会となった。

駅伝の伝統校でもあった関大は、1969（昭和44）年の第31回大会を最後に優勝から遠ざかるようになり、関西インカレと同様に伝統校に代わり、大商大が1966（昭和41）年の第28回大会で初優勝を果たし、1970（昭和45）年の第32回大会から1972（昭和47）年の第34回大会まで3連覇している。1973（昭和48）年の第35回大会で大体大が初優勝し、1976（昭和51）年の第38回大会まで4連覇を成し遂げるが、翌年の第39回大会で初優勝を飾った京産大が2002（平成14）年の第64回大会まで実に26年連続で優勝を成し遂げている。

1970（昭和45）年、秩父宮賜杯第1回全日本大学駅伝対校選手権大会（以下全日本大学駅伝と略する）が熱田神宮から伊勢神宮内宮までの8区間118kmで実施されている。同大会は当初、箱根駅伝終了後の1月中旬頃に行われていたが、1988（昭和63）年の第20回大会から大会日程が現在の11月上旬に変更された。関東学連以外では福岡大学（以下福岡大と略する）が3回優勝、京産大が1986（昭和61）年の第17回大会で初優勝を果たしている。なお、京産大を除き同大会で8位までに入賞したのは大体大と大商大であるが、大体大3回、大商大1回の入賞は現在の11月上旬に変更されるまでのものである。なお、大体大の丸山雅清が1981（昭和56）年の第12回大会1区、京産大の足立亘と名倉直也は京産大が初優勝した1986（昭和61）年の第17回大会の2区、5区、足立泰男が1988（昭和63）年の第19回大会の3区で区間賞を獲得している。

西日本インカレの男子は、関大が最後に総合優勝して以降の1962（昭和37）年から20世紀が終わるまで、福岡大が2回総合優勝をしている以外、中京大が35回総合優勝を成し遂げている。この間、京産大がトラック優勝を5回、フィールド優勝を1回果たしているが、総合優勝は達成できていない。大体大はフィールド優勝1回のみとなっている。女子については、同じように中京大がほとんど総合優勝している。1975（昭和50）年の第28回大会、翌年の第29回大会で大体大が連覇、1977（昭和52）年の第30回大会で武庫女大が総合優勝を成し遂げている。

日本インカレは1963（昭和38）年第32回大会で関学大が総合4位に入賞して以降、20世紀が終わるまでに男子が総合8位以内に入ったのは、1970（昭和45）年第39回大会の同大の総合7位と1985（昭和60）年第54回大会の京産大の総合6位のみとなっている。女子に関しては大体大が1966（昭和41）年に初めて総合6位に入賞して以降、総合8位以内に14回入賞という活躍をしており、最高順位は4位となっている。大体大以外には武庫女大2回、天理大学（以下天理大と略する）、京産大が1回入賞している。

個人の成績も大学の成績と同様にこれまでの伝統校に代わって、大体大や京産大の選手が五輪、ユニバーシアード、アジア大会の代表となっている。その先陣をきったのが大体大勢で、1965（昭和40）年、1966年（昭和41）年、1968（昭和43）年の日本インカレ第34回大会、第35回大会、第37回大会の走高跳で3度優勝し日本選手権も制した清水修、1967（昭和42）年の日本インカレ

第36回大会200m、1969（昭和44）年の日本インカレ第38回大会100mで優勝、日本選手権は100m、200mで3回選手権者となり、関西インカレの200mで1966年第43回大会から4連覇を達成した辻下美代子の二人が1966年のバンコクアジア大会の走高跳、200mと4×100mRに出場している。清水は銀メダル、辻下は200mで銀メダル、4×100mRで金メダルを獲得した。辻下は1967年のユニバーシアード東京大会の200mと4×100mRにも出場し、4×100mRで銀メダルを獲得、本連盟女子選手としてユニバーシアード大会初のメダリストに輝いている。

1972（昭和47）年のミュンヘン五輪には、大体大として初の五輪選手となる山三保子が走高跳にOGで出場している。山は1968（昭和43）年の関西インカレ第45回大会、また1971（昭和46）年の関西インカレ第48回大会、西日本インカレ第24回大会で優勝、また西日本インカレ第40回大会で準優勝している。

1975（昭和50）年のユニバーシアードローマ大会には、本連盟の棒高跳選手として初めて5mを跳び、5m15の関西学生記録を20年以上保持し続け日本選手権者にもなった小西清隆が棒高跳、1983（昭和58）年の同エドモントン大会には、七種競技日本記録保持者であった辰巳公子が七種競技で出場している。1985（昭和60）年の同神戸大会には、辰巳がエドモントン大会に引き続きOGで連続出場を果たし、OBの梅本公士が走幅跳、現役の黒田千寿子が10000mに出場している。黒田は全日本大学女子駅伝対校選手権大会（以下全日本大学女子駅伝と略する）の1983年の第1回大会から1987（昭和62）年の第4回大会に4年連続出場し、1984（昭和59）年の第2回大会、翌年の第3回大会の連続優勝に貢献しているが、大体大の全日本大学女子駅伝の優勝はこの2大会のみとなっている。OGの深尾真美もマラソンに出場し、本連盟初のユニバーシアード女子金メダリストになっている。深尾は5000mと10000mで日本学生記録を樹立し、1986（昭和61）年のソウルアジア大会の10000mにも出場した。なお、深尾の先輩である田中三恵は、1980（昭和55）年に10000mで36分56秒4の日本記録を樹立している。また、1987年のユニバーシアードザグレブ大会にはOGの金刺貴子がマラソンに出場して銀メダルを獲得している。

この他、藤岡芳子が80mHで1967（昭和42）年の関西インカレ第44回大会と翌年の第45回大会、100mHで1969（昭和44）年の関西インカレ第46回大会と翌年の第47回大会、太宰知子が100mHで1972（昭和47）年の関西インカレ第49回大会から、和田峰子も走幅跳で同大会から4連覇を達成している。なお、太宰は現役、OGで日本選手権を2回制している。木口真佐江が400mで1973（昭和48）年の関西インカレ第50回大会から、井垣光代が800mで1984（昭和55）年の関西インカレ第61回から4連覇を達成している。木口はOGで1978（昭和53）年のバンコクアジア大会の400mHで銅メダル、4×400mRで金メダルも獲得した。1976（昭和51）年の日本インカレ第45回大会では木口が400m、合田久美子が100mH、田辺映子が走高跳の3種目で優勝して総合4位に貢献している。また、脇畑留美子は1979（昭和54）年の日本インカレ第48回大会の800m、1500mで優勝している。

記録面では藤岡が1969（昭和44）年の関西インカレ第46回大会の五種競技で3744点の日本記録を樹立して優勝している。木口が1976（昭和51）年に400mで56秒3、江原紀子が1981（昭和56）年の関西インカレ第58回大会100mHで13秒5の日本記録を、波多野浩美が400mHで1979（昭和54）年に1分3秒29の日本記録を樹立している。また、阿部しのぶは1979（昭和54）年にマラソンで2時間56分46秒の日本学生記録を樹立した。

一方、京産大ではこの時期、投擲・長距離選手が顕著な活躍をしている。1972（昭和47）年のミュンヘン五輪以来、本連盟から3大会ぶりの出場となったOBの溝口和洋がやり投で1984（昭和59）年ロスアンゼルス、1988（昭和63）年ソウルの五輪に連続出場、1985（昭和60）年のユニバーシアード神戸大会にも出場し、本連盟投擲選手として初の入賞を果たしている。現役の1983（昭和58）年の日本インカレ第52回大会で優勝し、国民体育大会では82m70を投げて日本学生記録を樹立、また日本選手権はOBで通算7回制している。1986（昭和61）年ソウル、1990（平成2）年北京、1994（平成6）年広島のアジア大会にも3大会連続で出場した。なお、溝口は1989（平成

元) 年 5 月、アメリカのサンノゼで行われた大会で 87m60 を投げ、同年の世界ランキング 1 位の記録をマークしている。この記録は当時の世界記録にわずか 6cm 足りない大記録であった。

1986 (昭和 61) 年の日本インカレ第 55 回大会 10000m を制し、ユニバーシアードザグレブ大会のマラソンに OB で出場した泉宜廣は本連盟初の男子マラソンの金メダリストとなり、北京アジア大会のマラソンにも出場した。泉は京産大が全日本大学駅伝で初優勝した 1986 (昭和 61) 年の第 17 回大会の 3 区を走ったメンバーでもある。この大会の優勝メンバーの大河原宏樹は 1985 (昭和 60) 年の日本インカレ第 54 回大会、翌年の第 55 回大会の 3000mSC で連覇、足立泰男は 1987 (昭和 62) 年の日本インカレ第 56 回大会の 10000m と 30km の 2 種目で優勝している。この他、大西繁人が円盤投で 1977 (昭和 52) 年の関西インカレ第 54 回大会から 4 連覇を達成し、また関西学生記録も樹立している。

—第 15 章— 戦後のインカレにおいて本連盟で最も活躍した選手

第 2 次世界大戦後、インカレ (日本インカレ、西日本インカレ、関西インカレ) で最も活躍した男子、女子選手がこの時期に出ている。男子では天理大の塚本誠志が砲丸投で 1973 (昭和 48) 年の関西インカレ第 50 回大会から、同年の西日本インカレ第 26 回大会から 4 連覇を成し遂げている。本連盟で両インカレにおいて 4 連覇を達成した男子は塚本だけである。また、日本インカレも 1974 (昭和 49) 年の第 43 回大会から 3 連覇している。1 年生の 1973 (昭和 48) 年の第 42 回大会は惜しくも 2 位であったが、男子で戦後のインカレにおいて最も活躍した選手である。塚本の後輩で日本選手権を制した三浦重則も砲丸投で 1979 (昭和 54) 年の関西インカレ第 56 回大会から砲丸投で 4 連覇し、1982 (昭和 57) 年のニューデリーアジア大会に出場した。女子では同じく天理大の北森郁子が円盤投で 1981 (昭和 56) 年の関西インカレ第 58 回大会から、同年の西日本インカレ第 34 回大会から 4 連覇を成し遂げている。本連盟で両インカレにおいて 4 連覇を達成した女子は北森だけであり、現役および OG で通算 8 回日本選手権者にもなっている。また、日本インカレも 1982 (昭和 57) 年の第 51 回大会から塚本と同じく 3 連覇を成し遂げ、1 年生の 1981 (昭和 56) 年の第 50 回大会でも塚本同様に 2 位となっており、女子で戦後のインカレにおいて最も活躍した選手である。1984 (昭和 59) 年に 53m08 の日本記録を樹立しているが、現在に至るまで 37 年間更新されておらず、最古の関西学生記録となっている。また、OG で 1985 (昭和 60) 年のユニバーシアード神戸大会、1986 (昭和 61) 年のソウルアジア大会、1991 (平成 3) 年の世界陸上競技選手権 (以下世界陸上と略する) 東京大会、1994 (平成 6) 年の広島アジア大会に出場した。

天理大は短距離、跳躍でもこの時期に優秀な選手を輩出している。広瀬栄明は 1977 (昭和 52) 年の関西インカレ第 54 回大会の 100m、棒高跳で優勝、1978 (昭和 53) 年の日本選手権で 200m を制し、また同年のバンコクアジア大会の 200m に出場、1979 (昭和 54) 年の日本インカレ第 48 回大会 200m でも優勝している。加藤純子は現在も女子走高跳 1m84 の関西学生記録保持者であり、1983 (昭和 58) 年の日本インカレ第 52 回大会で優勝、柴田博之は 1985 (昭和 60) 年の日本インカレ第 54 回大会に優勝し、1988 (昭和 63) 年のソウル五輪に OB で出場、また日本選手権も 2 回制している。片渕貴美は走幅跳で 1988 (昭和 63) 年の関西インカレ第 65 回大会から、竹井義弘は棒高跳で 1991 (平成 3) 年の第 68 回大会から、それぞれ 4 連覇を達成し、片渕は 1990 (平成 2) 年の日本インカレ第 59 回大会でも優勝を果たした。

同大では松浦成夫が 200m で 1977 (昭和 52) 年の関西インカレ第 54 回大会から、手平裕紀が 110mH で 1983 (昭和 58) 年の第 60 回大会から 4 連覇を達成している。手平は 1986 (昭和 61) 年の日本インカレ第 55 回大会に勝利し、1988 (昭和 63) 年の第 72 回日本選手権を OB で制している。また、岩岡聡は走幅跳で 1982 (昭和 57) 年の日本インカレ第 51 回大会、翌年の第 52 回大会で連覇。小川智央は円盤投で 1985 (昭和 60) 年の関西インカレ第 62 回大会から 4 連覇を達成し、日本インカレも 1985 (昭和 60) 年の第 54 回大会、翌年の第 55 回大会で連覇を果たしている。

京大の月山敦詞は三段跳で1988(昭和63)年の日本インカレ第57回大会において15m99を跳び優勝している。この記録は1937(昭和12)年に戸上が出した当時の日本学生記録でもあった15m86の関西学生記録を51年ぶりに書き換えたものである。

大体大以外の女子では関西インカレでこの時期3回総合優勝している武庫女大の選手が活躍している。逢坂十美が1980(昭和55)年の関西インカレ第57回大会から100m、200mの両種目で4連覇を達成している。この2種目4連覇(4回以上の優勝を含む)は、逢坂と男子の谷口の二人だけが達成している。逢坂は、日本インカレでも1981(昭和56)年の第50回大会の100m、200mで優勝しており、1983(昭和58)年の静岡リレーカーニバルでは11秒7の日本学生記録を樹立した。なお、先輩の中野智子が1977(昭和52)年に100m12秒10の電気計時日本学生記録を、400mHで佐々木洋子が1977(昭和52)年に1分6秒7、中井麻由美が1978(昭和53)年に1分4秒9の日本記録を樹立している。佐々木はOGで日本選手権1500mも制している。

—第16章— インカレ(関西、西日本、日本)で新しい潮流

関西インカレ男子1部は1997(平成9)年の第74回大会で立命大が初の総合優勝、1999(平成11)年の第76回大会で関学大が33年ぶりに総合優勝した以外は、2007(平成19)年までは男子は引き続き京産大、大体大が総合優勝し、女子は大体大が連勝を継続している。

2008年以降はその勢力図が大きく変化し、男子1部は2008(平成20)年の第85回大会から2021(令和3)年の第98回大会まで関学大が7連覇を含め総合優勝10回、立命大が総合優勝4回を果たしている。女子は2010(平成22)年の第87回大会で初の総合優勝を果たす立命大が7回、2008(平成20)年の第85回大会で1982(昭和57)年以来26年ぶり4回目の総合優勝を果たした武庫女大が翌年も連覇を成し遂げている。

新規加盟してきた東大阪大学(以下東大阪大と略する)は、インターハイの女子総合上位常連校である東大阪大敬愛高校から東大阪大に進学してきた選手のみならず少数精鋭で2011(平成23)年の関西インカレ第88回大会、翌年の第89回大会で連覇を果たしている。2016(平成28)年には大阪成蹊大学(以下大阪成蹊大と略する)が、2021(令和3)年には園田学園女子大学(以下園田学女大と略する)が、初の総合優勝を成し遂げている。この3校は高校の指導者が大学の指導者となり、本連盟に新たな息吹を吹き込んだ。

関西インカレ4連覇を達成した選手は、男子では関学大の広野雄大が十種競技、立命大の佐々木竜一が走高跳で2008(平成20)年の第85回大会から、立命大の今崎俊樹が1500mで2009(平成21)年の第86回大会から、関学大の多田修平が100m、大体大の中西啄真がやり投で2015(平成27)年の第92回大会から、立命大の鍵本真啓が110mH、立命大の遠藤泰司が走幅跳で2016(平成28)年の第93回大会から、女子では関大の山根愛以が三段跳で2007(平成19)年の第84回大会から、立命大の前田浩唯が5000m競歩、10000m競歩で2010(平成22)年の第87回大会から、武庫女大の竜田夏苗が棒高跳で2011(平成23)年の第88回大会から、立命大の田中佑美が100mHで第93回大会から、大体大の武本紗栄がやり投で2018(平成30)年の第95回大会から、男女併せて合計12名が4連覇を達成している。さらに広野、多田、中西、鍵本、山根、田中、武本は関西学生記録も樹立している。

2020(令和2)年の第97回大会は新型コロナウイルス感染症のため、5月の開催を延期して10月の種目別選手権・混成選手権を関西インカレに変更して大会を開催した。コロナ禍のため、ほとんどの大学が活動を十分に行える状況になかったが、伝統ある大会を継続して行うことができた。なお、駅伝シーズンと重なるため、長距離種目のエントリーで有利不利が生じることを考慮して、1部2校の降格は行わず、2部上位2校の昇格のみを行った。2021(令和3)年の第98回大会も関西圏に変異ウィルス(アルファ株)が蔓延し、大阪・京都・兵庫に3度目の緊急事態宣言が発出されたために、前年と同様10月に延期をして大会を開催した。なお、1部校の調整は、2021年、2022

(令和4)年の大会で行い、2023(令和5)年から通常通り12校にすることになっている。

西日本インカレの総合成績についても変化が現れる。男子では2009(平成21)年の第62回大会で立命大が61年ぶり2回目の総合優勝、2011(平成23)年の第64回大会でも総合優勝を達成している。2016(平成28)年の第69回大会では関学大が67年ぶり2度目の総合優勝を成し遂げている。立命大の女子が第62回大会で初の総合優勝をして本連盟初の男女総合優勝を果たし、第69回大会では2度目の総合優勝を達成している。また、東大阪大が2011(平成23)年の第64回大会と翌年の第65回大会で総合2連覇している。西日本インカレについても、新型コロナウイルス感染症のため、東海学連主催で岐阜・長良川競技場にて行う予定の2020(令和2)年の第73回大会が中止となった。2021(令和3)年の第74回大会を同所で行う予定であったが、変異ウィルスが蔓延したため、再び中止となる事態となった。

日本インカレの対校戦総合成績についても女子の活躍が目立つようになってくる。大体大以外に京産大、立命大、龍谷大、佛教大、東大阪大、大阪成蹊大、園田学女大が総合8位以内に入賞している。立命大は2015(平成27)年の総合優勝を含め15回、大阪成蹊大は2016(平成28)年の総合優勝を含め4回、東大阪大は2011(平成23)年の総合3位を含め4回という好成績を残している。女子は関東の大学への一極集中がなくなりつつあり、トラック&フィールドでも近年大きく飛躍してきていると言える。男子については、残念ながら立命大が2回、関学大が1回のみとなっており、関東の大学が総合成績争いでは、ほぼ上位を占めるが状況が続いている。2020(令和2)年の第89回大会、2021(令和3)年の第90回大会はコロナ禍のなか感染症対策を講じて、新潟と熊谷で無観客試合にて実施された。なお、2020年日本学生個人選手権は陸連からの大会中止要請期間と重なったため中止された。

関西学生駅伝は2005(平成17)年の第67回大会から「西の箱根駅伝」を目指し、東海、中国四国、九州学連の駅伝強豪校を招待して、西日本大学招待兼関西学生駅伝を、びわ湖西岸コースに場所を移して8年間行った。この頃から立命大の戦力が充実し5年連続で優勝している。2013(平成25)年から再び丹後半島にコースを戻して本連盟加盟校のみで開催し、2017(平成29)年の第79回大会では関学大が初優勝を果たしている。2020(令和2)年の第82回大会はコロナ禍で行う大会のため、参加校を例年の22校から15校に減らして感染症対策を講じ、京丹後市内のみにコースを変更して開催することができた。2021(令和3)年の第83回大会はコースや参加校数は通常通りに戻って行った。なお、地元自治体と協議し更なる感染症対策を講じた。

関西学生女子対校駅伝競走大会(以下関西学生女子駅伝と略する)は、1991(平成3)年から六甲アイランド周回コース6区間18.5kmで開催されている。この大会は全日本大学女子駅伝の関西地区予選会として位置づけされた大会で、1995(平成7)年の第5回大会を除く第1回大会から1998(平成10)年の第8回大会までは六甲アイランド周回コースで距離のみ延長して実施された。第5回大会と1999(平成11)年の第9回大会以降は神戸しあわせの村で行われ、現在は6区間30kmで実施されている。2020(令和2)年の第30回大会、翌年の第31回大会は、神戸しあわせの村という限られた場所での開催であったため、可能な限りの感染症対策を講じて予定通り行うことができた。優勝は立命大12回、京産大10回、佛教大4回、大阪学院大学(以下大院大と略する)3回、関大2回となっている。

平成の幕開けとともに1989(平成元)年10月に始まった出雲全日本大学選抜駅伝競走(以下出雲駅伝と略する)は、「大学男子三大駅伝」の一つと位置づけられ、マラソンとはほぼ同じ距離を6区間で襷を繋ぐ高速レースである。本連盟加盟大学の優勝はないが、距離が短いため全日本大学駅伝に比べると8位までの入賞回数はやや多く、京産大11回、立命大4回、関大1回となっている。京産大の鳥居久義が1990(平成2)年の第2回大会3区、児玉秀樹が1992(平成4)年の第4回大会1区、荒川大作が1993(平成5)年の第5回大会4区、前田貴史が1998(平成10)年の第10回大会2区で、立命大の田子康宏が2004(平成16)年の第16回大会1区で区間賞を獲得している。

全日本大学駅伝で8位以内に入った大学は平成時代以降では京産大だけで、その最高順位は1996（平成8）年の第28回大会の京産大3位が最高順位となっている。2000（平成12）年以降はどの大学も残念ながら8位以内の入賞を果たせていない。なお、京産大の安川毅と上村哲也が1991（平成3）年の第23回大会の1区、5区、児玉秀樹が1992（平成4）年の第24回大会4区、増井昭博が1993（平成5）年の第25回大会5区、細川道隆が1998（平成10）年の第30回大会1区で、また関学大の石井優樹が、全日本大学選抜として出場した2018（平成30）年の第50回大会1区で区間賞を獲得している。

全日本大学女子駅伝は1994（平成6）年の第12回大会で京産大が9年ぶりに大体大以来となる初優勝を果たし、1997（平成9）年第15回大会まで4連覇を達成している。立命大は2003（平成15）年の第21回大会で初優勝し、2015（平成27）年の第33回大会までに5連覇1回、3連覇1回、連覇1回して優勝10回としている。佛教大は2009（平成21）年の第27回大会、翌年の第28回大会で連覇をしており、平成時代は本連盟加盟大学が優勝回数半数を占めている。この大会における区間賞の獲得者（延人数）は立命大49名、京産大・佛教大各19名、大体大6名、龍谷大2名、同大、関大、大院大1名となっている。また、区間賞（3回以上）は立命大の小島一恵が2006（平成18）年の第24回大会から、藪下明音が2010（平成22）年の第28回大会から4年連続、京産大の木村泰子と光畑早苗が1994（平成6）年の第12回大会から、佐藤由美が1995（平成7）年の第13回大会から3年連続、立命大の樋口紀子が2004（平成16）年の第22回大会、2006年の第24回大会、2007（平成19）年の第25回大会で3回区間賞、佛教大の吉本ひかりが2009（平成21）年の第27回大会から、立命大の大森菜月が2013（平成25）年の第31回大会から3年連続で獲得している。

2004（平成16）年に始まった全日本大学女子選抜駅伝競走（以下、全日本大学女子選抜駅伝と略する）でも大会回数16回の内、立命大が11回、佛教大が1回優勝している。この大会における区間賞の獲得者（延人数）は立命大34名、佛教大13名、京産大5名、大体大、大院大各2名、大芸大、関西学連選抜（神院大）各1名となっている。また、区間賞（3回以上）は立命大の小島一恵が2007（平成19）年の第4回大会から4大会連続（第4回大会、第5回大会は2007年に実施）で獲得しているのみである。

—第17章— 五輪、世界陸上、アジア大会は卒業生中心

五輪に出場している本連盟関係の選手は平成時代に入ると、そのほとんどが卒業生で、複数回五輪に出場している選手が出ている。

最も注目されるのは、大院大OGで2000（平成12）年のシドニー五輪の女子マラソンで、本連盟女子のみならず、日本女子陸上界で初の金メダリストとなった高橋尚子が挙げられる。世界陸上にはOGとして1997（平成9）年のアテネ大会、1999（平成11）年のセビリア大会に出場し、1998（平成10）年のバンコクアジア大会のマラソンで金メダルを獲得している。また、2001（平成13）年9月のベルリンマラソンで、女子初の2時間20分を切る当時の世界最高記録で優勝している。高橋は現役当時、全日本大学女子駅伝や関西学生女子駅伝に4年間出場しているが、個人では日本インカレで上位入賞しているものの、勝利したのは1991（平成3）年の関西インカレ第68回大会800mと1992（平成4）年の関西インカレ第69回大会の800m、1500m、同年の日本学生陸上競技種目別選手権大会（現在の大会名は日本学生陸上競技個人選手権大会、以下個人選手権と略する）1500mとなっている。卒業後に最も成長した選手と言っても過言ではない。なお、高橋は女子スポーツ界で初の国民栄誉賞を受賞し、東京2020五輪・パラリンピック大会組織委員会理事も務めている。

1996（平成8）年アトランタ、2000（平成12）年シドニー、2004（平成16）年アテネ、2008（平成20）年北京の4大会連続で五輪に出場した同大の朝原宣治は、個人種目にOBで100m2回、走

幅跳1回出場し、4×100mRは4大会連続で出場して3回入賞を果たし、北京五輪の4×100mRではアンカーとして38秒15でゴールし銀メダルを獲得している。世界陸上は1995（平成7）年のイエーテボリ大会、1997（平成9）年のアテネ大会、2001（平成13）年のエドモントン大会、2003（平成15）年のパリ大会、2005（平成17）年のヘルシンキ大会、2007（平成19）年の大阪大会に6回出場し、4×100mRで4回入賞を果たしている。1995（平成7）年のユニバーシアード福岡大会にOBで出場して走幅跳で7位入賞、2002年（平成14）年の釜山アジア大会の100m、4×100mRとともに銀メダルを獲得し、本連盟関係者として五輪、世界陸上、アジア大会に最も多く出場した選手である。日本選手権100mはOBで5回、走幅跳は現役、OBで2回選手権者となっている。現役の1993（平成5）年に100mで電気計時10秒19の日本記録を樹立し、同年の日本インカレ第62回大会の200m、1994（平成6）年の日本インカレ第63回大会の100mを制している。同年の関西インカレ第71回大会では100m、200m、走幅跳において、いずれも大会新記録を樹立し優勝した。

京産大の小坂田淳は現役で1996（平成8）年アトランタ、OBで2000（平成12）年シドニー、2004（平成16）年アテネの3大会連続で五輪に出場し、4×400mRで2回入賞を果たしている。世界陸上は1995（平成7）年のイエーテボリ大会、同年のユニバーシアード福岡大会にも現役で出場し、その後世界陸上はOBで1999（平成11）年のセビリア大会、2001（平成13）年のエドモントン大会、2003（平成15）年のパリ大会に出場している。1998（平成10）年のバンコクアジア大会の4×400mRでは金メダルを獲得した。1995年の関西インカレ第72回大会200m、400m、第6回個人選手権の400mでも優勝、翌年の関西インカレ第73回大会400mで連覇、日本インカレ第65回大会400mでも優勝している。

龍谷大の高岡寿成はOBで1996（平成8）年アトランタ、2000（平成12）年シドニー五輪に連続で出場し、シドニー五輪の10000mで7位に入賞している。世界陸上には1993（平成5）年のシュトゥットガルト大会、1997（平成9）年のアテネ大会、1999（平成11）年のセビリア大会、2001（平成13）年のエドモントン大会、2005（平成17）年のヘルシンキ大会に通算5回出場し、2005年のヘルシンキ大会ではマラソンに出場し2時間11分53秒で4位に入賞している。2002（平成14）年のシカゴマラソンで2時間6分16秒の日本記録を樹立しているが、設楽悠太が2018（平成30）年の東京マラソンで2時間6分11秒を記録するまでの16年間、マラソンの日本記録保持者でもあった。1993年ユニバーシアードバッファロー大会にOBで出場し、5000m14分6秒21で銅メダル、1994（平成6）年の広島アジア大会の5000m、10000mの両種目で金メダルを獲得した。また、5000m、10000mで3回日本選手権者となっている。現役時代は1992（平成4）年の日本インカレ第61回大会5000mで優勝、関西インカレでは男子1部で出場した1991（平成3）年の関西インカレ第68回大会5000m、10000m、翌年の第69回大会1500m、5000mを制している。

朝原に続き同大から、早狩実紀が2008（平成20）年の北京五輪、我孫子智美が2012（平成24）年のロンドン五輪にOGで出場している。早狩は世界陸上には2005（平成17）年のヘルシンキ大会、2007（平成19）年の大阪大会、2009（平成21）年のベルリン大会、2011（平成23）年の大邱大会に4大会連続で3000mSCに出場しているが、女子新種目の3000mSCに果敢にチャレンジした結果である。1995（平成7）年のユニバーシアード福岡大会にはOGで1500mに出場している。日本選手権はOGで800m、1500mで各1回、3000mSCで6回選手権者となっている。現役時代は1500m、3000mを主戦場としており、1991（平成3）年の日本インカレ第60回大会1500m優勝、関西インカレ1500mは1992（平成4）年の第69回大会で高橋に敗れているが、1991年の第68回大会から1994（平成6年）の第71回大会まで3回優勝、1994年は3000mにも優勝している。なお、早狩が世界陸上に出場した3000mSCでは、2008年に武庫女大の堀江美里、2009年に大体大の徳田夕佳が日本学生記録を樹立している。早狩より先輩の京教大の渡部博子は、関西インカレ1500mで1987（昭和62）年の関西インカレ第64回大会から4連覇を果たし、1989（平成元）年の日本インカレ第58回大会、翌年の第59回大会1500mで連覇を成し遂げている。

我孫子智美は2006（平成18）年から2009（平成21）年の4年間に棒高跳の日本学生記録を6回（室内記録を含む）更新し、日本インカレも2006年の第75回大会から4連覇している。また、個人選手権でも2007（平成19）年から3連覇、関西インカレは2回優勝している。2014（平成26）年の仁川アジア大会に出場し銀メダルを獲得、現役、OGで5回日本選手権者になっている。

龍谷大OGの瀧瀬真寿美、佛教大OGの木崎良子、関大現役生の東佳弘が2012（平成24）年のロンドン五輪に出場している。瀧瀬は世界陸上には現役で2007（平成19）年の大阪大会に出場、OGでも2009（平成21）年のベルリン大会、2011（平成23）年の大邱大会、2013（平成25）年のモスクワ大会に4大会連続で出場し、ベルリン大会では20km競歩で7位に入賞、2019（平成31）年の日本選手権50km競歩で日本記録を樹立し、同年の世界陸上ドーハ大会50km競歩に出場した。また、2009年のユニバーシアードベオグラード大会20km競歩では銀メダルを獲得している。現役の2007年の日本インカレ第76回大会10000m競歩で日本学生記録を樹立しているが、日本インカレは我孫子同様に2005（平成17）年の第74回大会から4連覇を成し遂げている。なお、日本インカレ4連覇達成者は本連盟では、我孫子と瀧瀬の二人だけである。関西インカレでは当時5000m競歩を実施していたが、2006（平成18）年第82回大会から4連覇を達成している。また、10km競歩で日本学生記録を樹立、20km競歩では2007年と2009年に日本記録を2回樹立しており、2008年の第2回日本学生競歩選手権大会も制している。

木崎は2013（平成25）年のモスクワ世界陸上のマラソンで4位に入賞、2014（平成26）年の仁川アジア大会のマラソンでは銀メダルを獲得している。現役の2005（平成17）年のユニバーシアードイズミル大会のハーフマラソンで銀メダル、2007（平成19）年のユニバーシアードバンコク大会の10000mでも銀メダルを獲得した。同年の日本インカレ第76回大会10000mで優勝、関西インカレでは2005年の第82回大会、翌年の第83回大会の5000mを連覇している。2005年の第8回日本学生女子ハーフマラソン選手権大会（以下日本学生女子ハーフマラソンと略する）でも優勝、飯島希望が2003（平成15）年の第6回大会、越智純子が2004（平成16）年の第7回大会で優勝しており、佛教大が3大会連続で制している。また、全日本大学女子駅伝では区間賞を2回、全日本大学選抜女子駅伝でも2回獲得した。

現役生で2012（平成24）年のロンドン五輪に出場した東佳弘は、同年の関西インカレ第89回大会400mが唯一の優勝となっているが、選考レースとなった6月の日本選手権に関西インカレに引き続きピークをもっていけたことが五輪出場への道を開いたものと思われる。なお、平成時代では本連盟現役選手の五輪出場は、1996（平成8）年のアトランタ五輪に出場した小坂田と東の2名のみとなっている。

2016（平成28）年のリオデジャネイロ五輪には棒高跳で関学大OBの荻田大樹、マラソンで京産大OGの伊藤舞が出場している。荻田は世界陸上には2013（平成25）年のモスクワ大会、日本選手権を制して出場した2015（平成27）年の北京大会、2017（平成29）年のロンドン大会に3大会連続で出場し、2009（平成21）年のユニバーシアードベオグラード大会にも出場している。2008（平成20）年の日本インカレ第77回大会で優勝、同年の関西インカレ第85回大会では5m56の日本学生記録を樹立している。関西インカレは2007（平成19）年の第84回大会から3連覇した。なお、関学大先輩の山田裕司は2005（平成17）年の日本インカレ第74回大会で優勝しているが、西日本インカレは2003（平成15）年の第56回大会から4連覇を成し遂げている。伊藤は世界陸上にはマラソンで2011（平成23）年の大邱大会、2015年の北京大会に出場し、北京大会で7位に入賞している。2006（平成18）年の日本インカレ第75回大会、同年の関西インカレ第83回大会の10000mで優勝し、全日本大学選抜女子駅伝では区間賞を2回獲得した。

京大の山西利和はOBで2019（令和元）年の世界陸上ドーハ大会の20km競歩に出場して、五輪、世界陸上を通して20km競歩で日本人初、世界陸上6人目の金メダリスト、本連盟初の世界陸上金メダリストという快挙を成し遂げている。京大の金メダリストは1936（昭和11）年のベルリン五輪三段跳優勝の田島以来二人目で、83年ぶりとなっている。山西は世界陸上優勝により、東京

2020 五輪の代表内定を得て、コロナ禍のため 2021 年に延期となった東京 2020 五輪に出場し、京大の五輪メダリストとして 85 年ぶりとなる銅メダルを獲得している。京大からは田島が金・銅メダル、原田が銀メダル、山西が銅メダルを獲得、本連盟の五輪獲得メダル数 7 個の内、半数以上の 4 個を獲得するという快挙をもたらした。2018 (平成 30) 年ジャカルタアジア大会の 20km 競歩にも出場し銀メダルを獲得。2017 (平成 29) 年のユニバーシアード台北大会の 20km 競歩に現役で出場し、本連盟初の競歩種目での金メダリストにもなっている。京大からユニバーシアード大会で金メダリストになったのは 1935 (昭和 10) 年の国際学生ブダペスト大会走幅跳優勝の田島以来二人目で、こちらも 82 年ぶりである。2016 (平成 28) 年の日本インカレ第 85 回大会、翌年の第 86 回大会 10000m 競歩で連覇を成し遂げている。2017 年の関西インカレ第 94 回大会 10000m 競歩では 39 分 24 秒 49 の関西学生記録を樹立し、2015 (平成 27) 年から 3 連覇を達成している。また、2018 年の日本選手権 20km 競歩でも日本学生記録を樹立した。

関学大の多田は 2021 (令和 3) 年の第 105 回日本選手権で 9 秒台をマークしている 4 名の選手に先着して優勝。日本選手権前の大会で五輪参加標準記録を突破していたため、関学大から 100m で初の五輪代表となった。なお、日本選手権の関学大の 100m 優勝者は 1919 (大正 8) 年の第 7 回大会の伊達以来で 102 年ぶりとなる。多田は東京 2020 五輪の 100m と 4×100mR に出場し、4×100mR の第 1 走者として決勝進出。決勝では第 2 走者とのバトンが繋がらず無念の途中棄権となった。2017 (平成 29) 年の世界陸上ロンドン大会 100m と 4×100mR にも出場し、4×100mR では第 1 走者を走り 3 位となり、本連盟初の世界陸上現役メダリストに輝き、同年のユニバーシアード台北大会には 100m、4×100mR に出場し、本連盟初の 4×100mR の金メダリストになっている。同年の個人選手権では追風参考ながら 100m を 9 秒 94 で走り抜け、国内で初めて 10 秒を切り話題をさらった。同年の日本インカレ第 86 回大会で東洋大の桐生祥秀が日本人として初めて 10 秒を切る 9 秒 98 の日本記録を樹立したが、多田も日本学生歴代 3 位タイとなる 10 秒 07 で走り、朝原の 10 秒 19 の関西学生記録を更新した。また、現役で 2018 (平成 30) 年のジャカルタアジア大会の 4×100mR でも金メダルを獲得している。OB で 2019 年 (令和元) 年の世界陸上ドーハ大会の 4×100mR 決勝の第 1 走者として出場し、37 秒 43 のアジア記録、日本記録を樹立して 3 位となり、本連盟初の 2 大会連続の世界陸上メダリストとなっている。

びわこ成蹊スポーツ大学 (以下びわスポ大と略する) の丸尾知司は OB で 2019 (令和元) 年の世界陸上ロンドン大会の 50km 競歩に出場して 5 位に入賞、また 2021 (令和 3) 年の日本選手権 50km 競歩に勝利し代表枠を獲得し東京 2020 五輪に出場した。なお、びわスポ大からの五輪出場は初めてである。丸尾は山西と同じ実業団に所属して切磋琢磨し五輪での出場を果たした。丸尾は日本インカレで 3 度入賞しているが、2010 (平成 22) 年の西日本インカレ第 63 回大会 10000m 競歩、2011 (平成 23) 年の関西インカレ第 88 回大会の 10000m 競歩が主な優勝となっており、卒業後に大きく成長した選手の一人である。

競歩種目は女子でも五輪選手を輩出している。立命大の河添香織は OG で 2021 (令和 3) 年の東京 2020 五輪女子 20km 競歩日本代表選手選考会で勝利して、ワールドランキングで出場圏内に入り、東京 2020 五輪に出場した。河添は 2016 (平成 28) 年の日本インカレ第 85 回大会 10000m 競歩、2017 (平成 29) 年の第 86 回大会 10000m 競歩、日本学生競歩選手権、2018 (平成 30) 年の日本学生競歩選手権でいずれも準優勝している。2016 年の西日本インカレ第 69 回大会 10000m 競歩、2017 年の関西インカレ第 94 回大会 10000m 競歩が主な優勝となっており、丸尾と同様、卒業後に大きく成長した選手の一人である。

2021 (令和 3) 年 5 月にポーランドで行われた世界リレーの女子 4×100mR に大阪成蹊大の齋藤愛美、甲南大学 (以下、甲南大と略する) の青山華依が会場決勝進出を果たし、2012 (平成 24) 年のロンドン五輪以来 2 大会ぶりに、東京 2020 五輪の女子 4×100mR の出場権を獲得する大役を果たした。東京 2020 五輪には青山が第 1 走者、齋藤が第 3 走者として出場し、予選で 43 秒 44 の日本歴代 2 位の記録を残した。本連盟の女子現役選手 2 名が五輪に出場するのは、1952 (昭和 27)

年のヘルシンキ五輪以来、実に約70年ぶりである。齋藤は2019（令和元）年の日本インカレ第88回大会、2021（令和3）年の第90回大会の200mで2度優勝している。また、200mで2021年に関西学生記録を樹立した。青山も2021年に100mで関西学生タイ記録を五輪前に樹立している。大阪成蹊大、甲南大から五輪に選手が出場するのは初めてとなっている。なお、立命大の壹岐あいこも女子4×100mRの補欠として日本代表となっており、出場した2名を含めると3名の現役生が東京2020五輪に選ばれている。これは本連盟初の快挙である。壹岐も五輪前の日本選手権で100m2位、日本インカレ第90回大会の100m、200mでともに2位と活躍している。

世界陸上には同大、京産大、大体大、天理大、龍谷大、大院大、甲南大、大阪短期大学（以下大短大と略する）、京大、立命大、佛教大、関学大、大阪成蹊大、びわスポ大、東大阪大、近大から選手を輩出しているが、出場した選手（延人数で65名）の内、現役で出場したのはわずか9名に過ぎない。上記の選手以外で世界陸上に出場した主な選手は以下のとおりである。

大体大の北田敏恵は4×100mRに現役で1991（平成3）年の東京大会に、OGで1997（平成9）年、1999（平成11）年のアテネ大会、セビリア大会に出場。1994（平成6）年の広島アジア大会にOGで100m、4×100mRに出場し、4×100mRで銅メダルを獲得、1995（平成7）年ユニバーシアード福岡大会の4×100mRにも出場し5位に入賞した。1998（平成10）年のバンコクアジア大会に岩本（旧姓北田）は4×100mRで出場している。日本選手権は現役、OGで100m3回、200m4回選手権者となっている。現役時代には100mで手動計時2回、電気計時3回日本学生記録を樹立、1989（平成元）年の日本インカレ第58回大会100m、200m、1991（平成3）年の日本インカレ第60回大会100mで優勝し、関西インカレでも100m3回、200m2回優勝している。

京産大の木村は現役で1995（平成7）年のアテネ大会の10000mに出場、1994（平成6）年から1995（平成7）年にかけて5000mで日本記録1回を含む4回日本学生記録を更新、10000mでも1995（平成7）年に日本学生記録を樹立した。同年の日本インカレ第64回大会5000m、10000mで優勝、同年の関西インカレ第72回大会の5000m、10000mでも優勝している。全日本大学女子駅伝で京産大が4連覇した時の1994（平成6）年の第12回大会から3年間、全て区間賞を獲得している。

大短大の小崎まりはOGで2003（平成15）年、2005（平成17）年、2007（平成19）年のパリ大会、ヘルシンキ大会、大阪大会のマラソンに出場、5000mで日本選手権を獲得している。

京大の杉本明洋は2005（平成17）年のヘルシンキ大会に現役で、2007（平成19）年の大阪大会にOBで20km競歩に出場した。2003（平成15）年の日本インカレ第72回大会10000m競歩で優勝、翌年の関西インカレ第81回大会10000m競歩でも優勝している。

同大の荒川大輔はOBで2007（平成19）年、2009（平成21）年の大阪大会、ベルリン大会の走幅跳に出場、2003（平成15）年のユニバーシアード大邱大会には現役で出場している。日本選手権はOBで3回選手権者となっている。関西インカレでは2000（平成12）年の第77回大会から4連覇を果たしている。なお、同時期に立命大の笹野浩志が2002（平成14）年の釜山アジア大会の800mに現役で出場、日本選手権も現役、OBで2回選手権者となっている。

立命大の加納由理はOGで2007（平成19）年、2009（平成21）年の大阪大会、ベルリン大会のマラソンに出場しているが、1999（平成11）年のユニバーシアードパルマ・デ・マヨルカ大会の5000m、10000mに出場して10000mで銀メダルを獲得した。1999（平成11）年の日本インカレ第68回、翌年の第69回大会10000mで連覇、関西インカレは1998（平成10）年の第75回大会から5000mで連覇、1997（平成9）年の第74回大会から10000mで3連覇している。

甲南大の福本（旧姓青山）幸は、OGで2007（平成19）年、2013（平成25）年の大阪大会、モスクワ大会の走高跳、2014（平成26）年の仁川アジア大会に出場している。また、日本選手権は6回選手権者となっている。関西インカレは1995（平成7）年の第72回大会から4連覇を成し遂げている。青山と同年代の甲南大の新井初佳は1996（平成8）年の日本インカレ第65回大会200mを制しており、OGで1998（平成10）年のバンコクアジア大会、2002（平成14）年の釜山アジア

大会に100m、200m、4×100mRに出場し、日本選手権はOGで100m7回、200m6回制しており、本連盟関係者で最も日本選手権を多く獲得した選手である。また、関西外国語大学（以下関外大と略する）の佐々木美佳は1993（平成5）年の日本インカレ第62回大会400mHに優勝、OGとして2回日本選手権を制し、1995（平成7）年のユニバーシアード福岡大会、1998（平成10）年のバンコクアジア大会の400mHに出場した。

佛教大の吉本は2011（平成23）年の大邱大会の10000mに現役で出場しているが、前年には10000mで京産大の木村が保持していた日本学生記録を更新し、その記録は2021年まで破られなかった。佛教大は全日本大学女子駅伝で2009（平成21）年の第27回大会、翌年の第28回大会で連覇を達成しているが、両年ともアンカーとして区間賞を獲得し優勝に貢献した。なお、後輩の前田彩里が2014（平成26）年の第33回大阪女子マラソンで2時間26分46秒の日本学生記録を樹立している。

大阪成蹊大の青山聖佳は、2015（平成27）年の北京大会の4×400mRに出場、2019年（令和元）年のドーハ大会の男女混合4×400mRにも出場している。東京2020五輪の男女混合4×400mRの代表を目指し、2021（令和3）年6月長居で行われた木南記念陸上で男女混合4×400mRで日本新記録を樹立して出場圏内にランクインしたが、その後に記録上位国が出たため、出場はかなわなかった。2015年の日本インカレ第84回大会、翌年の第85回大会200m、400mに連覇し、大阪成蹊大の日本インカレ第85回大会総合優勝に大きく貢献した。関西インカレでは第92回大会から400mで3連覇している。また、2016（平成28）年、OGで2019（令和元）年、2020（令和2）年に日本選手権400mを3回制している。

2019年（令和元）年のドーハ大会には、近大の河内光起が4×400mR、東大阪大OGの佐藤友佳がやり投で出身大学としては初の代表となっている。河内は同年のユニバーシアードナポリ大会にも出身大学の初代表として出場した。なお、佐藤は現役の2012（平成24）年の関西インカレ第89回大会で59m22の日本学生記録を樹立している。

—第18章— ユニバーシアード大会は女子長距離選手が活躍

ユニバーシアード大会には同大、京産大、大阪大学（以下阪大と略する）、龍谷大、関大、大体大、関外大、立命大、佛教大、関学大、大院大、大阪成蹊大、京大、近大から選手を輩出している。特徴的なことは、女子の駅伝名門校からユニバーシアード大会に数多く選手が出場し、メダルを獲得していることである。立命大からは1997（平成9）年のシチリア大会、1999（平成11）年のパルマ・デ・マヨルカ大会、2001（平成13）年の北京大会、2003（平成15）年の大邱大会、2007（平成19）年のバンコク大会、2009（平成21）年のベオグラード大会、2011（平成23）年の深圳大会、2013（平成25）年のカザン大会、2015（平成27）年の光州大会に女子長距離種目で延べ12名が出場し、個人種目で金メダル1個、銀メダル4個、銅メダル1個を獲得、京産大からは1995（平成7）年の福岡大会、2003年の大邱大会、2013年のカザン大会に5名が出場し、個人種目で銅メダル3個を獲得、佛教大からは2003年の大邱大会、2005年（平成17）年のイズミル大会、2007年のバンコク大会、2009年のベオグラード大会、2011年の深圳大会に延べ6名が出場し、金メダル1個、銀メダル3個、銅メダル1個を獲得している。

平成時代に行われたユニバーシアード大会で成績を残した大学や選手は以下のとおりである。

1991（平成3）年のシェフィールド大会の女子10000mに出場した阪大の寺澤佳恵は、前年の日本インカレ第59回大会と関西インカレ第67回大会10000mに優勝、ユニバーシアード大会に出場した年の関西インカレ第68回大会3000mで優勝、10000mは連覇を成し遂げている。本連盟加盟大学で国公立大学の女子選手でオリンピック、世界陸上、ユニバーシアード、アジア大会に出場しているのは寺澤だけである。

1995（平成7）年の福岡大会には本連盟から14名が出場しているが、京産大から6名が出場し

ており、本連盟のユニバーシアードの各大会の大学別出場者数においては最大人数で、また本連盟の出場人数もこの大会が最多となっている。京産大からは河邊崇雄が200mと4×100mR、小坂田が200m、山本善之がやり投、佐藤が1500mと5000m、木村が5000mと10000m、光川愛が10000mに出場し、佐藤が5000m、木村が10000mで銅メダルを獲得した。河邊は前年の個人選手権200m、山本は1994（平成6）年の日本インカレ第63回大会、佐藤はユニバーシアード大会に出場した年の日本インカレ第64回大会1500m、翌年の日本インカレ第65回大会5000mで優勝している。ユニバーシアード大会があった同年の第13回全日本女子駅伝で京産大が優勝しており、佐藤、木村、光川は3名とも区間賞を獲得して優勝に貢献した。この他、関大の荻野純人がユニバーシアード福岡大会の3000mSCに出場しているが、1993（平成5）年の日本インカレ第62回大会、1995（平成7）年の個人選手権で勝利している。

1997（平成9）年のシチリア大会で立命大OGの十倉みゆきがハーフマラソンで銅メダル、1999（平成11）年のパルマ・デ・マヨルカ大会で加納由理が10000mで銀メダル、2001（平成13）年の北京大会で大山美樹がハーフマラソンで銀メダルと3大会連続で立命大勢がメダルを獲得する活躍をしている。大山は同年の日本インカレ第70回大会10000mでも優勝した。

2003（平成15）年の大邱大会の5000m、10000mに出場し両種目で入賞した大塚大の堀岡智子は、2004（平成16）年の日本インカレ第74回大会5000m、10000mを制覇している。同大会の20km競歩に出場した立命大の三村芙美は、2003年の日本インカレ第72回大会5000m競歩で日本学生記録を樹立して優勝、2004年の日本インカレ第73回大会10000m競歩でも優勝しており、同年には10000m競歩で日本学生記録も樹立した。

2005（平成17）年のイズミル大会、2007（平成19）年のバンコク大会に関学大の寺田恵が現役、OGでハーフマラソンに出場し、バンコク大会で銀メダルを獲得し、2006（平成18）年と2007（平成19）年の第9回、第10回日本学生女子ハーフマラソンで連続優勝を果たした。

2009（平成21）年のベオグラード大会で佛教大の西原加純が10000mで金メダル、5000mで銀メダルを獲得し、2005（平成17）年、2007（平成19）年の木崎と併せて3大会連続で佛教大勢がメダルを獲得する活躍をした。西原は同年の日本インカレ第78回大会、翌年の日本インカレ第79回大会5000mで連覇し、OGで2回日本選手権10000mを制している。

2011（平成23）年の深圳大会で立命大の田中華絵が10000mで銀メダル、佛教大の石橋麻衣が同種目で銅メダルを獲得しており、田中は2010（平成22）年の日本インカレ第79回大会10000m、石橋は2009（平成21）年の日本インカレ第78回大会1500mで優勝している。

2013（平成25）年のカザン大会で立命大の津田真衣がハーフマラソンで金メダル、10000mで銅メダルを獲得しているが、同年の日本インカレ第82回大会10000mでも優勝している。また、ハーフマラソンで銅メダルを獲得した京産大の奥野有紀子は翌年の第17回日本学生女子ハーフマラソンで優勝している。

2015（平成27）年の光州大会で立命大の菅野七虹がハーフマラソンで銀メダルを獲得し、10大会連続で本連盟の女子長距離陣がユニバーシアードでメダルを獲得するという素晴らしい成果を上げている。

2011（平成23）年の深圳大会からハーフマラソンが団体種目となり、2011年の深圳大会では、立命大の岩川真知子と佛教大の竹地志帆が、2013（平成25）年のカザン大会では、立命大の津田、三井綾子、京産大の奥野が、2015（平成27）年の光州大会では大院大の新井沙紀枝、立命大の菅野がハーフマラソン団体の優勝者となっている。

2017（平成29）年の台北大会の女子4×100mRでは、大阪成蹊大の中村水月、立命大の壹岐いちこが銅メダリストになっている。壹岐は2019（令和元）年の世界リレー横浜大会の4×100mRにも出場した。

—第 19 章— 種目別ランキング 10 傑からみた最近 (2010 年以降) の傾向

*ランキングは 2021 年 3 月末時点

<男子> *関西学生記録の後の< >は記録樹立年

100m 関西学生記録 10 秒 07<2017> 10 傑平均 10 秒 25 (↑)

2017 年に関西学生記録が更新され、2019 年、2020 年に 5 名がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑>多田修平 (関学大、2017)、坂井隆一郎 (関大、2019)

(10 傑以内複数名大学) 関学大 3 名、立命大 2 名

200m 関西学生記録 20 秒 65<2020> 10 傑平均 20 秒 79 (↑)

2020 年に関西学生記録が更新され、2018 年、2019 年、2020 年に 6 名がランキング 10 傑入り

(10 傑以内複数名大学) 近大 3 名、京産大 2 名

400m 関西学生記録 45 秒 44<1999> 10 傑平均 46 秒 05 (—)

1999 年の関西学生記録が残っているようにレベルアップは見られない

<日本学生歴代 10 傑>森田真治 (同大、1999)

(10 傑以内複数名大学) 京産大、関学大各 2 名

800m 関西学生記録 1 分 47 秒 61<2018> 10 傑平均 1 分 48 秒 75 (↑)

近年急激にレベルアップしている種目。2014 年以降に全員がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑>花村拓人 (関学大、2018)

(10 傑以内複数名大学) 関学大、近大各 3 名

1500m 関西学生記録 3 分 41 秒 39<2005> 10 傑平均 3 分 44 秒 51 (—)

800m に比べると近年の記録の向上があまり見られない

(10 傑以内複数名大学) 立命大 4 名、京産大、関学大各 2 名

5000m 関西学生記録 13 分 20 秒 43<1992> 10 傑平均 13 分 46 秒 53 (↑)

2017 年以降急激にレベルアップ

<日本学生歴代 10 傑>高岡寿成 (龍谷大、1992)

(10 傑以内複数名大学) 立命大 6 名、関学大 2 名

10000m 関西学生記録 28 分 31 秒 76<2019> 10 傑平均 28 分 39 秒 25 (↑)

2019 年に関西学生記録が更新され、2019 年、2020 年に 5 名がランキング 10 傑入り

(10 傑以内複数名大学) 立命大 6 名

ハーフマラソン 関西学生記録 1 時間 2 分 10 秒<2020> 10 傑平均 1 時間 02 分 50 秒 (↑)

2018 年、2020 年に関西学生記録更新され、2015 年以降ランキング 5 傑に 4 名が占める

(10 傑以内複数名大学) 京産大 6 名、立命大 3 名

110mH 関西学生記録 13 秒 55<2021> 10 傑平均 13 秒 84 (↑)

2012 年以降からレベルアップ

<日本学生歴代 10 傑>徳岡 凌 (立命大、2021)

(10 傑以内複数名大学) 立命大 4 名、関学大 2 名

400mH 関西学生記録 49 秒 41<2011> 10 傑平均 49 秒 99 (↑)

2011 年以降からレベルアップ

(10 傑以内複数名大学) 同大 4 名、立命大 2 名

3000mSC 関西学生記録 8 分 36 秒 55<1994> 10 傑平均 8 分 47 秒 62 (↓)

2010 年以降でランキング入りした選手はわずか 2 名。1980 年代、1990 年代の選手 4 名がランキング 5 傑を占める

(10 傑以内複数名大学) 京産大 5 名

- 10000mW 関西学生記録 39分24秒49<2017> 10傑平均 40分39秒21 (↑)**
2015年以降からレベルアップ
<日本学生歴代10傑>山西利和(京大、2017)
(10傑以内複数名大学) びわスポ大4名、京大2名
- 4×100mR 関西学生記録 38秒82<2021> 10傑平均 39秒21 (↑)**
2017年以降急激にレベルアップ
<日本学生歴代大学別10傑>近大(2021)、関学大(2017)
(10傑以内複数名大学) 近大、関学大各4チーム、立命大2チーム
- 4×400mR 関西学生記録 3分05秒45<1999> 10傑平均 3分06秒81 (ー)**
1999年に関西学生記録が樹立されて以降、レベルアップが見られない
<日本学生歴代大学別10傑>京産大(1999)
(10傑以内複数名大学) 関学大、近大各4チーム
- 走高跳 関西学生記録 2m25<2003、2019> 10傑平均 2m20 (ー)**
2014年以降6名がランキング10傑入り
(10傑以内複数名大学) 立命大2名
- 棒高跳 関西学生記録 5m56<2008> 10傑平均 5m38 (ー)**
2010年以降7名がランキング10傑入り
<日本学生歴代10傑>荻田大樹(関学大、2008)、有明侑哉(関学大、2010)
(10傑以内複数名大学) 関学大8名
- 走幅跳 関西学生記録 8m14<2021> 10傑平均 7m86 (ー)**
2016年以降5名がランキング10傑入り。なお、戦前のベルリン五輪三段跳で金メダルを獲得した田島が唯一戦前の選手としてランキング10傑入り
<日本学生歴代10傑>吉田弘道(立命大、2021)、朝原宣治(同大、1993)
荒川大輔(同大、2002)
(10傑以内複数名大学) 天理大3名、同大、関学大、立命大、京大各2名
- 三段跳 関西学生記録 16m27<2017> 10傑平均 16m08 (↑)**
2013年以降7名がランキング10傑入り
(10傑以内複数名大学) 立命大、関学大、びわスポ大各2名
- 砲丸投 関西学生記録 17m41<2008> 10傑平均 16m41 (↓)**
2010年以降でランキング10傑入りした選手は1名と低迷している
(10傑以内複数名大学) 大体大6名、同大、天理各2名
- 円盤投 関西学生記録 51m53<2018> 10傑平均 50m05 (↑)**
2015年、2016年、2018年と関西学生記録の更新が続く
(10傑以内複数名大学) 立命大、京産大、大体大、関学大各2名
- ハンマー投 関西学生記録 67m52<2019> 10傑平均 64m57 (↑)**
2011年以降7名がランキング10傑入り
(10傑以内複数名大学) 京産大6名、大体大2名
- やり投 関西学生記録 78m77<2018> 10傑平均 76m07 (↑)**
2010年以降からレベルアップ
<日本学生歴代10傑>中西啄真(大体大、2018)
(10傑以内複数名大学) 大体大7名
- 十種競技 関西学生記録 7653点<2020> 10傑平均 7299点 (↑)**
2011年以降からレベルアップ
<日本学生歴代10傑>川上ヒゲル(関学大、2020)、森本公人(大教大、2017)
(10傑以内複数名大学) 関学大5名

<女子> *関西学生記録の後の< >は記録樹立年

100m 関西学生記録 11 秒 57<2017、2021> 10 傑平均 11 秒 65 (↑)

2017 年に関西学生記録が更新され、2017 年以降に 5 名がランキング 10 傑入り
(10 傑以内複数名大学) 大阪成蹊大 3 名、龍谷大、甲南大、立命大各 2 名

200m 関西学生記録 23 秒 62<2021> 10 傑平均 23 秒 84 (↑)

2015 年以降 6 名がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑> 齋藤愛美 (大阪成蹊大、2020)、中村水月 (大阪成蹊大、2017)、
和田麻希 (龍谷大、2007)、青山聖佳 (大阪成蹊大、2015)

(10 傑以内複数名大学) 大阪成蹊大 5 名

400m 関西学生記録 52 秒 85<2016> 10 傑平均 53 秒 81 (↑)

2015 年以降 6 名がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑> 青山聖佳 (大阪成蹊大、2016)、石塚晴子 (東大阪大、2016)
川田朱夏 (東大阪大、2018)

(10 傑以内複数名大学) 東大阪大 4 名、立命大 3 名

800m 関西学生記録 2 分 02 秒 71<2018> 10 傑平均 2 分 06 秒 01 (↑)

2016 年以降に 4 名がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑> 川田朱夏 (東大阪大、2018)、塩見綾乃 (立命大、2018)

(10 傑以内複数名大学) 東大阪大 5 名、立命大 2 名

1500m 関西学生記録 4 分 15 秒 25<1995> 10 傑平均 4 分 18 秒 19 (↓)

2015 年以降ランキング 10 傑入りした選手はわずか 2 名

<日本学生歴代 10 傑> 佐藤由美 (京産大、1995)、簗下明音 (立命大、2011)

(10 傑以内複数名大学) 立命大、京産大、佛教大各 2 名

5000m 関西学生記録 15 分 17 秒 53<1995> 10 傑平均 15 分 26 秒 73 (↓)

2015 年以降ランキング 10 傑入りした選手はわずか 2 名

<日本学生歴代 10 傑> 木村泰子 (京産大、1995)、佐藤由美 (京産大、1997)

竹中理沙 (立命大、2010) 西原加純 (佛教大、2010)

吉本ひかり (佛教大、2010)、田中華絵 (立命大、2010)

(10 傑以内複数名大学) 立命大 5 名、佛教大 3 名、京産大 2 名

10000m 関西学生記録 31 分 30 秒 92<2010> 10 傑平均 32 分 18 秒 77 (↓)

2015 年以降ランキング 10 傑入りした選手は一人もない

<日本学生歴代 10 傑> 吉本ひかり (佛教大、2010)、木村泰子 (京産大、1995)

九嶋映莉子 (京産大、2011)

(10 傑以内複数名大学) 佛教大 4 名、立命大 3 名、京産大 2 名

ハーフマラソン 関西学生記録 1 時間 10 分 40 秒<2004> 10 傑平均 1 時間 11 分 30 秒 (↓)

2015 年度以降ランキング 10 傑入りした選手はわずか 2 名

<日本学生歴代 10 傑> 飯島希望 (佛教大、2004)、寺田恵 (関学大、2004)

木崎良子 (佛教大、2007)

(10 傑以内複数名大学) 佛教大 4 名、立命大 3 名、京産大 2 名

100mH 関西学生記録 13 秒 18<2019> 10 傑平均 13 秒 44 (↑)

2014 年以降からレベルアップ

<日本学生歴代 10 傑> 田中佑美 (立命大、2019)、伊藤愛里 (関大、2011)

田中杏梨 (甲南大、2015)

(10 傑以内複数名大学) 立命大、関大、大阪成蹊大各 2 名

400mH 関西学生記録 56 秒 75<2016> 10 傑平均 57 秒 75 (↑)

2011 年以降からレベルアップ

<日本学生歴代 10 傑>石塚晴子 (東大阪大、2016)、梅原紗月 (立命大、2016)
三木汐莉 (東大阪大、2011)

(10 傑以内複数名大学) 東大阪大、立命大、龍谷大各 2 名

3000mSC 関西学生記録 9 分 55 秒 01<2020> 10 傑平均 10 分 18 秒 13 (↑)

2015 年以降からレベルアップ、2020 年に関西学生記録が更新

<日本学生歴代 10 傑>西出優月 (関外大、2020)

(10 傑以内複数名大学) 京産大 4 名、立命大 2 名

10000mW 関西学生記録 44 分 52 秒 90<2007> 10 傑平均 46 分 29 秒 45 (ー)

2013 年以降に 5 名がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑>瀧瀬真寿美 (龍谷大、2007)、三村芙実 (立命大、2004)
前田浩唯 (立命大、2013)、河添香織 (立命大、2017)
藪田みのり (武庫女大、2020)

(10 傑以内複数名大学) 立命大 3 名、びわスポ大 2 名

4×100mR 関西学生記録 44 秒 82<2018> 10 傑平均 45 秒 03 (↑)

ランキング 10 傑入りは全て 2015 年以降

<日本学生歴代大学別 10 傑>立命大 (2018)、甲南大 (2017)、大阪成蹊大 (2016)

(10 傑以内複数名大学) 甲南大 4 チーム、立命大、大阪成蹊大 3 チーム

4×400mR 関西学生記録 3 分 36 秒 67<2012> 10 傑平均 3 分 37 秒 83 (ー)

ランキング 10 傑入りは全て 2012 年以降

<日本学生歴代大学別 10 傑>東大阪大 (2012)、立命大 (2018)、大阪成蹊大 (2019)
甲南大 (2015)

(10 傑以内複数名大学) 東大阪大 5 チーム、立命大 3 チーム、大阪成蹊大 2 チーム

走高跳 関西学生記録 1m84 10 傑平均<1985、1997> 1m80 (ー)

2011 年以降に 6 名がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑>加藤純子 (天理大、1985)、津田シェリアイ (東大阪大、2018)

(10 傑以内複数名大学) 天理大、大体大、関大、武庫女大、大教大、甲南大各 2 名

棒高跳 関西学生記録 4m22<2009> 10 傑平均 3m92 (ー)

2013 年以降に 6 名がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑>我孫子智美 (同大、2009)、竜田夏苗 (武庫女大、2013)
那須真由 (園田学女大、2017)

(10 傑以内複数名大学) 武庫女大 4 名、びわスポ大、滋賀大各 2 名

走幅跳 関西学生記録 6m27<2017> 10 傑平均 6m20 (↑)

2012 年以降に 9 名がランキング 10 傑入り

(10 傑以内複数名大学) 立命大、大阪成蹊大各 3 名

三段跳 関西学生記録 13m65<2019> 10 傑平均 12m87 (↑)

2010 年以降に 9 名がランキング 10 傑入り

<日本学生歴代 10 傑>河合栞奈 (大阪成蹊大、2019)

(10 傑以内複数名大学) 関大 3 名、大阪成蹊大 2 名

砲丸投 関西学生記録 15m27<2014> 10 傑平均 14m75 (↑)

2010 年以降 7 名がランキング 10 傑入り

(10 傑以内複数名大学) 大体大 6 名

円盤投 関西学生記録 53m08<1984> 10 傑平均 48m05 (↓)

2012 年以降、ランキング 10 傑入りは 3 名のみ

<日本学生歴代 10 傑>北森郁子（天理大、1984）
 （10 傑以内複数名大学）大体大 4 名、天理大 2 名
ハンマー投 関西学生記録 59m41<2021> 10 傑平均 56m76（↑）
 2011 年以降 8 名がランキング 10 傑入り
 （10 傑以内複数名大学）大体大 6 名、立命大 2 名
やり投 関西学生記録 62m39<2021> 10 傑平均 56m94（↑）
 2012 年以降 6 名がランキング 10 傑入り
 <日本学生歴代 10 傑>武本紗栄（大体大、2020）、佐藤友佳（東大阪大、2012）
 山内愛（大阪成蹊大、2015）
 （10 傑以内複数名大学）大体大 4 名、東大阪大 2 名
七種競技 関西学生記録 5486 点<2016> 10 傑平均 5278 点（↑）
 2015 年以降 7 名がランキング 10 傑入り
 <日本学生歴代 10 傑>西村莉子（武庫女大、2016）
 （10 傑以内複数名大学）武庫女大 3 名、立命大 2 名

—第 20 章— 本連盟の近年の動向と課題

1. 登録者数の推移

1982（昭和 57）年以降の資料しかないため、憶測の域を出ないが、それ以前の登録人数は 2000 名を上回ることにはなかったと思われる。2020（令和 2）年の男子の登録者数は 1982 年の約 1.7 倍にとどまっているが、女子は約 3 倍に増えている。女子のトラック&フィールド、駅伝で本連盟が好成績を残しているのは、このことにも起因しているのではないかと考える。

2019（令和元）年から登録者数は減少に転じており、2020（令和 2）年の登録者数は前年比 10% 減と大きく減少した。コロナ禍のためほとんどの大学がオンライン授業を行ったことで課外活動をする機会を失ってしまい、結果的に入部者が減少したと考えられる。なお、2021（令和 3）年の登録者数は前年に比べ約 100 名増加している。

* 登録者数の推移

	男子	女子	合計	加盟校数	男女比	登録者前年比
1982(昭和57)年	1419	345	1764	61	80:20	—
1983(昭和58)年	1485	359	1844	58	81:19	104.5
1984(昭和59)年	1575	403	1978	57	80:20	107.3
1985(昭和60)年	1565	442	2007	62	78:22	101.5
1986(昭和61)年	1573	446	2019	61	78:22	100.6
1987(昭和62)年	1614	512	2126	68	76:24	105.3
1988(昭和63)年	1659	560	2219	72	75:25	104.4
1989(平成元年)	1676	591	2267	73	74:26	102.2
1990(平成 2)年	1780	654	2434	74	73:27	107.4
1991(平成 3)年	1828	680	2508	76	73:27	103.0
1992(平成 4)年	1994	757	2751	77	72:28	109.7
1993(平成 5)年	2078	787	2865	80	73:27	104.1
1994(平成 6)年	2111	819	2930	80	72:28	102.3
1995(平成 7)年	2003	819	2822	79	71:29	96.3
1996(平成 8)年	2018	771	2789	80	72:28	98.8
1997(平成 9)年	1945	742	2687	81	72:28	96.3

1998(平成10)年	不明	不明	不明	84	不明	不明
1999(平成11)年	1772	670	2442	84	73:27	—
2000(平成12)年	1782	648	2430	86	73:27	99.5
2001(平成13)年	1809	677	2486	78	73:27	102.3
2002(平成14)年	1805	673	2478	73	73:27	99.7
2003(平成15)年	1811	708	2519	78	72:28	101.7
2004(平成16)年	1861	744	2605	73	71:29	103.4
2005(平成17)年	1951	777	2728	77	72:28	104.7
2006(平成18)年	2018	811	2829	77	71:29	103.7
2007(平成19)年	2038	832	2870	74	71:29	101.4
2008(平成20)年	2007	844	2921	77	69:31	101.8
2009(平成21)年	2111	889	3000	74	70:30	102.7
2010(平成22)年	2181	926	3107	80	70:30	103.6
2011(平成23)年	2285	951	3236	80	71:29	104.2
2012(平成24)年	2366	994	3360	75	70:30	103.8
2013(平成25)年	2417	966	3383	73	71:29	100.7
2014(平成26)年	2475	1033	3508	85	71:29	103.7
2015(平成27)年	2523	1024	3547	85	71:29	101.1
2016(平成28)年	2648	1041	3689	78	72:28	104.0
2017(平成29)年	2658	1103	3761	74	71:29	102.0
2018(平成30)年	2679	1129	3808	79	70:30	101.2
2019(令和元)年	2647	1121	3768	82	70:30	99.1
2020(令和 2)年	2416	1007	3423	74	71:29	90.1
2021(令和 3)年	2495	1031	3526	69	71:29	103.0

2. ネット動画ライブ配信（駅伝、インカレ）の実施

2018（平成30）年から関西学生女子対校駅伝、関西学生対校駅伝を、また2019（令和元）年からは関西インカレを、読売テレビの協力によりインターネットによるライブ動画配信を行っている。主旨は本連盟関係者だけでなく中高校生の陸上部員や陸上競技に関心を持つ一般の方々に、本連盟事業に対して関心を持ってもらうためである。また、このライブ動画配信により高校生が本連盟主催大会に興味を持ち、加盟校に進学する一助となることも期待している。各大会へのアクセス数は徐々に増加しており、アクセス数をさらに増やすために、2019（令和元）年の『月刊陸上競技』には「関西学生男女の駅伝展望」の掲載を行った。

2020年度シーズン前に新型コロナウイルス感染症が蔓延したために、10月中旬に延期していた第97回関西インカレを無観客試合として行うことになった。大会に応援に来ることが出来ない部員や関係者、保護者等のために4日間を通してライブ動画配信を行い、平日開催であったが1日約3～4万のアクセス数があった。またトラック種目のほぼ全種目の決勝を本連盟のOB役員が解説者となり、ネットライブ配信を盛り上げた。コロナ禍のため、京丹後市内のみで開催した第82回関西学生対校駅伝については、参加校に対して地元での応援を中止したこともあり、アクセス数は前年の約4倍以上となる4.5万となった。また、京丹後市が地上波放送の実現を目的としてふるさと納税制度を使って寄附金を集めていただき、年末の深夜時間帯であるが20分間のダイジェスト版を放映することができた。

2021年4月から読売テレビとメディアパートナー協定を結び、広報関係に関する支援、アドバースを受けることになり、その結果、約20年ぶりにホームページの改修を行うことができた。

2021年度は支部インカレを無事行うことができたが、4月から関西圏に変異ウィルスが蔓延したため、昨年同様10月中旬に第98回関西インカレを行い、全日程ライブ動画配信を昨年同様行った。関西インカレには100周年記念事業のため、東京2020五輪に選ばれた卒業生4名を招いた。

新たに関西学生対校女子駅伝、関西学生対校駅伝については、加盟校のOG・OBで両駅伝で活躍し、実業団でも活躍している卒業生をゲスト解説者に招いて、ライブ動画配信を盛り上げた。また、第83回関西学生対校駅伝でも、昨年同様に地上波テレビでダイジェスト版を放映した。

3. 兵庫インカレの女子対校戦の開始

兵庫インカレは男子のみの対校戦を行っていたが、女子の登録大学、登録人数が増えてきたため、2018(平成30)年から女子も対校戦を行うことにした。初優勝校は園田学女大となっている。

4. 京都インカレの競技日程の変更

京都インカレは従来、関西インカレ出場のための最終記録挑戦会的な意味合いをもつ競技会を兼ねていたため、京都支部以外の大学も参加が可能であった。そのため参加人数が多く、2日間に亘り実施していたが、一般財団法人京都陸上競技協会審判員の高齢化や2日間協力できる審判員の確保が難しいこともあり、2019(平成31)年より1日開催とした。

5. 東京2020五輪派遣プロジェクトの設置

東京2020五輪に選手を数多く輩出することを目的に、「東京2020五輪派遣プロジェクト」を2017(平成29)年度から立ち上げた。強化委員会で明確な選考基準を設け、原則3名の指定強化選手を決めて強化費の支援を行った。指定強化選手の氏名、当該年度の実績は以下の通りである。

2017年度 山西(京大、4年) ユニバーシアード20km競歩金メダル
中村(大阪成蹊大、4年) ユニバーシアード4×100mR銅メダル
多田(関学大、3年) 世界陸上4×100mR銅メダル
2018年度 多田(関学大、4年、継続) アジア大会4×100mR金メダル
塩見(立命大、1年) アジア大会800m5位
川田(東大阪大、1年) 日本選手権400m1位
2019年度 坂井(関大、4年) 世界陸上4×100mR代表候補
河内(近大、4年) 世界陸上4×400mR代表

指定強化選手の中から東京2020五輪に多田、山西の2名を送り出すことができた。

1964(昭和39)年の東京五輪には4名の選手が選出されているが、東京2020五輪には指定強化選手の山西、多田のほか、男子で50km競歩の丸尾、女子で20km競歩の河添、女子4×100mRで現役の齋藤、青山が代表として、壱岐あいがエントリーメンバーとして選ばれ、戦前のベルリン五輪10名に次ぐ7名が代表となった。

6. 関西学生ハーフマラソン選手権の設置

本連盟が産経新聞社主催の大阪ハーフマラソン(大阪女子マラソン併催)の沿道整理に協力していた縁で、2018(平成30)年1月の大会から産経新聞社の好意で、「関西学連長距離強化プロジェクト」大阪ハーフマラソンとして本連盟の事業に組み込むことになった。長距離強化委員が設定した基準で、本連盟出場選手に対して招待、一般の区分けを行い、スタート位置等の配慮もあり、男子ではハーフマラソンの本連盟歴代50傑ランキングに2018年から3年間で14名がランクインするという好結果を生みだしている。2020(令和2)年からは関西学生ハーフマラソン選手権に格上げして8位入賞者まで表彰を行い、選手の出場意欲と競技力の向上を図ることにした。

2021(令和3)年は大阪ハーフマラソンがコロナ禍で中止になり、長居周回道路にて関西ハーフマラソン選手権を行う予定であったが、緊急事態宣言下であったため、日本学生ハーフマラソン選手権(男女)の参加資格突破のための10000mの記録挑戦会をヤンマーフィールド長居で行った。

7. 第1回全国招待大学対校男女混合駅伝競走大会の開催

2021(令和3)年2月21日長居公園内特設コース(20km)を使って2km、3km、5kmのコースを男女6名が轡をつなぐ世界で初めての学生男女駅伝競走大会を本連盟、関西テレビ、産経新聞

社の主催で行うことになった。新型コロナウイルス感染症により緊急事態宣言期間が延長されたため開催日が延期となり、3月21日風雨の強いなか本連盟から10校（関学大は出場辞退）と選抜チームが、関東学連から6校（東洋大学と東海大学は出場辞退）の計17チームが参加して行われ、順天堂大学が1時間1分53秒で初代王者に輝いた。なお、本連盟では京産大が2位、立命大が4位、関大が7位と好成績を残した。また、東西の国立4大学（東大、一橋大、京大、阪大）の対校戦も同時に行われ、阪大が初優勝を飾った。

8. 新型コロナウイルス感染症対策を講じて大会開催

2020年初めから新型コロナウイルス感染症により全世界がパンデミックとなった。スポーツ界においては東京2020五輪が翌年に延期され、本連盟においても陸連からの要請で6月末まで予定していた主催大会を全て中止、または延期とした。7月に入り府県陸協の大会が開催されるようになり、本連盟では陸連から提示されたガイドラインに基づき、8月以降の大会が行えるよう準備にとりかかった。8月、9月には学連競技会を独自のガイドラインを設けて実施、9月下旬の女子駅伝以降は陸連からのガイドライン改訂に基づき、「新型コロナ感染症対策室」を設け、参加校には大会参加するために「誓約書」の提出を求め、可能な限りの対策を講じて大会を開催した。

2021年度に入り、4月下旬に3度目の緊急事態宣言が大阪、兵庫、京都に発出されたため、5月下旬の関西インカレを10月に延期して、インカレ日程を使って日本インカレにつながるチャンピオンシップ（選手権）を実施した。7月に入りアルファ株よりも更に感染力が強いデルタ株が日本全国に蔓延し、4度目の緊急事態宣言が大阪、兵庫、京都に発出された。ワクチンの職域接種が7月頃から加盟校でも行われるようになり、駅伝に関しては接種状況を調査して大会参加条件の一つに加えた。

9. 組織の整備（規約、危機管理）

数年かけて本連盟規約全般を会長、幹事長、事務局長で見直し、①規約の文言を連合の規約に準じて変更、②現状に即した内容に規約を改廃、③これまでなかった内容については追加して文書化、といった整備を行った。なお、規約にある「会賓」については、近畿2府4県の陸上競技協会と更なる連携を深めるため、会長に本連盟の会賓に就いてもらうことにした。

危機管理面では、

- ① 2017（平成29）年から主催大会の陸協審判員の大会中の怪我、病気を担保した、また関西インカレのハーフマラソンについては、長居公園内の近隣居住者が利用する道路を使用するため、レース中の不測の事故への対応を原則、可能とした保険に毎年加入することにした。
- ② 倫理委員会が設置されたので、弁護士資格をもつ評議員に事案が起こった際に委員会でアドバイザーとして意見を述べてもらえるような態勢を構築した。
- ③ 医事委員会を設置していたが、常駐の医師がいなかったため、大会運営に苦勞していた。京大、阪大のOB医師各1名を委嘱できる状況になったため、感染症対策室の設置が必要な大会だけでなく、主催大会は可能な限り医師が待機できるようにした。

10. 記念事業の実施

評議員会で記念事業について検討した際には、記念誌、記念式典、海外遠征の3本柱で行うことで決定していたが、コロナ禍のため以下のような対応をとることにした。

- ① 海外遠征については、100周年記念事業として行わず、時期をみて再度検討することになった。
- ② 記念式典については、本連盟設立に協力をしていただいた関東学連の関係者を招待する方向で日程調整を行い、2022（令和4）年1月下旬に開催する予定であった。しかしながら、終息が見込まれないコロナ禍で式典を行うことは難しいと判断し延期することにした。
- ③ 記念誌については、従前から準備を進めていたため予定通り2022年2月下旬に発刊することができた。記念誌費用は100周年記念事業資金（会長基金）から支出を行った。

《注》

- (1) 豊中運動場→1913（大正 2）年設置、豊中市玉井町（阪急豊中駅の西方約 500m）
- (2) 各校陸上競技部の発足
1913（大正 2）年 神戸高商
1918（大正 7）年 関学
1919（大正 8）年 同大
1921（大正 10）年 関大
1923（大正 12）年 京都帝大
- (3) 対校戦（定期戦）の始まり
1919（大正 8）年 9 月 神戸高商対慶大（鳴尾運動場）＜日本最初の対校戦＞
1920（大正 9）年 5 月 関学対早大（鳴尾運動場）
1920（大正 9）年 7 月 神戸高商対関学（鳴尾運動場）
1920（大正 9）年 10 月 一高対三高（東京帝大運動場）
1924（大正 13）年 5 月 関大対法大（大阪市立運動場）
1924（大正 13）年 6 月 京都帝大対同大（京都植物園運動場）
1924（大正 13）年 10 月 東京帝大対京都帝大（京都植物園運動場）
1925（大正 14）年 5 月 同大対明大（京阪グラウンド）
- (4) 鳴尾運動場→1916（大正 5）年、西宮市鳴尾町に阪神電鉄が元競馬場跡地に
1 周 800m、400mの直走路のグラウンドを設置。
大阪市立運動場→1923（大正 12）年設置、大阪市港区八幡屋（現在の地下鉄朝潮橋駅西方）
京都植物園運動場→1919（大正 8）年正式開場、京都市上賀茂（現在の京都府立大学運動場）
京阪グラウンド→1922（大正 11）年設置、寝屋川市豊野町（京阪寝屋川駅北方約 600m）
- (5) 甲子園南運動場→1929（昭和 4）年設置、西宮市浜甲子園
- (6) 1925（大正 14）年 6 月 28 日大阪市立運動場で第 1 回大阪インカレを関大、大外語、大阪高商、大歯専、大薬専の 5 校で行った記事が当時の朝日新聞大阪版に記載有り）
- (7) 神戸市民運動場→1932（昭和 7）年設置、神戸市長田区蓮池町（山陽電鉄西代駅北方）
- (8) 西京極陸上競技場→1942（昭和 17）年設置
- (9) 中モズ競技場→1941（昭和 16）年設置、堺市中百舌鳥町（南海電鉄高野線中百舌鳥駅東方）
- (10) 「ボーナス得点制」
日本記録 30 点、日本タイ記録 25 点、日本学生記録 20 点、日本学生タイ記録 15 点、関西学生記録 10 点、関西学生タイ記録 7 点、大会記録 5 点、大会タイ記録 2 点
- (11) (↑) ……2010 年以降（大幅な）競技力向上がみられる
(一) ……2010 年以降、それ以前と比べて競技力が変わらない
(↓) ……近年の競技力はそれ以前と比べて向上していないか劣っている
- (12) 登録人数は本連盟、連合の資料に基づき掲載。一部、本連盟と連合の資料で人数が若干異なる年もあるが、その場合は本連盟の資料を優先して記載している。

《参考文献》（順不同）

- 『日本陸上競技連盟七十年史』（1995年）
『日本陸上競技連盟八十年史』（2005年）
『秩父宮賜杯実業団・学生対抗陸上競技大会 50年史』（2010年）
『昭和四年度年鑑（日本学生陸上競技連合）』（1929年）
『昭和十一年度年鑑（日本学生陸上競技連合）』（1937年）
『昭和十三年度年鑑（日本学生陸上競技連合）』（1939年）
『40年史（日本学生陸上競技連合）』（1969年）
『日本学生陸上競技 70年史』（1998年）
『日本学生陸上競技 80年史』（2008年）
『日本学生陸上競技 90年史』（2018年）
『中国四国学生陸上競技連盟概史』（1987年）
『九州学生陸上 70年』（2000年）
『九州学生陸上 80年』（2010年）
『関西学生陸上競技連盟「八咫鳥」』（1965年）
『関西学生陸上競技連盟創立五十周年記念誌』（1972年）
『関西学生陸上競技連盟創立 60周年記念誌』（1982年）
『関西学生陸上競技連盟創立 70周年記念誌』（1992年）
『昭和八年度京都陸上競技年鑑』（1934年）
『昭和九年度京都陸上競技年鑑』（1935年）
『兵庫陸上競技五十周年史』（1982年）
『京都の駅伝史－京都学生駅伝を中心に－』（1989年）
『甲南学園陸上競技部「野を行く」』第3号（1956年）
『京都大学陸上競技部会誌「蒼穹」50周年記念号』（1974年）
『関西学院大学陸上競技部 70年誌』（1988年）
『甲南学園陸上競技部「野を行く」』第5号（1991年）
『同志社陸上八十年の歩み』（1998年）
『創部 100周年記念誌（神戸大学陸上競技部）』（2013年）
『同志社大学体育会陸上競技部創部百周年記念誌』（2020年）

2021年度 関西学生陸上競技連盟加盟校一覧

*五十音順

京都支部	大阪支部	兵庫支部
大谷大学	追手門学院大学	関西学院大学
京都外国語大学	大阪医科薬科大学	関西福祉大学
京都教育大学	大阪大谷大学	甲南大学
京都光華女子大学	大阪学院大学	神戸学院大学
京都工芸繊維大学	大阪教育大学	神戸国際大学
京都産業大学	大阪経済大学	神戸大学
京都女子大学	大阪芸術大学	園田学園女子大学
京都大学	大阪工業大学	兵庫医科大学
京都橘大学	大阪国際大学	兵庫教育大学
京都府立医科大学	大阪産業大学	兵庫県立大学
京都府立大学	大阪市立大学	兵庫大学
京都薬科大学	大阪商業大学	武庫川女子大学
滋賀医科大学	大阪成蹊大学	流通科学大学
滋賀県立大学	大阪体育大学	以上 13校
滋賀大学	大阪大学	
同志社女子大学	大阪府立大学	
同志社大学	関西医科大学	
びわこ学院大学	関西外国語大学	
びわこ成蹊スポーツ大学	関西大学	
佛教大学	近畿大学	
明治国際医療大学	四天王寺大学	
立命館大学	摂南大学	
龍谷大学	天理大学	
以上 23校	奈良教育大学	
	奈良県立医科大学	
	奈良女子大学	
	羽衣国際大学	
	阪南大学	
	東大阪大学	
	放送大学関西	
	桃山学院大学	
	大和大学	
	和歌山大学	
	以上 33校	

2021年度 関西学生陸上競技連盟加盟校プロフィール

大学名	関西学院大学				
創部年	1918年				
部員数	男子	127名	女子	34名	文責 (主務) 加藤 僚
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は1部校に属しており、昨年の関西インカレ男子総合2連覇を達成しました。また、5月の関西チャンピオンシップ大会では8名が優勝し、個々の能力の高さを証明することができました。去年の日本インカレで主将の川上ヒデルが関西勢として初めて十種競技で優勝しています。女子部員も年々増えており、去年の関西インカレでは創部初の総合7位になり、勢いが増してきています。</p> <p>今年度は、男子日本インカレ総合3位、関西インカレ3連覇、女子関西インカレ総合5位という目標を掲げています。そして“STAY GOLD” (関学陸上部が勝者であり続ける、勝利の象徴であることを証明する) というスローガンの下、日々練習に励んでいます。</p> <p>普段の練習は、400m6レーン全天候型トラックの第2フィールドで行っています。また、横にはスポーツセンターがあり、合宿やミーティングで利用しています。学内にはトレーニングセンターもあり、各自補助的な練習場所として使用しています。しかしながら、コロナ禍のためこれらの施設を満足に利用できない状況が続いており、チーム全体で前進していく雰囲気を作ることができておりません。そのため、新たに部内報の位置づけでInstagramの運営を始め、大会の告知、仲間の結果を共有するだけでなく、大会内容を出場選手にインタビューし共有することで、活躍している選手の考えを知るきっかけを作るようにしました。今では新入部員紹介やオリジナルTシャツの告知、各大会の選手の戦績なども発信し、帰属意識や士気を高める一つのツールとして活用しています。</p> <p>主な戦績はチームとしては関西インカレ総合優勝15回、西日本インカレ総合優勝2回、日本インカレは1961年、1963年の総合4位を最高順位に8位以内の入賞を14回成し遂げました。個人では五輪に5名出場、多田修平先輩は東京2020五輪に100m、4×100mRに出場し、リレーは決勝に残りましたが、バトンが渡らず途中棄権という残念な結果となりました。世界陸上には2名出場、多田先輩はロンドン、ドーハ世界陸上で銅メダルを獲得、ユニバーシアードには9名出場、多田先輩、浅井浄先輩が4×100mRで金、銀メダル、寺田恵先輩がハーフマラソンで銀メダルを獲得アジア大会には4名出場、多田先輩が金メダル、柳恭博先輩、浅井先輩が銀メダルをを4×100mRで獲得しています。関西インカレで浅井先輩、多田先輩が100mで、星加利樹先輩が400m、正木定雄先輩が1500m、戦前では寺田辰次郎がハンマー投、渡部武寿先輩が五種競技で、そして広野雄大先輩が十種競技で4連覇、また西日本インカレで1964年の東京五輪に出場した島崎(旧姓:田中)章先輩が110mH、山田裕司先輩が棒高跳で4連覇を達成しています。</p> <p>駅伝ですが、関西学生駅伝は第79回大会で初優勝を成し遂げました。全日本大学駅伝に11回、出雲駅伝に8回出場しています。なお、全日本大学駅伝の日本学連選抜で出場した石井優樹先輩が第1区間で区間賞を獲得するという好結果も残しています。なお、暫く女子部員がいないため駅伝の出場はありませんが、全日本大学女子駅伝の第1回、第2回大会に2年連続で出場したこともあります。</p> <p>リオ五輪の棒高跳に出場した萩田大樹先輩が今年から棒高跳コーチに就いて、指導を受けています。部員たちは偉大な先輩から直接的、間接的に刺激をもらいながら練習に励んでいます。</p> <p>部のOB・OG会組織に「月見ヶ丘クラブ」があります。長年にわたり物心両面で支援をしていただいています。100周年という節目のある世代である我々現役生は、次の世代に繋いでいくという重要な役割を担っています。掲げたスローガンと目標達成のために尽力していきます。</p>					

大学名	同志社大学				
創部年	1919年				
部員数	男子	98名	女子	45名	文責 (主将) 須藤 光祐
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は現在1部校に属し、2019年の関西インカレで初となる男子総合100点をこえる106点で1部3位という成績を残しました。女子は男子に比べると人数は少ないですが、2018年関西インカレから3年連続で総合8位入賞を果たしています。また、日本インカレなど全国大会でも優勝者入賞者を出しています。</p>					
<p>練習は京田辺キャンパスの陸上競技場で行っています。400mトラック(全天候型)に加え、フィールド種目の練習場、また敷地内にはウエイト練習場も設置されています。坂道が非常に多いので、坂を利用したメニューも盛んに行っています。豊富な練習器具や恵まれた練習環境で競技力を総合的に強化できるのが、本学の魅力の一つです。</p>					
<p>本学の特徴の一つとして、「学生主体」が挙げられます。コーチはいますが、練習メニューは部長を中心に学生同士で話し合っ決めて、各人の目標や部全体の総合目標達成にむけて練習に取り組んでいます。与えられたメニューをこなすだけでなく、自分に足りないものは何か、今なすべきことは何かを考えて練習に取り組んでいることが、近年の関西インカレや全国大会での好成績に繋がっていると思います。</p>					
<p>過去の実績は、関西インカレは総合優勝3回ですが、個人の国際大会における戦績には特筆すべきものがあります。戦前のロスアンゼルス五輪に西貞一先輩が4×400mRに出場し5位に入賞、アジア大会の前身の極東選手権の4×400mRで優勝、極東選手権では榎原如一先輩が120yHで銀、佐伯巖先輩が440yで銅メダルを獲得しています。戦後の五輪に5名が出場、朝原宣治先輩は1996年から2008年の五輪に連続4回出場、2008年北京五輪で4×100mRで銀メダル、世界陸上6回出場、ユニバーシアード大会、アジア大会にも出場、アジア大会で銀・銅メダルを獲得しています。早狩実紀先輩は五輪、世界陸上4回、ユニバーシアード大会、アジア大会に出場し、アジア大会の3000mSCで銅メダルを獲得しています。我孫子智美先輩は五輪、アジア大会に出場し、アジア大会の棒高跳で銅メダルを獲得しています。世界陸上には朝原、早狩先輩のほか、荒川大輔先輩は2回出場し、ユニバーシアード大会にも出場しました。ユニバーシアード大会(戦前の国際学生競技を含む)には朝原、早狩、荒川先輩を含め6名が出場し、西先輩がオリンピックリレーで3位になっています。ユニバーシアード大会に出場した岩佐克俊先輩はアジア大会の4×100mR、4×400mRで金、銅メダルを獲得しています。アジア大会では岡本貴美子先輩も4×100mRで銀メダルを獲得しました。関西インカレでは松浦成夫先輩が200m、西先輩が400m、榎原先輩、手平裕紀先輩が110mH、荒川先輩が走幅跳、現監督の小川智央先輩が円盤投で4連覇を達成しています。また、森田真治先輩は400mの関西学生記録を保持しています。</p>					
<p>本学陸上競技部には同窓会組織として「同志社陸友会」があります。先輩方には練習環境整備や大会に出場する際や合宿費の一部として、私たちに必要な活動資金に支援をいただいています。</p>					
<p>2020年2月には創部100周年記念式典が行われました。全国各地から陸上競技部の先輩方、本学陸上競技部にゆかりのある方々、総勢500名以上が集う盛会となりました。この式典を通して、現役生と卒業生が交わることで、陸友会と現役生が一層絆を深めていくことができれば本学陸上競技部は今後も成長していくことができると考えています。</p>					

大学名	関西大学				
創部年	1921年				
部員数	男子	114名	女子	45名	文責 (渉内主務) 市林 佳育
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
2021年、本学陸上競技部は創部100年を迎えました。そして、次の100年に向けて走り出しました。4月に開催された大阪インカレは、男子が54年ぶりに総合優勝を勝ち取り、女子は総合2位というすばらしいスタートを切りました。コロナ禍で活動が制限されている中、今年は自己記録を更新する者が多く、日本インカレ標準記録突破者が20名を超えています。					
普段は、関西大学千里山キャンパス中央グラウンド(全天候型)を拠点として、日々質の高い練習を行っています。練習メニューはコーチが決定するパートや、パート長が中心となって学生が主体的に話し合って決めるパートもありますが、全部員が目標達成に向かって練習に励んでいます。					
本学陸上競技部は、創部から100年の間に関西学連で一番多くのオリンピックを輩出しています。					
1932年の第10回ロスアンゼルス五輪には大島鎌吉先輩が三段跳で3位、長尾三郎先輩がやり投に出場しました。1936年の第11回ベルリン五輪には大島先輩と長尾先輩がOBで三段跳、やり投に連続出場、大島先輩は三段跳で6位に入賞、また谷口睦生先輩が200m、福田(森山)時雄先輩が400mH、戸上研之先輩が走幅跳、古田康治先輩が110mHに出場、関西大学から6名出場という輝かしい成果を上げています。なお、大島先輩はベルリン五輪の陸上競技選手団の主将を務め					
1934年には三段跳で世界記録を樹立しています。アジア大会の前身の極東選手権では大島、長尾先輩が金メダル、また津田晴一郎先輩も800mで金メダルを獲得しています。大島先輩は1964年の第18回東京五輪では選手強化本部長、日本選手団団長を務め関西学連会長にも就かれました。					
古田先輩も福岡陸上競技協会理事長として陸上競技界の発展に貢献されています。					
戦後の1956年の第16回メルボルン五輪には園田裕四郎先輩が三段跳で出場、アジア大会では走幅跳で銀メダルを獲得しています。また、田尾一郎先輩も4×400mRで銀メダルを獲得しました園田先輩は関西学連会長も務められています。ユニバーシアード大会(戦前の国際学生大会を含む)					
には8名が出場し、伊藤愛里先輩が100mHで女子で初めて国際大会に出場しています。また、荻野純人先輩は3000mSCの関西学生記録を保持されています。暫く、五輪出場はありませんでしたが、2012年の第30回ロンドン五輪に短距離コーチの東佳弘先輩が4×400mRに出場しました。近年では、2020年3月に卒業した坂井隆一郎先輩が、2019年の日本学生個人選手権					
100mで10秒12の日本学生歴代7位となる記録で優勝しています。					
駅伝では、男子は関西学生駅伝は11回優勝、全日本大学駅伝は12回出場、最高順位は11位、出雲駅伝は6回出場、最高順位は6位となっています。また、女子は関西学生女子駅伝は2回優勝、全					
日本大学女子駅伝は13回出場、最高順位は5位、全日本大学選抜女子駅伝は7回出場、最高順位は8位となっています。なお、全日本大学女子駅伝には2008年以来連続出場をしています。					
関西インカレには第1回大会から出場していますが、男子1部で10連覇を含め最多の26回優勝をしています。また、西日本インカレも7回優勝しています。関西インカレは1969年以降、優勝から遠ざかっていますが、OB・OG会「陸友会」の先輩方から、物心両面の支援をいただきながら、大阪インカレの男子総合優勝の勢いに乗り、関西インカレで54年ぶり男子総合優勝、女子総合上位					
を目指して部員一同精進していきます。					

大学名	京 都 大 学				
創部年	1 9 2 4 年				
部員数	男子	1 1 8 名	女子	3 0 名	文責 (主務) 川井 景太
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学陸上競技部は、第1回東大戦(東京大学との対校戦)を開催した1924(大正13)年に正式に創部し、3年後に100周年を迎える長い歴史を持つ部です。東京2020五輪に出場する競歩の山西利和先輩を含めると6名の五輪選手を輩出しています。古くは、1936(昭和11)年のベルリン五輪で田島直人先輩が三段跳で金メダル、走幅跳で銅メダルを、また同大会で原田正夫先輩が三段跳で銀メダルを獲得されています。五輪の一大会で陸上競技という種目において、金、銀、銅メダルを獲得され、また、この大会には松野栄一郎先輩も円盤投、ハンマー投で出場されており3名の先輩が五輪に出場されたことは京大陸上部の誇りとするところです。戦後初めて日本が五輪に復帰した1952(昭和27)年のヘルシンキ五輪にも山本弘一先輩がマイルリレーで出場されています。山西先輩は、2019(令和元)年のドーハ世界陸上20km競歩で金メダル、コロナ禍で1年延期の2021(令和3)年東京2020五輪で銅メダルを獲得、京大勢85年ぶりのメダリストになりました。世界陸上には山西先輩と同じ20km競歩に杉本明洋先輩が2大会連続で出場、ユニバーシアード大会には戦前ですが田島、原田先輩のほか、短距離で相沢巖夫先輩も出場されています。相沢先輩は100m、200mで日本記録も樹立されました。110mHで井街謙先輩、三段跳で原田先輩も日本記録を樹立されています。また、第1回日本インカレのマイルリレーで優勝していますが、関西勢として唯一の優勝となっていることも誇りに思っています。</p> <p>現在、本学は関西インカレ1部校に属してします。関西インカレは戦前に7回、戦後に1回1部校で優勝をしています。関西インカレのほか、夏の旧帝国7大学戦、東大戦、また長距離パートについては、さらに全日本大学駅伝出場、関西学生駅伝での目標達成を目指して練習に取り組んでいます。昨年度の関西インカレでは男子は総合8位、女子は残念ながら得点獲得はなりませんでしたが、また、関西学生駅伝は48年ぶりに4位と健闘しました。本年度は秋に延期になった関西インカレや対校戦駅伝で目標達成ができるよう頑張っていきたいと考えています。</p> <p>普段は大学キャンパス内のグラウンドを使用して週5回全体で練習をしています。グラウンドは正式な創部年である1924年に完成しました。その後、1931(昭和6)年に1周500mのグラウンドになり、2014(平成26)年には全天候型のトラック、人工芝が整備されました。投擲場に加えて、走幅跳、走高跳のピットもあり、基本的に全種目の練習をこのグラウンドで行うことができます。また、グラウンドの横には、各種ウエイト器具などが備え付けられているトレーニングルームもあります。</p> <p>本学陸上競技部は、京都大学だけでなく、京都女子大学など、他大学の選手も部員として一緒に練習しています。大所帯ですが、OBの方々等の支援を受けながら、役割分担をして学生主体で運営を行っています。</p> <p>部の同窓会組織として「蒼穹会」があり、会員数は1000名を超えています。蒼穹会からは物心両面の支援をして頂いているだけでなく、大会会場にも足を運んでくださる会員の方々も多くおられます。特に、対校戦では熱く応援していただき、非常に良い雰囲気で行うことができます。</p>					

大学名	立命館大学					
創部年	1927年					
部員数	男子	117名	女子	59名	文責	(渉外主務) 松村 哲平 川岸 汀
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>本学男女陸上部はびわこ・くさつキャンパスに2009年に完成した全天候型400mトラックのク インス・スタジアムを拠点に活動をしています。男子部、女子部に分かれています。立命館を背負 うチームとして各々が掲げる目標にむけて日々切磋琢磨して練習しています。2017年から本学主 催のRAG (Ritsumeikan Athletics Games)を中高生、一般向けに年に数回開催しています。草津市 内の1000名をこえる小学生を招待するスポーツによる地域交流を目的としたジュニアスポーツ フェスティバルKUSATSUへの参加協力、パラ・アスリート支援など社会貢献も積極的に行っ ています。2021年度からは企業とのパートナーシップ契約を締結しました。大学スポーツのクラ ブ運営を見直す契機と捉え、活動範囲を競技力強化だけに留めることなく活動の高度化を目指してい ます。</p>						
【男子部】						
<p>部員数が約120名の大規模チームになっており、主将をはじめ各役職を細分化することで学生主体 のチーム運営を行っています。トレーニングの年間計画やメニューは、パート毎にコーチのアドバイ スを受けながら、パート長を中心にパート単位で作成しています。</p> <p>主な戦績ですが、1936年のベルリン五輪の400mHに市原正雄先輩が、また2015年の北京 世界陸上の400mHに小西勇太先輩が出演しています。伝統的に駅伝が強く、関西学生駅伝は25 回優勝、出雲駅伝では6位、7位に各2回入賞しています。また、1964年の第40回箱根駅伝に はオープンチームとして参加しました。関西インカレは総合4度優勝していますが、インカレ種目2 3種目中9種目に関西学生記録保持者を輩出するという高いレベルの競技力を有し、近年日本インカ レでも総合7位、8位入賞を果たしています。この勢いを継続できるよう全パートが邁進する所存で す。</p>						
【女子部】						
<p>約60名の部員が関西インカレ、日本インカレ総合優勝、全日本大学女子駅伝、全日本大学女子選抜 駅伝優勝の四大目標を掲げ、活動を行っています。</p> <p>主な戦績ですが、全日本大学女子駅伝は1990年の初出場以来30年連続出場、5連覇を含む通算 10回の優勝、全日本大学女子選抜駅伝は2004年の大会創設以来15年連続出場、6連覇・4連 覇を含む通算11回の優勝を果たしています。日本インカレは2015年に総合優勝、日本選手権リ レーでは2冠を達成しました。国際大会では東京2020五輪に河添香織先輩が競歩で出場、3年の壹岐 あいこが女子リレーメンバーとして選出されました。世界陸上には加納由理先輩がマラソンで200 7年、2009年の大阪、ベルリン大会に連続出場、ユニバーシアード大会には延16名が出場し、 2013年のカザンユニバーシアード大会のハーフマラソンで津田真衣先輩が金メダルを獲得、団体 でも津田先輩を含め4名が金メダル、銀メダルは3名、銅メダルはリレーを含め3名が獲得するとい う輝かしい結果を残しており、世界で戦える選手を輩出する部として成長を続けています。また、2 021年には卒業生の田中佑美先輩が「UNIVAS AWARDS 2020-21」においてウーマン・オブ・ザ・ イヤー最優秀賞を受賞、競技に加えて学業においても評価される選手も在籍していました。</p> <p>これからも長距離、短距離、フィールドの全ての種目において強いチームであり続けることができる よう、部員全員で尽力していきます。</p>						

大学名	大阪体育大学				
創部年	1965年				
部員数	男子	145名	女子	59名	文責 (主務) 中島 貴心
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学陸上競技部は現在1部校に属しており、総勢200名を超える部員が日々自己記録の更新を目標に鍛錬に励んでいます。普段の練習は、公認記録会を実施している浪商学園陸上競技場の400mトラック、学内のトレーニングルームを利用しています。学生が主体となり、練習メニューを考え、選手同士の意見を尊重し、競技力向上を目指して日々練習に取り組んでいます。</p> <p>今年6月に行われた第105回日本選手権において女子主将の武本紗栄選手がやり投で3位、男子では400mで岩崎立来選手が8位、やり投では石坂力成先輩が4位、坂本達哉先輩が5位、中西啄真先輩が7位に入賞し、この他寒川健之介先輩、長谷川鉦平先輩も決勝に進み、5名が進出するという本学やり投の層の厚さを示すことができました。なお、6月に開催された個人選手権では武本選手が62m39を投げ関西学生記録を更新しました。また、パラ陸上選手として世界で活躍している山本篤さんは2006年のIPU世界選手権の100m、200m、走幅跳、4×100mRに出場しました。2008年には北京パラリンピックに出場し、走幅跳で銀メダルを獲得、また100mでも5位に入賞しました。2013年、2014年、2016年の国際大会、リオパラリンピックにも続けて出場し、入賞しています。東京2020パラリンピックの走幅跳では4位に入賞しています。</p> <p>このように毎年輝かしい戦績を残す選手が現れていますが、本学陸上競技部の活躍の歴史は1966年まで遡ります。バンコクアジア大会で清水修先輩が走高跳に出場し銀メダルを、辻下美代子先輩が200mで銀メダル、4×100mRで金メダルを獲得したことが始まりです。1972年のミュンヘン五輪には山三保子先輩が走高跳で本学初となる五輪出場を果たしています。世界陸上には延6名が出場、北田(岩本)敏恵先輩は1991年東京大会、1997年アテネ大会、1999年セビア大会の3大会で出場し、東京大会では4×100mRで日本記録を更新しています。また、ユニバーシード大会には延14名が出場し、1967年の東京大会で辻下美代子先輩が4×100mRで銀メダル、1985年の神戸大会で深尾真美先輩がマラソンで金メダル、1987年のザグレブ大会で金刺貴子先輩がマラソンで銀メダルを獲得し、1967年の東京大会に出場した田中君枝先輩が走高跳で6位、1995年の福岡大会で北田先輩が4×100mRで5位、2003年の大邱大会で堀岡智子先輩が5000m8位、10000m5位に入賞しています。また、アジア大会には延8名が出場し、辻下先輩以外にも1978年のバンコク大会で木口真佐江先輩が400mHで銅メダル、4×400mRで金メダルを、1994年の広島大会で藤村信子先輩がマラソン、北田先輩が4×100mRで銅メダルを獲得し、北田先輩は同大会の100mで日本記録を樹立しています。しばらく、国際大会への出場はありませんでしたが、2019年に坂本達哉先輩がユニバーシアードナポリ大会に16年ぶりに本学として出場しています。</p> <p>日本学生(日本)記録は100m、200mで北田先輩、400mで木口先輩、5000mで深尾先輩、10000mで田中三恵先輩、深尾先輩、100mHで江原紀子先輩(日本記録)、400mHで波多野浩美先輩(日本記録)、3000mSCで徳田夕佳先輩、マラソンで阿部しのぶ先輩、やり投で小正和代先輩、七種競技で辰巳公子先輩(日本記録)が樹立しています。</p> <p>2020年初の新型コロナウイルス感染症の影響により、練習の禁止、部分的な自宅待機、練習時間の短縮など、限定された環境が続いています。しかし、私たちは気持ちが折れることなく、各人が自身の目標を掲げ、置かれた環境の中で最大限の努力を続けていきます。</p>					

大学名	京都産業大学				
創部年	1965年				
部員数	男子	92名	女子	24名	文責 (主務) 西川 遥稀
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
大学開設と同時に創部された陸上競技部は、3年目に南部忠平先生(早大出)が総監督、蔭山靖夫先生(同大出)が監督として、学歌に謳われる「人材育成」の理念のもと部員に指導が行われました。					
その後、1979年の関西インカレ総合優勝を皮切りに22回の優勝回数を戦歴にもつ部として今日に至っています。駅伝ですが、男子は全日本大学駅伝に48回出場、1985年には関西勢として唯一の優勝を成し遂げ、区間賞も8名獲っています。出雲駅伝は27回出場し最高順位は4位、区間賞は4名が獲っています。関西学生駅伝は25年連続優勝を含む32回優勝しています。女子は全日本大学女子駅伝に27回出場、第12回から第15回大会まで4連覇し、区間賞はその4年間の15名を含む19名が獲得、全日本大学選抜女子駅伝は14回出場、区間賞は5名が獲っています。関西学生女子駅伝は第4回から第11回大会までの8連覇を含み10回優勝しています。個人でも特筆すべき選手が数多く出ています。溝口和洋先輩(やり投)、小坂田淳先輩(400m、4×400mR)、伊藤舞先輩(マラソン)は五輪、世界陸上、ユニバーシアード大会に出場しています。溝口先輩は国体で82m70の日本学生記録を樹立しました。木村泰子先輩(5000m、10000m)は世界陸上、ユニバーシアード大会に出場し、ユニバーシアードで銅メダルを獲得しました。木村先輩は5000mで日本記録を含む4度日本学生記録を更新、10000mでも日本学生記録を樹立しています。細川道隆先輩(マラソン)、吉田恵美可先輩(やり投)は世界陸上に出場、ユニバーシアード大会では泉宜廣先輩(マラソン)が金メダル、佐藤由美先輩(1500m、5000m)、奥野有紀子先輩(ハーフマラソン)が銅メダルを獲っています。岸本実先輩(マラソン)、河邊崇雄先輩(200m、4×100mR)、山本善之先輩(やり投)、光川愛先輩(10000m)、前田貴史先輩(ハーフマラソン)、重田円香先輩(ハーフマラソン)もユニバーシアード大会に出場しています。					
本学の練習は京都市北区の山間に位置する400m全天候型競技場(2011年完成)にて行っています。また、競技場が山間にあるため、山を利用したジョギングコースや坂ダッシュなど、競技場外にも恵まれた環境にあります。練習時間は、短距離・長距離・投擲で分かれており、練習メニューは指導者と選手それぞれの意見をすり合わせたくえで作成しています。					
近年の成績ですが、関西インカレは2019年総合7位、2018年総合4位と満足のいく結果ではありませんが、個々の成績では2021年、2020年日本選手権男子200m決勝進出、100m200m、4×100mR、110mHでチームベストが更新されるなど活躍がみられます。また、駅伝においてはチームの結果は思うような結果は出せていませんが、個々では結果を出す選手が増えてきていますので、日々精進してチーム成績につながるようにしていきたいと思えます。					
今年、第1回の全国招待大学対校男女混合駅伝が開催されましたが、1区で泉海地が区間賞を獲得しチームに大きな勢いをつけ関西勢としてトップの2位となり、男女のチーム力を見せることができました。今後の目標としては、日本インカレ決勝進出者を毎年輩出すること、また駅伝において男女とも古豪復帰を掲げています。					
部の同窓会組織としては京都産業大学陸上競技部後援会があり卒業生は1000名を超えています。後援会からは、合宿や遠征費、備品の整備費として援助を受けています。					

大学名	神戸大学					
創部年	1913年					
部員数	男子	69名	女子	21名	文責	(主務) 荒堀 功三
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
学内に専用トラックがないため王子競技場を主練習場に行っています。2020年にOB会の寄附により投擲サークルと跳躍ピットを設置しましたが、練習場所の確保が継続的な課題です。						
関西学連に加盟する大学では最古の創部年1913年となっています。創部当時の神戸高商時代には毎日新聞社が開催した第1回日本オリンピック大会100mで優勝した北村(旧姓:岡本)栄二郎先輩、第1回関西インカレ7種目を制覇して総合優勝の立役者となり「神人」と呼ばれた平岡国雄先輩第2回関西インカレで短距離、中距離の4種目を制し「鉄人」と呼ばれた中川康一先輩の他、110mHで鈴木吉雄先輩、200mHで福井孝一先輩、400mHで今里麟次郎先輩が最古の日本記録を樹立し、戦前の日本記録樹立者は27名に及びます。戦後、新制大学の神戸大学になってからは1部21回、2部51回と1部・2部を繰り返しており、この14年間は1部から遠ざかっていますが、全国インターハイ出場者を中心に戦力が充実してきており、秋に延期となった関西インカレで1部復帰を目指しています。女子は1968年に初入部者があり、そこをスタートに現在では20名前後の選手が揃うまでになりました。他大学との交流も盛んに行っており、創部当初は慶応義塾、関学と対校戦を、現在は旧三商大戦(対一橋大、大市大)、西日本五大学(対大市大、滋賀大、和大、兵庫県)阪神四大学(対関学大、甲南大、阪大)、京阪神新人戦(対京大、阪大)などがあります。2013年には創部100周年を祝い記念式典挙行、記念誌創刊などで次への飛躍を誓いました。						

大学名	大阪市立大学					
創部年	1920年					
部員数	男子	42名	女子	11名	文責	(主務) 菅野 瑞恵
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
本学陸上競技部は昨年度開催された第97回関西インカレにおいてトラック2位、フィールド2位、総合2位の成績を収め、43年ぶりに1部昇格を果たしました。また、女子は6名と人数は少ないですが励ましあいながら練習を行っています。						
練習メニューの立案や部の運営は幹部学年が主体となって行っており、部員の自主性を重んじたチームです。先輩方が築き上げてきたものを大切にしつつ日々変わる状況に合わせて、練習メニューの改変や練習環境の改善をしてきました。						
2020年に創部100周年を迎えました。数多い対校戦の中で、特に旧三商大戦(対一橋大、神大)と大阪三大学戦(対阪大、大府大)は先輩方の関心も高く、OB・OG組織である「陸友会」からは日頃より物心両面で支援をいただいています。						
2021年度の目標は1部残留です。コロナ禍のため開催されている大会に出場できない、全体練習ができない等、様々な困難に見舞われましたが部員各人が工夫して自主練習を行ってきました。女子選手は部の目標達成に向けて追風になれるような活躍をし、全員で1部残留をつかみ取るという気持ちです。さらに2022年4月には大阪府立大学と統合して大阪公立大学(仮称)となります。統合により部員数が増え、よりパワーアップした姿を見せることができると思います。						

大学名	和歌山大学				
創部年	1920年頃				
部員数	男子	39名	女子	14名	文責 (主将) 阪上 蒼太
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は現在2部校に属しており、昨年は関西インカレで男子100mの大学記録を塗り替えることができました。部員数が減少傾向にありますが、1人でも多くの選手が表彰台にあがることのできるよう日々努力をしています。練習は週5回大学のグラウンドや紀三井寺陸上競技場でを行っています。練習メニューはコーチがいないため各パート長が中心となって部員同士で相談して組み立てています。短距離はリレーも関西インカレで入賞しています。跳躍や投擲は部員数が増えており、関西インカレで入賞する選手も出てきています。長距離は2019年に丹後大学駅伝に出場し、今年は2年ぶりの出場を目指して練習に取り組んでいます。</p> <p>戦前は和歌山高等商業学校で関西インカレに出場し1925年から入賞者が出ており、関西インカレが1部制の1928年には800mと円盤投で優勝者が出ています。1部の総合最高順位は4位で、2部の総合優勝(和歌山高等商業学校)は2回となっています。また、日本インカレの400mで三木重雄先輩が1939年に優勝しています。</p> <p>本学はOB会が組織されており、毎年2回現役生と交流会を行っています。OB会からは、毎年部の運営や大会の出場などのため、多大な協力をしていただいています。コロナ禍で、日々の練習や大会出場が制限されていますが、感染症対策を怠ることなく活動していきます。</p>					

大学名	大阪大学				
創部年	1921年				
部員数	男子	141名	女子	34名	文責 (主将) 加藤 七海
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学陸上競技部は、1921年関西学連設立とともに創部され、2007年大阪外国語大学との統合を経て今年創部100周年を迎えました。同窓会組織のOGAC満天会から多くのご支援を頂きながら、歴代記録「満天下」の更新、また各大会で好結果を残すべく部員は練習に励んでいます。</p> <p>普段の練習は全パート週5日吹田キャンパスのグラウンドで行っていますが、練習メニューに応じて大学近くの万博陸上競技場でも行っています。練習はパートごとにパート長を中心にたてたメニューを部員同士でアドバイスしあいながら行っています。通常春と夏に2回、部全体で合宿を行いチームワークを高め、また他大学との対校戦では他校の選手と刺激しあって競技レベルの向上を目指しています。2020年度の関西インカレでは、男子は2部総合優勝を成し遂げて1部昇格を達成し、女子は男子に比べると人数は少ないですが、長距離種目を中心に複数、入賞者を出すことができました。関西学生駅伝は13位でしたが、今年から始まった全国招待大学対校男女混合駅伝は国立大学の部で優勝、総合9位となりました。2021年度の目標は関西インカレ1部残留、日本インカレの個人入賞、関西学生駅伝での入賞となっています。</p> <p>卒業生には関西学連の加盟校で女子選手として国公立大学で唯一国際大会(ユニバーシアード大会)に出場、日本インカレ10000mで2連覇した寺澤佳恵先輩がいます。</p>					

大学名	京都教育大学				
創部年	1922年				
部員数	男子	27名	女子	23名	文責 (主将) 古川 悠太
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は現在男子2部に属しており、昨年の関西インカレでは男子は2部11位、女子が17位という結果でした。1部昇格を目指していたため、去年は悔しい結果となりました。その悔しさをバネに、1部昇格を目指してチーム一丸となって練習に取り組んでいます。練習は週5日、場所は大学の土のグラウンドで基本行っていますが、ポイント練習や合宿などでは付近の競技場を利用することもあります。短距離男子、短距離女子、中長距離男子、中長距離女子、跳躍、投擲パートに分かれて練習しており、練習メニューは各パート長が中心となり、皆で意見を出し合いながらメニューを組み、活動をしています。</p> <p>これまで本学は関西インカレだけでなく全日本インカレでも数多くの入賞者を出しています。戦後、京都学芸大学の校名で始めて全日本インカレの400mHで優勝した花田登先輩、女子走高跳の大鷹紀子先輩、110mHの高安和典先輩、女子円盤投の後藤直美先輩、女子1500mで連覇を果たし渡部博子先輩、近年では2015年の走幅跳で福西穂乃佳先輩が優勝しています。また、2015年110mHで準優勝した小林文人先輩、2018年・2019年の800mで2年連続で8位入賞した河原田萌先輩がいます。</p> <p>同窓会組織として「紫郊倶楽部」があり、毎年大会出場や合宿・遠征を行う時には援助して頂いています。</p>					

大学名	甲南大学				
創部年	1923年				
部員数	男子	52名	女子	32名	文責 (男子主務) 由田 航希 (女子主務) 堂本 真衣
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>甲南大学陸上競技部は1923年、旧制甲南高等学校設立とともに創部されました。新井初佳先輩(日本選手権100m、200m優勝)、福本(旧姓青山)幸先輩(2007年世界選手権出場)、青山華依選手(東京2020五輪出場)など、日本を代表する選手を輩出しています。</p> <p>毎日の練習は六甲アイランドにある全天候型400mトラックを使って行っています。2017年から、男子陸上競技部、女子陸上競技部に分かれて、練習、組織運営をしています。</p> <p>男子部は現在関西インカレ2部校ですが、1部昇格を目指して日々練習に励んでいます。他大学との交流も行っており、学習院大学との定期戦や阪神四大学(対神戸大、阪大、関学大)の対校戦を実施しています。</p> <p>女子部はさまざまなレベルの選手が、目標は違いますが、お互いに切磋琢磨しながら練習に取り組んでいます。近年は学生個人選手権で優勝者、入賞者が多くできるようになり、また4×100mRでは日本インカレで安定して入賞しています。また、地域への社会貢献活動として、陸上教室なども行っています。</p> <p>卒業生の組織として、男子部には甲南大学陸上競技部秀峰会、女子部には2018年にOG会が発足され、物心両面で支援をしてもらっています。</p>					

大学名	龍谷大学				
創部年	1925年				
部員数	男子	63名	女子	7名	文責 (主務) 藤野 孝太郎
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
現在男子は1部校に属しており、昨年度の関西インカレでは1部11位でした。また今年度5月に開催された関西学生チャンピオンシップ大会においては、1500m・走高跳で優勝者を輩出したことでチームに勢いをつけることができました。また、女子は少ない部員数ながらも、各々が自己ベスト記録更新を目指すことでチーム一丸となって戦うことができています。					
卒業生には、日本代表として世界と戦った選手が多くいます。2000年シドニー五輪10000m7位の高岡寿成先輩、2012年ロンドン五輪20km競歩11位の淵瀬真寿美先輩、世界陸上に出場した短距離の安井泰章先輩、和田麻紀先輩を含め10名の先輩方がいます。私たちもこの先輩方を超えられるように、強い気持ちを持って練習しています。					
練習においては、メインの活動場所である龍谷大学瀬田キャンパス内のグラウンドだけでなく、西京極陸上競技場や皇子山陸上競技場を利用し、また長距離は鴨川河川敷を利用し、実戦に近い練習を行っています。その他、モチベーション・士気・チームワークを高めるために、練習前の全体ミーティングやオンラインミーティングを行い、チーム目標や個人目標を達成するために必要なことを把握し、全部員が目標達成に向けて、発信できることを目指しています。					
今年度の龍谷大学の目標は、関西インカレ1部6位(過去最高順位)、関西学生対校駅伝6位です。各パートが切磋琢磨しながら龍谷大学歴代最強チームを作り上げ、関西インカレ、関西学生対校駅伝に全力で挑みますので、これからの龍谷大学陸上競技部の活躍にご期待ください!					

大学名	兵庫県立大学				
創部年	1929年				
部員数	男子	38名	女子	17名	文責 (主務) 寺垣内 啓吾
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は現在2部校に所属しており、昨年度の関西インカレでは円盤投優勝、800m、1500mとで入賞という成績を収めました。本学の練習は姫路工業大学と神戸商科大学が統合されたため、両キャンパスで分かれて土のグラウンドで学業との両立を目指して練習に励んでいます。日によっては近くの競技場で専門練習や質の高い練習をしています。両キャンパスの各種目のパート長を中心にメニューを作成し、日々仲間と共に切磋琢磨しています。コロナ禍でできていませんが、他大学との合同合宿や練習会を行うという、他大学との関わりも強く恵まれた環境にもあります。					
近年の成績ですが2019年には藤原和輝先輩が100mで県大生として4年ぶりに日本インカレに出場しました。また、村本一樹先輩は関西インカレ2部5000m、10000mで2度優勝し、10000mでは当時の兵庫学生記録を樹立し、卒業後も競技を続け2月のびわ湖毎日マラソンで兵庫記録を更新しています。古くは神戸商科大学当時の1952年、第21回日本インカレ20kmで浜崎芳宏先輩が優勝するという快挙を成し遂げています。関西インカレは1950年と1952年に2部総合優勝して翌年1部で出場しました。関西学生駅伝も浜崎先輩が在学していた当時を中心に1949年から1952年の4年間は3位から5位という好成績を残しています。					
1929年に設立された兵庫県立神戸高等商業学校から神戸商科大学を経て兵庫県立大学に校名が変更になっていますが、部のOB会「KCクラブ」より、丹後駅伝の出場などにおいて活動資金の援助を受けており、日々感謝の気持ちを胸に活動を行っています。					

大学名	近畿大学				
創部年	1932年				
部員数	男子	65名	女子	18名	文責 (主務) 松岡 玄輝
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学陸上競技部は、2022年に90周年を迎えます。近年は短距離の活躍により男子1部で総合5位、6位の中位校として頑張っています。秋に延期された関西インカレでも、短距離や中距離の活躍で例年以上の結果を出すことを目標にしています。近年女子部員が増えてきており、まずは個人で表彰台をあげることを目指しています。現在、関西学生記録を保持する男子の4×100mRでの日本インカレ優勝もチーム目標の一つです。</p> <p>練習は各パート長がコーチの助言をえながらメニューを計画し、コーチの指導を受けながら目標達成に向けて励んでいます。大学に陸上グラウンドがないため、東大阪や尼崎の公営競技場を使用しています。練習環境は良くはありませんが、逆にそれをバネにして結果を出しています。</p> <p>本学は戦前の専門学校を前身にしていますが、当時から長距離で活躍した選手が多く、関西学生駅伝には第1回大会から参加しています。関西インカレでの総合優勝はありませんが過去には駅伝で2回優勝しています。全日本大学駅伝にも8回出場しており、駅伝で結果を出すことも目標の一つです。</p> <p>2019年のドーハ世界陸上、ナポリユニバーシアード大会には創部初の国際大会出場選手となる河内光起先輩が4×400mRのメンバーに選出され活躍しました。</p> <p>陸上競技部のOB会から、大きな大会や駅伝に出場したり、合宿を行う時には活動資金として援助を受けています。現役の卒部式とOB総会を同期に開催したり、試合で頑張っている選手を卒業生に見てもらおうようにして、OB会との良好な関係を今後も継続していくことにしています。</p>					

大学名	大阪経済大学				
創部年	1932年				
部員数	男子	40名	女子	8名	文責 (主務) 河北 亜美
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>1932年に浪華高等商業学校として開設の同年、硬式野球部とともに「陸上競技部」が創部され、その後、昭和高等商業学校と校名を変更、戦後学生の改革により現在の大阪経済大学となりました。</p> <p>創部から89年の歴史を有する伝統ある部で、関西インカレは第14回大会から浪華高等商業学校で参加し、昭和高等商業学校の時に2部、3部で総合優勝を各1回しています。1971年の第48回大会で1部に昇格、第56回大会～第72回大会まで1部で出場し、最高順位5位を5回記録しています。大阪経済大学としての2部総合優勝は、3回(第55回、73回、79回大会)。個人優勝は1部で10名、2部で68名が成し遂げています。</p> <p>駅伝では、全日本大学駅伝に1979年の第10回大会で初出場を果たし、第12回～第24回大会の13年連続出場を含め、今年の出場を含めると23回となり、関西勢としては京都産業大学、立命館大学、大阪体育大学に次ぐ出場回数となっています。最高順位は第19回大会の10位です。</p> <p>出雲大学駅伝は今年を含めて4回出場、関西学生駅伝は昭和高等商業学校の時の第4回大会で5位に入賞していますが、1978年の第40回大会で初めて3位に入賞し、全日本大学駅伝の出場権を獲得しました。1988年～1990年の第50回大会～第52回大会では3年連続2位となっており悲願の初優勝を目指して日々練習に励んでいます。</p> <p>大学卒業後も実業団で活躍している先輩も多くおり、米田大輝、藤山悠斗、高橋流星、富田遼太郎各先輩は全日本実業団、地区実業団のトラック種目や駅伝で現役として活躍されています。</p>					

大学名	大阪教育大学					
創部年	1948年					
部員数	男子	55名	女子	30名	文責	(主務) 中谷 エイ氣
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
大阪教育大学は大阪府池田師範学校を創基とし、大阪府の3師範学校が統合され、大阪学芸大学、大阪教育大学と変遷してきました。体育会陸上競技部は、師範学校時には存在は確認されていますが、その始まりは不明なほどの歴史を有します。現在の体育会陸上競技部は創部73年目になります。						
同窓会組織として「大教大AC」があり今も大阪をはじめ全国で教員として陸上競技に関わる諸先輩で構成されています。これまで大阪、関西の陸上競技指導者、教員を数多く輩出してきました。近年は実業団やプロ選手契約で競技を続ける先輩もいます。						
本学陸上競技部は学生主体の運営により学生陸上の理念の実現やパフォーマンス向上、陸上競技者としての資質の向上を目的として活動を行っています。						
日々のトレーニングはパートごとに計画し、本学の陸上競技場で練習を行っています。マネジメントブロックを中心として、部員全員が部の運営、子供陸上チームの運営にも取り組んでいます。						
近年、男子は関西インカレ1部定着が常態化しており、男子部員はさらに上位への飛躍を目指しています。女子は関西インカレ総合争いに加わることを目標としています。秋に延期された関西インカレでは、この目標を達成できるよう部員一同、練習に励んでいます。						

大学名	大阪府立大学					
創部年	1951年					
部員数	男子	30名	女子	13名	文責	(主務) 秋田 健志
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
本学には校内に400mのトラックを含む広大なグラウンドがあり、部員全員で週5回集まって合同練習を行っています。学業との両立を求められる大学で大学院生になっても、部活動を続ける部員も多く、長い期間、陸上に関わることができる環境が整っています。練習メニューは、短距離、跳躍・投擲、中・長距離の各パート長が主にメニューを考え、部員同士で相談し決めています。コロナ禍のため実施できていませんが、これまでは多くの他大学との合同合宿や練習会も行っています。						
関西インカレは現在2部校ですが、1981年には長距離の上武豊彦先輩が中・長距離5種目、投擲の船引規正先輩が投擲3種目で優勝し2部総合優勝して1部に初めて昇格しています。なお、昨年の関西インカレは男子6名、女子2名が標準記録を突破して出場しました。長距離については丹後駅伝に令和になってから出場できていませんが、有望な新生も加入しましたので、今年は記録審査で出場を勝ち取るべく長距離部員一同、練習に励んでいます。						
日本インカレに出場して活躍した先輩もおられます。2013年の第82回大会の走高跳に出場した田中英和先輩は2m10を跳んで5位に入賞するという成果をあげておられます。また、関西インカレでも2部ですが2012年、2013年と連覇されています。2019年の第88回大会の800mに出場した駒井智己先輩は、この大会で大阪府立大学記録を更新しました。						
関西インカレや丹後駅伝等の大きな大会に出場するために、OB・OGの方々から活動資金の援助を受けています。公立大学のため大学からの支援は限られていますので、本当に感謝しています。						

大学名	天理大学				
創部年	1953年				
部員数	男子	53名	女子	17名	文責 (主将) 松本 沙織
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
関西学連設立100周年おめでとうございます。					
本学は日本、西日本、関西インカレで優秀な成績を収めてきました。今年の関西学生インカレでは、男子は1部残留、女子は8位以内を目標に掲げ、短距離・長距離・跳躍・投擲・混成パートごとに、パート長が先生や部員の意見を取り入れ2週間ごとにメニューを組んで、パートごとに練習をしています。練習は週6日で内1日はアクティブレストの日を設け、ペアマッサージなど身体のメンテナンスを行います。また、サッカーやキャッチボールなど陸上から離れたスポーツをすることで、気分をリフレッシュし、新たな気持ちで練習にも取り組んでいます。					
昨年の日本インカレは2名の選手が出場し、円盤投では竹村龍星選手が7位入賞をしました。過去には跳躍や投擲で活躍した先輩が多くいます。女子円盤投で当時の日本学生記録を樹立し、今も最古の関西学生記録保持者の北森郁子先輩、女子走高跳の関西学生記録保持者の加藤純子先輩、走幅跳でソウル五輪にOBで出場した柴田博之先輩、関西、西日本、日本インカレで4年間で11回勝利した塚本誠志先輩、砲丸投で関西インカレ4連覇しアジア大会に出場した三浦重則先輩、棒高跳、走幅跳で関西インカレ4連覇した竹井義弘、片渕貴美先輩ほか、昭和50年代から平成初期にかけて多くの先輩が日本インカレや関西インカレで大活躍をされています。					
本学は「競技者である前に人間として正しく行動すること」をスローガンとして掲げ、陸上競技だけでなく、人間性も育てていくチーム作りを目指しながら、伝統を守って活動をしています。					

大学名	武庫川女子大学				
創部年	1955年				
部員数	男子	0名	女子	56名	文責 (主務) 辰川 凜々楓
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は昨年の日本インカレでフィールド4位、関西インカレ総合3位でした。今年5月の関西チャンピオンシップ大会では10000mW、三段跳、七種競技で優勝しました。練習は大学の総合スタジアムの400mトラック(土、全天候併用)で行っています。室内のトレーニングルームも整備されています。全体練習は週5日、練習メニューは短距離・跳躍パートは選手の意見を取り入れてコーチが、長距離・投擲パートは部員でメニューを作成しています。練習は先輩・後輩、競技成績に関係なくアドバイスをし合い高めながら行っています。					
主な戦績ですが、関西インカレは総合優勝6回、西日本インカレ総合優勝1回、個人では逢坂十美先輩が関西インカレ100m、200m4連覇、日本インカレ100m、200m連覇、内田智子先輩が関西インカレ5000mW4連覇、日本インカレ5000mW優勝、吉田浩子先輩が1500m、竜田夏苗先輩が棒高跳、藤原未来先輩が100mH、400mH、秦澄美鈴先輩が走幅跳で日本インカレを制しています。					
今年の日本選手権には、本学からは三段跳、400mH、20km競歩に選手が出場しています。また、OGも走幅跳、棒高跳、100mH、七種競技、やり投に出場し、走幅跳で秦澄美鈴先輩が優勝しています。					
今後も陸上を楽しむことを忘れず、先輩たちが創り上げてきた伝統を引継ぎ、より良いチームになれるように頑張っていきます。					

大学名	大阪商業大学					
創部年	1955年頃					
部員数	男子	21名	女子	2名	文責	(主務) 茨 直輝
部の紹介(部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>本学陸上競技部は現在2部校に所属しています。練習は週4日、学内の第1グラウンド、トレーニングルーム、学外の花園陸上競技場で行っています。練習メニューはパート長が作成しています。2021年度の目標は「高み」へとなっています。</p> <p>過去の戦績ですが、1964年から1985年、1989年には関西インカレ1部校に所属し、1970年の第47回大会で総合初優勝を成し遂げました。個人では本吉栄樹先輩が第44回大会から第47回大会の砲丸投で4連覇、また牧尚武先輩は5000m、10000m、3000mSCで6回優勝、藤井昇先輩は1500m、5000m、10000mで3回優勝しています。この他、円盤投で森広哲雄先輩、山本吉松先輩が連覇、ハンマー投で具仁太先輩が連覇、十種競技でも井出澄夫先輩が連覇を達成しました。日本インカレでは本吉先輩が1969年、1970年砲丸投で連覇、1970年には河添文夫先輩がハンマー投でも優勝されています。</p> <p>駅伝については、関西学生駅伝は1966年に初優勝、1970年から1972年には3連覇を達成しています。全日本大学駅伝は、1970年の第1回大会から出場し、その時は最高順位となる6位に入賞しました。その後も1979年まで連続出場を果たし、計11回の出場となっています。</p> <p>大阪商業大学陸上部OB会から、試合や合宿に行く際や練習用具購入する際には、支援をいただいています。</p>						

大学名	関西外国語大学					
創部年	1966年					
部員数	男子	17名	女子	33名	文責	(主務) 清水 彩妃
部の紹介(部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>本学陸上競技部は、昨年の関西インカレでは男子2部22位、女子15位と悔しい結果となりましたが、この結果をプラスに考え、駅伝部は「両駅伝で8位入賞」、陸上競技部は「関西インカレ全員出場」を目標にチーム一丸となって日々努力しています。普段の練習は、駅伝部は週6回、陸上競技部は週5回で練習しています。各パート長を中心に周りの意見を取り入れ、練習メニューを作成し、お互いの意識を高め合いながら活動しています。活動場所は、基本本学の中宮キャンパス内にある陸上競技場で行っていますが、トラックが300mしかないため、練習メニューに応じて近くにある枚方競技場で練習することもあります。駅伝部と陸上競技部で活動時間や内容が異なっていますが日頃の練習からお互いを応援し合い活気のある雰囲気練習ができています。</p> <p>本学は日本インカレでも活躍している選手が数多くいます。1993年400mHで優勝、1995-1995年福岡ユニバーシアード大会に出場し、日本記録を樹立した佐々木美佳先輩、2007年三段跳で優勝した清瀬静香先輩を始め、男子では大石照男、山下将史、岡本圭先輩が、女子では谷真理子、桑村みゆき先輩が入賞しています。また、現役の西出優月選手は3000m障害で2年連続3位となっています。駅伝は全日本大学女子、富士山女子駅伝に各6回出場しており、昨年の富士山女子駅伝は過去最高の10位となりました。卒業生と交流を深めるために「関西外大OBOG大運動会」を開催しています。幅広い世代の方々と絆を深めるとともに、試合での活動報告等も行っています。また、練習設備充実のための援助も卒業生からいただいています。</p>						

大学名	大阪学院大学				
創部年	1967年				
部員数	男子	28名	女子	18名	文責 (主務) 堀内 裕太
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は女子長距離、男子長距離、短距離の3つのブロックに分かれて活動しています。昨年の全日本大学女子駅伝では6位入賞し、9年連続シード権を獲得することができました。一昨年に改装された300mのトラックとウッドチップのクロスカントリーコースを有する大学のグラウンドを利用し、恵まれた環境の中で日々練習に取り組んでいます。</p> <p>活動内容は女子長距離は平日2部練習、土・日は1部練習の週6日練習、男子長距離は主将を中心に学生で練習内容を考えるなどブロックごとで様々となっています。</p> <p>陸上女子初の金メダリスト高橋尚子さんの母校として知られている本学ですが、過去4年以内の成績では2017年の日本学生女子ハーフマラソンで水口瞳先輩が優勝、2018年の熊日30kmロードレースで岡本奈々代先輩が優勝しており、毎年マラソンに対応できる選手が出てきています。</p> <p>このようにマラソンに対応できる力は、基礎練習を徹底し、身体の土台づくりを大事にしている本学ならではの強みであり、これを活かして女子長距離は2014年の全日本大学女子駅伝でのチーム歴代最高順位の3位を上回る優勝を目指しています。</p> <p>昨年からコロナウイルスによる影響のため、活動範囲の制限や試合数の減少がある中でも選手は目標に向かって練習に励む事ができるのは、大学そしてOB・OGの皆さまからの多大なるご支援と応援のおかげと感謝しています。この感謝の気持ちを結果で恩返しするべく、チーム一丸となって活動していきます。</p>					

大学名	摂南大学				
創部年	1975年				
部員数	男子	57名	女子	3名	文責 (主将) 岸本 一真
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>1994年に初めて関西インカレ1部に昇格し、以降2部に降格したり、1部に昇格したりしていません。近年は2部から1部に昇格のチャンスはあったもののなかなか昇格できずにいます。ただ、関西の中では存在感を示すような成績を残してきています。2014年には棒高跳で山方諒平先輩が日本インカレを制し、2021年には男子800mで戸澤悠介選手が日本学生個人選手権で優勝するなどの好成績を出しています。</p> <p>練習環境は2005年に400mの全天候型のトラックに改修され、さらに2020年に移転改修が行われました。本学の利点はキャンパスとグラウンドが隣接しており、授業後に効率よく練習ができる点です。また、新グラウンドには部室棟が併設され、今まで不完全だった跳躍ピットも整備され、より質の高いトレーニングができるようになりました。</p> <p>摂南大学の特徴は、主にフィールド種目で関西インカレの対校得点をあげていることです。表彰台を独占したこともありましたが、しかしながら、本学に入部してくる選手はインターハイ上位入賞者、インターハイそのものに出場した者もほとんどいません。入学後の努力により、全国で勝負できるようになった選手がほとんどです。より強くなりたいというモチベーションと努力の継続により本競技部は発展してきました。陸上競技が好きであることが本学で強くなれる秘訣です。練習は基本的にやらされることはありません。自分で考え試行錯誤し行います。4年間という短い学生生活が充実できるよう、苦しい練習を通してできた仲間を大切にしながら、さらに上を目指して頑張っていきます。</p>					

大学名	佛 教 大 学					
創部年	1 9 7 5 年 頃					
部員数	男子	2 5 名	女子	3 4 名	文責	(主務) 松村 蒼斗
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
短距離、跳躍、投擲パートは主に岩倉グラウンドや西京極第二競技場、長距離パートは男女とも主に岩倉グラウンドや鴨川河川敷で練習をしています。短距離、跳躍、投擲は指導者がいないので、練習メニューについてはパート長を中心に部員が考え、長距離は指導者が立てた練習メニューにより活動を行っています。						
男子は関西インカレ2部で出場していますが、最高順位は5位で1部に昇格したことはありません。2部で優勝した先輩は数名おられます。川勝経義先輩、小松崎信征先輩がともに円盤投で3連覇、越田友喜先輩は5000m、10000mで優勝しています。						
女子は駅伝で大きな成果を残しています。全日本大学女子駅伝は19回出場し、第27回、第28回大会で連覇、延19名が区間賞を獲得、また全日本大学女子選抜駅伝は15回出場し、第7回大会で優勝しています。個人でも国際大会に出場した先輩が多く出ています。木崎良子先輩は世界陸上のマラソンで4位、2度出場したユニバーシアードで2つの銀メダルを獲得、日本インカレ10000mで優勝、西原加純先輩は世界陸上、ユニバーシアードでは金、銀メダルを、日本インカレは5000mで2回優勝、吉本ひかり先輩は世界陸上に出場し、10000mで日本学生記録を樹立しました。この記録は今も関西学生記録として残っています。その他、飯島希望先輩、石橋麻衣先輩、竹地志帆先輩もユニバーシアードに出場し、石橋先輩はハーフマラソンで3位、竹地先輩はハーフマラソン団体が優勝しています。また石橋先輩は日本インカレ1500mでも優勝しています。						

大学名	明 治 国 際 医 療 大 学					
創部年	1 9 8 8 年					
部員数	男子	5 1 名	女子	3 3 名	文責	(主務) 内田 汐里
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
日本初の4年生鍼灸大学として誕生した本学は、現在3学部(鍼灸・保健医療・看護)4学科(鍼灸・柔道整復・救急救命・看護)を有する保健医療分野の総合大学として発展してきました。本学は東西医学の融合を掲げ、21世紀に活躍できる医療人の育成を目指すユニークな医療系大学です。						
2015年には「スポーツ振興プロジェクト」として、本学にしかできない医療的なサポート支援の提供、及び医療、技術、知識の教授によって最先端の「スポーツ医療人」の育成をスタートさせました。医療系大学にしか出来ない、トップアスリートの育成とスポーツメディカリストの育成です。						
創部33年を迎える本学の陸上競技部は、医療系の大学として修学とスポーツ(いわゆる文武両道)の実践を推進するにあたり、各学科とも各国家試験の合格を目指し、そのための実習も数多くある中で「スポーツを継続する強い意志」に加え「医療人になるという高い志とたゆまぬ学修」が必須となり、練習時間の有効な確保が最優先課題となっています。						
現在は2部校ですが、練習環境は整っており(400m6レーンの全天候トラック、付設投てき場)また、各パートごとにコーチ陣も揃っているので1部校を目指して頑張っています。特に、投てき種目には優秀な選手の入学もあり、日本インカレのハンマー投で2名入賞者を輩出しています。						
医歯薬獣系の全国大会をこれまで2回、関西学連の学連員の皆さんの協力により、本学が当番校となり開催しています。これからもお世話になりますが、よろしくお願ひします。						
スポーツと医療、二つの未来を手にするために今後も部員一同努力していきます。						

大学名	大阪国際大学					
創部年	1992年					
部員数	男子	110名	女子	30名	文責	(主務) 新村 愛里
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
1997年大阪国際女子大学に赴任された小倉先生と女子部員8名から活動が始まります。2002年に大阪国際大学となり男子部員も加わり、2006年には100名を超える大所帯となりました。						
部の方針は「競技性」「人間性」の成長で、活躍できる「人間力」「自己実現」の獲得としています。						
主な戦績は、女子では加茂有希子先輩が日本選手権200m8位、日本インカレ100m4位、西日本インカレ100m、200m、4×100mRの3種目で優勝。関西インカレも100m、200mで優勝しています。走高跳では児玉里穂先輩が日本選手権4位、日本インカレ2年連続入賞、西日本インカレ優勝、戸谷真理子先輩が日本インカレ6位、西日本インカレ優勝、濱津麻愛先輩が日本インカレで3位となっています。また、男子は2018年に関西インカレ2部総合2位となり1部昇格を果たすとともに100mにおける大学4年間の伸び率は全国ランキング2年連続1位(2018、2019)、4×100mRは日本選手権に3年連続出場(2018-2020)しました。現部員数は過去最多の140名が所属し、短距離と走高跳を中心に全国大会で活躍しています。さらに、2015年からシンガポール国立大学陸上競技部とスポーツ交流も続けています。						
練習環境は、土のグラウンドから2015年にコーナー4レーン(100m)、直線8レーン(70m)の「J」の字のオールウェザーの延長に砂場と棒高跳のピット、フィールドには人工芝、砲丸投のサークルが設置された特徴的なグラウンドとなっています。練習時間は短く2時間、週4日の合同練習です。効率的なトレーニング計画、プログラム自己分析のもと、自己ベスト更新とスポーツフォーム達成を目指して取り組んでいます。						

大学名	びわこ成蹊スポーツ大学					
創部年	2003年					
部員数	男子	177名	女子	32名	文責	(主将) 北 大輝
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
関西学生陸上競技連盟設立100年、誠にありがとうございます。びわこ成蹊スポーツ大学陸上競技部も2022年に創部20年を迎えます。「日進月歩」をスローガンに、自然に恵まれた素晴らしい練習環境(3種公認競技場、全天候トラック6レーン・ホーム8レーン、ナイター完備)のもと、200名を超える部員がトレーニングに精進しています。「走・歩・跳・投・混成」の全てのパートで専任コーチが指導に当たっており、また授業で学んだ理論(トレーニング論、コーチング論、バイオメカニクス、スポーツ生理学、スポーツ心理学等)を即実践できる・具現化できることが本学陸上競技部の最大の強みです。						
関西インカレでは創部8年目の2011年に1部初昇格し、2016年に一度は2部に降格しましたが、2018年に再昇格以降は年々総合順位を上げ、2020年には1部総合3位・フィールドの部優勝、混成の部2位と、過去最高の成績をあげています。日本インカレでは女子棒高跳・男女競歩・男子三段跳で入賞、個人選手権では2008年に女子10000m競歩、2019年に女子三段跳で優勝などです。高校生時は地区大会レベルであった選手が、本学入学後に飛躍的に成長しています。						
また、本年度で70回をこえる陸上部主催の「びわスポ記録会(公認大会)」をはじめ、地域の子供たちに向けた陸上教室の開催や運営協力を行うことで、陸上競技の更なる発展にも貢献しています。						
今夏の東京2020五輪50km競歩の代表になった丸尾知司先輩(本学8期生)のようなアスリートを目指し、びわスポ陸上部は今後も「日進月歩」で邁進し続けたいと思います。						

大学名	園田学園女子大学				
創部年	2009年				
部員数	男子	0名	女子	105名	文責 (主将) 山本紗也夏
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は昨年度の関西インカレでは、総合2位・トラック2位・フィールド3位でした。今年度の関西チャンピオンシップ大会は11種目で入賞し、そのうち優勝1名、2位4名、3位5名、4×100mR優勝、4×400mR2位という結果でした。対校戦ではありませんでしたが、本学の総合力を発揮することができた大会となりました。</p> <p>本学のグラウンドは、全天候トラック走路6レーン、跳躍、投擲の練習ピットがあります。また、尼崎陸上競技場を週2回利用し、より専門的な練習を限られた時間でテキパキと行っています。</p> <p>練習メニューは、監督の指導の下で全パート共通の練習や専門練習に励んでいます。また、約100名の部員がいますが、全パートが同じ練習メニューを行うことで、パートでの垣根がなく全員と接することができるのが本学の強みでもあり、仲間と切磋琢磨し、競技ができることの感謝の気持ちや楽しさを忘れず、全員自己ベスト更新と「元気・やる気・勇気」をスローガンに活動しています。</p> <p>駅伝部は強化3年目となり、新戦力が加わることでより活気づき、主要な大学駅伝で実績をあげることを目標とし、新しい歴史をつくる挑戦をしています。</p> <p>創部は12年目となりますが、これまで2018年に宇都宮絵莉先輩が日本選手権で400mH優勝・同年アジア大会7位入賞、2019年に稲岡真由先輩が世界リレー男女混合4×400mR日本代表、那須真由先輩が棒高跳で2019年・2020年日本選手権を2連覇しています。多くの卒業生の先輩方とともに日々練習しており、コーチとしても私たちに支えてもらっています。</p>					

大学名	東大阪大学				
創部年	2010年				
部員数	男子	3名	女子	20名	文責 (主務) 神菌芽衣子
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>昨年度は、日本インカレで総合5位、トラック5位、混成4位でした。男子は人数は少ないですが、大阪インカレでは2名が入賞しました。今年度より駅伝部が発足し、富士山駅伝出場を目標に活動をしています。附属校である東大阪大学敬愛高校陸上部とともに練習をしているため、大学生だけでは人数が少ないですが、インターハイ常連校の高校生と一緒に充実した練習ができています。練習環境は土のグラウンドで200mトラックが2つ、250mトラックが1つ、直線で100mが8レーンあり、砲丸・円盤サークルも1つずつあります。必要に応じて花園陸上競技場でも練習しています。</p> <p>試合数は年間を通して40～50程度あり、どの大学よりも試合に出場することができます。発足1年目の2010年度の関西インカレは女子4名で総合4位、2011年度から関西インカレ、西日本インカレを2連覇を連覇しました。また、2011年度から2020年度まで日本インカレで総合8位以内に2011年度の最高順位3位を含め、5度入賞を果たしています。個人でもやり投で佐藤友佳先輩、400mHで三木汐莉先輩と山田実紗先輩、800mで川田朱夏選手が優勝、また関西学生記録を保持する4×400mRで2011年、2012年の日本インカレで2連覇しています。昨年度の日本選手権では、800mで川田選手、走高跳で津田シェリア先輩、やり投で佐藤先輩が優勝しました。佐藤先輩は2019年のドーハ世界大会にも出場しました。</p> <p>東大阪大学の前身である布施女子短期大学で1966年、1967年の関西インカレ400mで石田泰子先輩が連覇、東大阪短期大学で1984年の同大会のやり投で小林宏美先輩が優勝しています。</p>					

大学名	大阪成蹊大学						
創部年	2012年						
部員数	男子	15名	女子	8名	文責	(主務)	堀 静流
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)							
<p>瀧谷賢司監督、恵濃恵美可コーチを迎えて女子が創部以来10年が経ち、2年遅れでスタートした男子も8年目になりました。練習するグラウンドは大阪成蹊高校陸上競技部とソフトボール部と共用で、決して恵まれていることはありませんが、監督・コーチの細やかな指導と学生の陸上にかかる情熱で、大学女子陸上界では強豪校と言われるように成長しました。2012年の創部の年に関西インカレで種目優勝を勝ち得たスタートから、2016年には念願の総合優勝、その後も総合2位を2回達成し、同じ2016年には日本インカレでも総合優勝を飾ることができました。この時に同時受賞であった多種目優勝は、2017年、2019年に達成することができ、全国大会で優勝できる選手を多く輩出した10年でした。</p> <p>東京2020五輪に齋藤愛美が4×100mRに、2015年の北京世界陸上に青山聖佳が4×400mRに出場し日本記録を樹立。ユニバーシアード大会には2015年の光州大会に山内愛がやり投に、2017年の台北大会に中村水月が4×100mRで日本学生記録で銅メダルを獲得、2019年のナポリ大会に柳谷朋美が4×100mRで5位に入賞しました。アジア陸上選手権には、2015年武漢大会に山内が、2017年ブバネシュアール大会に中村がリレー、青山聖佳が400mとリレーに出場し入賞しました。その他の国際大会を含め総勢11名が日本代表として参加しています。</p> <p>2021年4月に日本を代表するランナーである金丸祐三夫妻をコーチとして迎えることができ、今後ますます大阪成蹊大が発展していく体制が出来上がりました。</p>							

大学名	大谷大学						
創部年	1923年						
部員数	男子	11名	女子	4名	文責	(主務)	布施 玲奈
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)							
<p>大学にグラウンドがないため、近くの競技場や大学内のトレーニングセンターを利用して週2回活動をしています。男女、学年に関係なく和気あいあいとしており、練習メニューは主将や上級生を中心に練習に参加している部員で相談して決めています。各人それぞれ目標が違うため異なるメニューをする場合もあります。部員が少ないため、関西インカレでは総合順位をねらうことはできませんが去年は関西インカレに2名が出場しました。なお、本学は戦前から関西インカレに出場しており、2部ですが1947年には総合2位になったこともあり、2名が投擲種目で優勝しています。</p>							

大学名	京都薬科大学						
創部年	1925年						
部員数	男子	8名	女子	28名	文責	(主務)	増田 真帆
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)							
<p>本学陸上競技部は、今年で創部96年の歴史があり、1928年の第8回関西インカレから京都薬学専門学校として出場しています。1935年、京都植物園で行われた第1回京都インカレにも参加しており、京都支部の中では伝統を有する大学の一つです。</p> <p>我々は、毎年行われる医歯薬系の大会で上位入賞することを目標に、週に3回、パート長を中心に本学のグラウンドや近くの競技場などで練習に取り組んでいます。</p> <p>部のOB・OGの方々からは毎年ユニフォームの費用など活動するための支援をして頂いています。</p>							

大学名	京都府立医科大学				
創部年	1925年頃				
部員数	男子	20名	女子	27名	文責 (主務) 紺野 佑介
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は学業と課外活動の両立を目指し、年に数回行われる医療系学生の大会にむけて各パート長が中心となり練習メニューを決めて、マネージャーにサポートしてもらい、西京極競技場や鴨川の河川敷で週2回合同練習を行っています。部員の数名は関西インカレに2部校として参加しており、近年は部員数の増加と競技力の向上の傾向がみられます。府内の大学や医療系大学と一緒に練習を行い、交流を深めています。他の大学とも合同練習ができればと思っています。部の歴史は古く、1931年の第11回関西インカレで2名が入賞しており、その後、2部で優勝している先輩もおられます。</p>					

大学名	大阪医科薬科大学				
創部年	1927年				
部員数	男子	9名	女子	13名	文責 (主務) 辻 翔平
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学陸上部は本学の前身の大阪高等医学専門学校設立時に創部されました。様々なモチベーションの選手が在籍し、各々の目標に向かって、主に本学グラウンドで週3回の頻度で、各パート長が主体となり作成したメニューで練習を行っています。他大学との交流は合同練習会や医療系大学の大会となっています。</p> <p>過去の実績ですが、1977年の関西インカレ2部総合5位になっています。個人でも前身の学校を含め、砲丸投で2連覇した小橋二郎先輩を含め延7名が優勝しています。</p>					

大学名	京都工芸繊維大学				
創部年	1935年頃				
部員数	男子	11名	女子	3名	文責 (主務) 羅 郁文
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>練習は週3～4日、大学のグラウンド、西京極陸上競技場にて行っています。練習メニューはパート長が作成しています。2021年度の目標は、関西インカレ、京都インカレ上位入賞、西日本インカレ出場です。本学の前身の京都高等蚕業学校、京都高等工芸学校は関西インカレ第15回、第16回大会から出場している伝統校です。1947年の日本インカレ第16回大会の三段跳で前身の京都工業専門学校の山本忠先輩が優勝しています。</p>					

大学名	奈良教育大学				
創部年	1948年以前				
部員数	男子	7名	女子	5名	文責 (主務) 森脇 拓未
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は関西インカレ2部校です。練習は週3～4日、部員全員でたてたメニューで大学のグラウンド公営競技場で練習を行っています。今年度の目標は関西インカレ個人入賞としています。</p> <p>過去の実績ですが、前身の奈良学芸大の1952年、1956年関西インカレで本学最高順位の総合4位になっています。男子個人ではリレーで3回、個人で延28名が優勝しています。その内、野村昭夫先輩が長距離で5回、米田基治先輩、丹羽敦己先輩が4回優勝しています。また、女子では宇田知佐子先輩が1992年日本インカレ七種競技で3位に入賞しています。</p>					

大学名	大阪工業大学				
創部年	1950年頃				
部員数	男子	27名	女子	2名	文責 (主務) 杉町 匠海
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
現在2部校で活動し、関西インカレ入賞、西日本インカレ出場、1部昇格を目標としています。活動場所は大学近くのグラウンドや公営競技場を利用しています。主将やパート長を中心に練習メニューを組んでいます。他大学との交流は東京工業大学、名古屋工業大学と毎年三工大戦を開催しています。過去の戦績ですが、1964、1966年の関西インカレで2度総合5位に入賞しています。個人では、藤川真佐夫先輩が関西インカレのハンマー投で3度優勝、近年では2018年の西日本インカレで梅田学先輩が800mで2位となっています。					

大学名	滋賀大学				
創部年	1953年				
部員数	男子	41名	女子	14名	文責 (主務) 川勝 裕夏
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は関西インカレ2部に属しています。週5日大学のグラウンドで各パート長が立てたメニューで練習を行っています。今年度の目標は「陸力協心」です。過去の実績は、関西インカレ2部総合4位がチーム最高順位です。個人については、長距離種目で2名、跳躍で6名、投擲種目で2名、十種競技で1名、4×100mRで優勝しています。長距離種目で勝った小西雄大先輩は西日本インカレの3000mSCで2連覇しています。女子では木田優子先輩が棒高跳で関西インカレ3回優勝しています。OB会組織として「陵走会」があり、練習用具の購入等に支援してもらっています。					

大学名	京都外国語大学				
創部年	1960年頃				
部員数	男子	9名	女子	13名	文責 (主務) 山木 津菜美
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は、グラウンドで練習ができる環境ではないため、主に西京極競技場で練習を行っていますが、時々、金閣寺や二条城などへランニングをする観光地巡りを行うなど、楽しく練習をしています。練習内容としては、パートごとにメニューを決めて行っています。この数年の試合は、主に記録会への出場となっており、各自自己ベストを更新することができるように、日々努力しています。1972年の関西インカレ2部で総合5位となっています。この時は小倉俊一先輩が1500m、5000m、10000m、3000mSCの4種目、滝沢芳明先輩が20kmで優勝しています。					

大学名	桃山学院大学				
創部年	1965年頃				
部員数	男子	15名	女子	2名	文責 (主務) 新家 和馬
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学陸上競技部は関西インカレ2部校に属しています。練習日は週5日、パート長がたてたメニューにより、大学のグラウンドで練習を行っています。今年度の目標は、関西インカレに部員が多数出場することです。過去の実績ですが、関西インカレ2部総合で1986年、1995年、1996年に部の最高順位5位となっています。また、個人では延12名の優勝者が出ています。1984年、1985年には円盤投で山田智洪先輩が2連覇を成し遂げています。					

大学名	神戸学院大学				
創部年	1966年				
部員数	男子	48名	女子	24名	文責 (主務) 安達 花音
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
創部55年の本学は、2001年度より女子中長距離部門は女子駅伝競走部として強化クラブの指定を受けています。全日本大学女子駅伝には12回、全日本大学女子選抜駅伝には4回出場し、今年3月の第1回全国大学男女混合駅伝に出場し14位となりました。トラック種目では1993年日本選手権で河村道彦先輩が200m優勝、1995年の日本インカレで武井壮先輩が十種競技2位、国際デカスロン大会で関西学生記録を樹立しています。1997年の日本学生女子マラソンで畑瀬直子先輩が優勝、近年では日本学生個人選手権女子3000mSCで連続入賞を果たしています。					

大学名	関西医科大学				
創部年	1968年				
部員数	男子	10名	女子	16名	文責 (主務) 佐々木 ひかり
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は文武両道を目指し、週3日パート長がたてた練習メニューで、大学のグラウンドや公営競技場で練習を行っています。関西インカレは男子2部校ですが、医療系大学の大会に出場し、活躍することを目的としています。					
関西医科大学陸上競技部OB会という同窓会組織があり、試合・合宿の補助や練習用具の購入に対して支援をしてもらっています。					

大学名	京都府立大学				
創部年	1970年				
部員数	男子	14名	女子	3名	文責 (元主務) 平田 樹子
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は関西インカレ2部校に属し、今年度の目標は個人での関西インカレ入賞を目指しています。練習は週3日、公営競技場、公園や他大学のグラウンドで、各パート長が作成したメニューで練習を行っています。過去の戦績ですが、2部で部としての総合入賞はないですが、個人で連続入賞をした先輩や同一大会で複数種目入賞した先輩もいます。近年では、2018年の関西インカレで田中康湧先輩が200mで優勝、100mでは3位となっています。					
OB会があり、試合・合宿の補助や練習用具の購入に対して支援をもらっています。					

大学名	追手門学院大学				
創部年	1970年頃				
部員数	男子	16名	女子	3名	文責 (主務) 阿川 晃平
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は現在2部校に属しています。大学のグラウンドは100mのタータンしかないため、週3日は大学、週2日は近隣の陸上競技場で練習をしています。練習は主将、副将を中心に行っていますが、今年の夏から臨時コーチが就きましたので、競技力をさらに高めていきたいと考えています。主な実績ですが、3名の関西インカレ優勝者が出ています。1980年村上栄生先輩が砲丸投、1997年、1998年玉井信也先輩が走高跳で2連覇、2009年、2010年北川勝貴先輩が110mH、400mHで2連覇しています。OB会から練習用具を購入する際に支援をもらっています。					

大学名	阪南大学				
創部年	1971年				
部員数	男子	5名	女子	0名	文責 (主務) 植益 亮
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は現在関西インカレ2部校におり、まずは2部上位校を目標に練習をしています。学業と部活動の両立を目指しているため、全体練習は週2回とし、それ以外の日は各部員が自己管理をしながら、練習を行っています。大学にはコーチがいないため、週1回OBに外部コーチとして指導を依頼し、それ以外の練習は部員同士で協力しながら練習をしています。現在は部員が5名と少なくなりましたが、過去には20名を超えていた時期もありました。2008年の第85回関西インカレ2部砲丸投で岩崎博先輩が14m33を投げて優勝しているのが、唯一の関西インカレ優勝者となっています。</p>					

大学名	滋賀医科大学				
創部年	1977年				
部員数	男子	12名	女子	19名	文責 (主将) 米田 航大
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>1995年卒のOBで元顧問の杉本光繁先生は100mで10秒2をマークし、ソウル五輪の参加標準記録突破者です。関西インカレ2部100mも優勝しています。医科大ですので、学業と両立させながら各々が目標を抱いて日々練習に励んでいます。関西インカレや西日本インカレに出場する選手も数名毎年おり、大学名を残し続けています。昨年の関西インカレ400mHで主将の米田航大が5位という結果を残しました。米田と棒高跳の糸井拓哉は毎年近畿選手権に出場しています。コロナ禍で医療系大学は厳しい規制で活動が制限されていますが、新入生も入部し活動が継続できています。</p>					

大学名	大阪産業大学				
創部年	1978年頃				
部員数	男子	26名	女子	1名	文責 (主務) 黒瀬 尚紀
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>本学は現在関西インカレ2部校に属しています。大学のグラウンドで各パート長が作成した練習メニューで週5日練習しています。今年度の目標は関西インカレ1部昇格です。</p> <p>主な過去の実績ですが、チームでは2015年に最高順位の総合5位となっています。個人では村田英俊先輩がやり投で日本インカレ3位となり、関西インカレも2連覇しました。鎌田英明先輩が100m、野村諒先輩が200m、川崎義弘先輩がハンマー投、濱田祐輔先輩が十種競技で2連覇しており、4×100mR、4×400mRも各1回優勝しています。</p>					

大学名	奈良女子大学				
創部年	1981年頃				
部員数	男子	0名	女子	5名	文責 (主務) 久保田 真帆
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
<p>練習は週3日、大学のグラウンドや公営の競技場で行っています。練習メニューは部員全員で考えています。2021年度の目標は、個々の目標を達成するために部員同士で刺激しあうことです。</p> <p>関西インカレには1981年の第58回大会より出場していますが、当時は部員数も20名を超えており、円盤投で山本智咲先輩が1981年から4年連続で入賞しています。特に1982年の第59回大会では3位となりました。近年では2019年の奈良マラソンの女子の部で5位に奥山美帆先輩が入賞しています。</p>					

大学名	兵庫医科大学				
創部年	1982年頃				
部員数	男子	15名	女子	8名	文責 (主務) 藤田 勲
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
練習は週2回、武庫川の河川敷や尼崎陸上競技場で行っています。練習メニューはパート長が作成しています。なお、現在はコロナ禍のため、活動を停止しています。過去には一部の先輩が関西インカレや兵庫インカレに出場したことがあります。主な活動目的は医療系の大会に出場することとしています。なお、兵庫医科大学陸上部にはOB・OG会があり、練習用具の購入に際して支援をいただいています。					

大学名	兵庫教育大学				
創部年	1983年				
部員数	男子	14名	女子	17名	文責 (主務) 蛭田 苑葉
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
大学や地域の競技場で大学生、院生で週3日、全体練習を行っています。昨年の関西インカレ2部で2名が優勝、合計4名が入賞という成果を収めました。また、昨年は院生の大崎健太選手が400mで創部初の日本インカレ入賞という快挙を達成しました。練習メニューは基本、コーチが作成しています。必要に応じて先輩や部員間で意見を出し合い、練習メニューを補完して成長を促しています。本年は大崎先輩が卒業生として初めて日本選手権に出場されました。先輩たちの背中を追い、これまでの成果を上回ることができるよう、部員一同精進していきたいと思ひます。					

大学名	同志社女子大学				
創部年	1985年頃				
部員数	男子	0名	女子	5名	文責 (主務) 小島 隆文
*部員数は学連登録人数、文責者は同大主務					
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
同志社女子大学陸上部は普段の練習から同志社大学陸上部とともに練習に励んでおり、同志社大学の選手たちと切磋琢磨しながら高みを目指しています。試合では同志社女子大学として出場しますが、近年はまとまった部員数が確保できず、リレーも組むことができませんでしたが、2021年度の入部生が多く、第85回京都インカレの4×400mRに出場することができました。近年の実績ですが、2017年、2019年の日本インカレの10000mWで外所知紗先輩が入賞し、2019年は3位になっています。					

大学名	奈良県立医科大学				
創部年	1986年頃				
部員数	男子	8名	女子	7名	文責 (主務) 多田村 駿次郎
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
練習は週3日(月・水・金)、橿原競技場で行っています。練習メニューはパート長が作成しています。2021年度の目標は「怪我なく努力」です。本学は医療系の大学のため、医療系大学を対象にした大会に出場することが中心となりますが、過去には関西インカレ2部の110mHで2年連続で入賞した先輩や800mで入賞した先輩もいます。なお、OB・OG会からは試合や合宿を行う際には支援をいただいています。					

大学名	四天王寺大学				
創部年	1986年頃				
部員数	男子	9名	女子	4名	文責 (主務) 北島 杏美
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
練習は週3日、学内のグラウンドで練習を行っています。練習メニューはパートごとに考え、また自分で考えた内容も取り入れ、各自の予定にあわせて練習をしています。					
関西インカレ2部での優勝者はいませんが、藪本健太先輩が10000m競歩で第88回大会から第91回大会まで4年連続で入賞しています。その他、荻野哲也先輩が走幅跳、酒井達也先輩が10000m競歩で入賞しました。					

大学名	流通科学大学				
創部年	1988年				
部員数	男子	14名	女子	1名	文責 (主務) 前川 慎之介
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は関西インカレ2部校に属し、インカレ標準記録突破・入賞を目指して、大学グラウンド、トレーニングルーム、ユニバー記念補助競技場で練習をしています。練習日は週4日、春・夏の長期休暇を利用して他大学と合同合宿や練習を行っています。部員数は多くありませんがコーチ指導の下、部員全員が目標にむけて、いい雰囲気の中で練習に取り組んでいます。過去には1996年、1998年の関西インカレ400mで2度優勝した加藤雄一先輩、2001年、2002年の関西インカレやり投で2連覇した片山智雄先輩がいます。					

大学名	京都女子大学				
創部年	1989年頃				
部員数	男子	0名	女子	5名	文責 (主務) 川井 景太
*文責者は京大主務					
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
普段は京都大学陸上競技部と共に活動しており、練習は京都大学内のグラウンドで行っています。部員数は多くありませんが、他大学の選手と切磋琢磨しながら、それぞれが目標を持って練習に励んでいます。昨年度の関西インカレには1名が出場しました。今年度についても2名の部員が関西インカレの標準記録を突破しています。関西インカレでは、京大と合同でたてるチーム目標や個人々の目標の達成を目指しています。					
過去には古川百合香先輩が三段跳で2004年、2005年の関西インカレで入賞しています。					

大学名	神戸国際大学				
創部年	1994年				
部員数	男子	6名	女子	2名	文責 (主務) 櫻井 悠登
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学陸上競技部は現在、2部校に属しています。練習は週3日、大学のグラウンド、公営競技場、マリパークで主将が作成した練習メニューで行っています。今年度の目標は、一人でも多くの部員が関西インカレの標準記録を突破して出場することです。					
主な部の戦績ですが、松坂竜佐先輩が1997年から100mで2部4連覇を達成しています。また200mも1998年から3連覇しました。4×100mRも1998年から松坂先輩、松坂先輩に引き続き100mで優勝した藤縄洋介先輩がメンバーの時に4連覇しています。					

大学名	滋賀県立大学				
創部年	1995年				
部員数	男子	8名	女子	0名	文責 (主務) 伊藤 悠太
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は現在2部校に属しています。練習環境は本学に土の400mトラックがあり、短短・短長・中長パートに分かれて、パート長が計画したメニューで練習をしています。					
過去の関西インカレで数名入賞していますが、昨年は男子100m、3000mSCに2名が入賞し初めて複数入賞を果たすことができました。今年度の目標は関西インカレに出場するための標準記録を一人でも多くきることです。その目標にむかって競技会への参加、練習を行っています。					

大学名	関西福祉大学				
創部年	1998年頃				
部員数	男子	12名	女子	12名	文責 (主務) 田中 大生
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は、2020年度より本格的に強化を始め、現在は男子12名・女子12名の総勢24名で日々活動を行っています。24名中22名が2年生以下の発展途上のチームです。大学には400m全天候型トラックやトレーニングルームなどもあり練習環境は恵まれています。全体練習は週5日、練習メニューは短距離・跳躍は各専門コーチが担当し、中長距離は学生コーチがメニューを作成しています。強化を始めて間もないチームですので、目立った戦績はまだありませんが、日本インカレ個人、リレー出場を目標に日々練習に取り組んでいます。					

大学名	大阪大谷大学				
創部年	2005年頃				
部員数	男子	8名	女子	0名	文責 (主務) 坂 佳祐
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学は現在部員も少なく関西インカレ出場を目指して頑張っています。練習は週3回のうち2回は和歌山の陸上競技場で行っています。また、小学生に対して陸上教室を開催しています。この活動はボランティア活動として、指導の面でも将来大きく活躍が見込めるものと思っています。					
また、練習メニューは週ごとに一人ずつ考えることで、どのようにすればより速く走れるのか、皆が楽しくできるのか考えながら行うことがコーチングの勉強にもなっています。					

大学名	大阪芸術大学				
創部年	2008年				
部員数	男子	0名	女子	21名	文責 (主務) 日吉 鈴菜
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)					
本学の駅伝部は今年で創部13年目を迎えました。明るく仲が良いのがチームの特徴で、全国の舞台で戦うことを目標に切磋琢磨しながら日々練習に取り組んでいます。2018年には全日本大学女子駅伝で創部初のシード権を獲得、2020年には日本インカレ10000mで初の表彰台、また日本学生女子ハーフマラソンでは2019年に2名、2021年に1名が入賞を果たすなど、少しずつですが結果を残すことができます。また、「西日本最大の総合芸術大学」に通う私たちは、部活動だけでなく学業面でも各人が目標をもって努力を重ねています。					

大学名	兵庫 大学					
創部年	2009年					
部員数	男子	0名	女子	10名	文責	(主務) 別所 いづみ
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>本学陸上競技部は、全日本大学女子駅伝、富士山女子駅伝にチームで出場することを目標に日々精進しています。大学にはグラウンドがないため、近くの池の周回コースや公営陸上競技場を利用しています。2019年には関西学生女子駅伝で7位となり、創部10年目にして初めて全日本大学女子駅伝に出場しました。同年の富士山女子駅伝で選抜チームのアンカーとして出場して3位、日本学生個人選手権5000m7位、関西インカレ5000m6位、神戸マラソン7位(日本人1位)など個人でも戦績を残しています。大学からは強化指定クラブとして様々な支援を受けています。</p>						

大学名	京都橘大学					
創部年	2013年					
部員数	男子	10名	女子	10名	文責	(主将) 山中 聡一郎
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>本学陸上競技部は京都橘女子大学から学連登録をしていましたが、男女共学になり新たに京都橘大学として部を立ち上げています。練習は週2日、主将を中心に部員全員で考えたメニューを、大学のグラウンド、公営競技場で行っています。</p> <p>部としての実績は今のところありませんが、男子は関西インカレ2部校として出場しています。今年度の目標は、一人でも多くの部員が関西インカレ、西日本インカレの標準記録を突破して出場することです。</p>						

大学名	びわこ学院大学					
創部年	2014年					
部員数	男子	43名	女子	7名	文責	(主務) 西芝 燎哉
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>本学は駅伝部と陸上部が独立して活動しており、昨年の関西インカレでは2部総合3位の成績を残し1部昇格を目指しています。学内には練習場所はありませんが、自然に囲まれた環境で個々が目標を持ち競技に打ち込んでいます。駅伝部は約2時間の限られた時間でトレーニングに励み競技会にも積極的に挑戦して年々記録が向上しています。昨年は全日本大学駅伝に初出場、丹後駅伝では3位入賞を果たしました。卒業生には実業団へ進んだ先輩もあり、永く競技に関わる選手が生まれるチーム作りを目指しています。</p>						

大学名	羽衣国際大学					
創部年	2015年					
部員数	男子	0名	女子	12名	文責	(主務) 宮山 碧唯
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>本学は今年で創部7年目を迎えました。まだ部としての歴史は浅いですが、各インカレへの出場人数も徐々に増え、全日本インカレの標準記録突破者や全国招待大学対校男女混合駅伝関西学連選抜チームのメンバーに選出されたりと年々、成績を伸ばしつつあります。</p> <p>部のモットーは、「明るく！楽しく！元気よく！」を掲げ、全日本大学女子駅伝出場を目標に日々練習に励んでいます。また、文武両道も心がけており、さらに授業で学んだこと、得たことを競技につなげられるよう努めています。</p>						

大学名	放送大学関西					
創部年	2020年					
部員数	男子	9名	女子	1名	文責	(主務) 藤本 純司
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>本学はインターネットを活用した学習システムで単位を取得できる通信制の大学です。部員全員で練習メニューを作成して、集まることができるメンバーで公営競技場や長居周回、大阪城などで練習を行っています。</p> <p>部の今年度の目標は丹後大学駅伝への出場です。創部2年目の部なので、大きな実績はありませんが今年の大坂インカレでは総合6位になっています。また、個人では日本学生個人選手権に出場者を出しています。</p>						

大学名	大和大学					
創部年	2020年					
部員数	男子	18名	女子	9名	文責	(主務) 宮森 崇広
部の紹介 (部活動(練習環境、活動内容)、過去の戦績等)						
<p>練習は週3日、大学のグラウンド、公営競技場で行っています。練習メニューは指導者が作成しています。創部したばかりの部なので実績はありませんが、2021年度の目標は「それぞれの自分の実力を知る」としています。</p>						

関西学生陸上競技連盟歴代会長

本連盟第5代会長であった田淵潔が日本学生陸上競技連合40周年記念誌に寄稿している内容をもとに歴代会長を記載。なお、第3代会長と第4代会長の間に、会長職に就いた方がいた可能性も田淵潔の以下の寄稿文から読み取れるが、初代会長から第3代会長までは1年ごとに交替しており、またその当時の事情を把握している人物がいなかったため、第4代会長を半井修一とした。「学制改革に伴う新制大学の発足は学生役員の交替を早め、加えて経済的事情もあって学生のみの手による組織運営が困難になってきた。そこで学生自治の建前はくずさないまでも、先輩の援助と指導が必要となり、会長制がとられ、豊田治助(京大卒)、故塚本篤之助(同大卒)、猿丸吉左衛門(同大卒)など各1年を就任の後、故半井修一(同大卒)・・・」

初代会長 豊田 治助 (京大卒)
第2代会長 塚本篤之助 (同大卒)
第3代会長 猿丸吉左衛門 (同大卒)
*第3代会長までは1年ごとに交替
第4代会長 半井 修一 (同大卒)
第5代会長 田淵 潔 (同大卒)
第6代会長 大島 鎌吉 (関大卒)
第7代会長 吉田 実 (京大卒)
第8代会長 竹本 肇 (日大専一日大卒)
第9代会長 園田裕四郎 (関大卒)
第10代会長 蔭山 靖夫 (同大卒)
第11代会長 津野 洋 (京大卒)

注)本連盟は1921(大正10)年に設立されているが、会長制がとられるまでの期間に関しては、本連盟設立時に尽力された神戸高商、関学、大阪高商、同大、京大等の先輩方の指導助言を得て学生自治で運営を行ってきた。現在も運営等実務的な事に関しては、学生中心で行っているが、第7代吉田会長の時に初めて事務局長(卒業生)がおかれ、学生をサポートする体制が構築された。

関西学生陸上競技連盟歴代学生幹事長(第2次世界大戦までは秘書が幹事長の役職を担う)

本連盟が設立された当時の資料がないため、どのような体制で学連の運営を行ってきたかは定かではないが、1928(昭和3)年の連合年鑑によると秘書、幹事、技術員が役員として記載されている。秘書は現在の幹事長と考えられるが、連合設立の初代秘書は北澤清(東農大)と田淵潔(同大)が就いていた。また技術員は当時の現役トップ選手が就き、織田幹雄(早大)、沖田芳夫(早大)、相沢巖夫(京都帝大)、塚本篤之助(同大)といった錚々たる名前があがっている。なお、同年1月19日には連合設立のための規約制定の会合が京都帝大「楽友会館」で開催されている。

本連盟にも秘書、会計がいたことは当時の資料で確認はできるが、ほぼ散逸しているため、第2次世界大戦後「幹事長」としてほぼ判明している時から現在に至るまでの歴代幹事長を記載している。

注)手元にある連合の資料は1928(昭和3)年、1936(昭和11)年、1938(昭和13)年の3年分である。当時の本連盟加盟校を以下に記している。なお、当時は連合事務所が関西(京都)にもあったようである。また、1928年の連合年鑑によると秘書の代わりに役員長という役職があったこともわかっている。

1928(昭和3)年の加盟校

第三高等学校、同志社大学、広島高等師範学校、関西大学、関西学院高等部、神戸商業大学、甲南高等学校、京都府立医科大学、京都帝国大学、京都薬学専門学校、浪速高等学校、日本大学専門学校、大阪外国語学校、大阪医科大学、大阪高等学校、大阪商科大学、大阪歯科大学、大阪歯科医学専門学校、大谷大学、立命館大学、龍谷大学、和歌山高等商業学校、山口高等商業学校

1936(昭和11)年、1938(昭和13)年の加盟校

<京都支部> 第三高等学校、同志社大学、同志社高等商業学校、京都府立医科大学、京都帝国大学、京都薬学専門学校、京都高等工藝学校、京都高等蚕糸学校、大谷大学、立命館大学、龍谷大学

<大阪支部> 関西大学、浪速高等学校、日本大学専門学校、大阪外国語学校、大阪帝国大学、大阪高等医学専門学校、大阪高等学校、大阪歯科医学専門学校、大阪商科大学、和歌山高等商業学校、昭和高等商業学校

<兵庫支部> 関西学院大学、神戸高等商業学校、神戸商業大学、甲南高等学校

1947(昭和22)年度	太田 庄次 (立命大)	1948(昭和23)年度	入野 昌志 (関大)	1949(昭和24)年度	入野 昌志 (関大)
1950(昭和25)年度	上村伝右衛門 (京大)	1951(昭和26)年度	上村伝右衛門 (京大)	1952(昭和27)年度	桑原 一弘 (同大)
1953(昭和28)年度	橋本 明 (京大)	1954(昭和29)年度	辰田 一 (関大)	1955(昭和30)年度	尾上 武 (同大)
1956(昭和31)年度	久世 実 (京大)	1957(昭和32)年度	高田 利一 (同大)	1958(昭和33)年度	小野 浩一 (大市大)
1959(昭和34)年度	横山 弘 (関大)	1960(昭和35)年度	畑中 良樹 (同大)	1961(昭和36)年度	豊田 洋治 (甲南大)
1962(昭和37)年度	仙石 守 (関学大)	1963(昭和38)年度	富島 統一 (京大)	1964(昭和39)年度	坂井 寛士 (関学大)
1965(昭和40)年度	白石 勝 (甲南大)	1966(昭和41)年度	前川洋一郎 (神大)	1967(昭和42)年度	迫川 叡作 (関大)
1968(昭和43)年度	松本 耕司 (大市大)	1969(昭和44)年度	村上 範彦 (関大)	1970(昭和45)年度	戸上 研一 (甲南大)
1971(昭和46)年度	小幡 修 (大体大)	1972(昭和47)年度	品川 真彦 (京産大)	1973(昭和48)年度	中村 明経 (関学大)
1974(昭和49)年度	池田 徹 (天理大)	1975(昭和50)年度	増田 一雄 (大体大)	1976(昭和51)年度	吉岡 義夫 (京産大)
1977(昭和52)年度	渡部 吉一 (大体大)	1978(昭和53)年度	森 康員 (天理大)	1979(昭和54)年度	北村 公亮 (京大)
1980(昭和55)年度	中尾 裕行 (関学大)	1981(昭和56)年度	永福 栄 (大体大)	1982(昭和57)年度	増田 憲二 (京大)
1983(昭和58)年度	池田 隆宏 (天理大)	1984(昭和59)年度	長束 智司 (大体大)	1985(昭和60)年度	銭本 護 (関大)
1986(昭和61)年度	近藤 一弘 (関学大)	1987(昭和62)年度	福知 真 (阪大)	1988(昭和63)年度	三好 永 (立命大)
1989(平成元)年度	飯田 哲也 (甲南大)	1990(平成2)年度	村澤 延亮 (立命大)	1991(平成3)年度	鈴木 真樹 (龍谷大)
1992(平成4)年度	四津谷裕昭 (関外大)	1993(平成5)年度	高力 康 (立命大)	1994(平成6)年度	小林 祐 (阪大)
1995(平成7)年度	藤原 宏之 (関大)	1996(平成8)年度	野田 嘉彦 (桃学大)	1997(平成9)年度	梶間 健一 (龍谷大)
1998(平成10)年度	若月 一泰 (京大)	1999(平成11)年度	小西 晃雄 (龍谷大)	2000(平成12)年度	夏原 大輔 (同大)
2001(平成13)年度	片倉 悠介 (龍谷大)	2002(平成14)年度	早川 仁 (関大)	2003(平成15)年度	岡崎 良太 (甲南大)
2004(平成16)年度	西田 朋代 (立命大)	2005(平成17)年度	塩谷友珠子 (大工大)	2006(平成18)年度	戸松那美花 (天理大)
2007(平成19)年度	澤崎 智哉 (龍谷大)	2008(平成20)年度	服部 陽平 (阪大)	2009(平成21)年度	間壁 恵 (大工大)
2010(平成22)年度	宿院 享 (京大)	2011(平成23)年度	内藤 ちあき (びわろ大)	2012(平成24)年度	山本 海斗 (関大)
2013(平成25)年度	山田 淳也 (神院大)	2014(平成26)年度	小畑 貴義 (大教大)	2015(平成27)年度	堀中 智志 (阪大)
2016(平成28)年度	安邊 啓明 (京大)	2017(平成29)年度	石田 大貴 (龍谷大)	2018(平成30)年度	酒井 辰也 (大府大)
2019(令和元)年度	三田村侑紀 (京大)	2020(令和2)年度	中沢 亮 (大市大)	2021(令和3)年度	山口佳那子 (京大)

公益社団法人日本学生陸上競技連合栄章受賞者

<功労賞>

神大	平岡	国雄	山成源太郎	今里麟次郎	前川洋一郎															
関学大	渡辺	文吉	正垣 通三	清水恒治郎	西川 善次	平田	重信	倉賀野 謙	北井 敏雄											
同大	田淵	潔	塚本篤之助	半井 修一	殿水 幸一	藤原	信一	大沢 源一	桑原 一弘	高田 利一										
	田中	正三	畑中 良樹	上田昌三郎	宮川 勝也	蔭山	靖夫	児玉 祥夫	杉本 好											
京大	江 実	木村 潔	鈴木 武	高柳 常雄	山中(土居) 弘雄	相沢 巖夫	安達良之助	井街 謙	常塚 秀次											
	豊田	治助	長島 満	松野満寿己	湯浅 佑一	吉岡 格六	白石 磷	上村伝右衛門	橋本 明	鶴沢 仁三										
	榎本	邦一	深瀬信千代	佐久間秀明	吉田 實	宮野 成二	鴨脚 佐	津野 洋	北村 公亮											
関大	入野	昌志	戸上 研之	岸源左衛門	有賀 司郎	藤枝 昭英	中島 直矢	和田 一	田尾 一郎	平原 豊弘										
	小西	秀夫	門田 逸郎	矢代 雅昭	松岡 武	園田裕四郎	小松 宏	馬場 重行	小野 吉永											
立命大	河野	礼一	泉谷 教信	芝田 徳造	井元 章夫	水瀬 安春	浅井 明輝													
大市大	高田	英夫	弓場 公淑																	
阪大	宮下	啓一	熊谷 匡昭																	
京医大	横田	敬夫	忠田 喜一																	
大外大	仲川	武雄																		
大谷大	小池	良一																		
近大	竹本	肇	津田 忠雄																	
甲南大	豊田	洋治	櫻井 治	西 哲太郎	伊東 浩司															
光華短大	桑原	美代																		
摂南大	辻井	義弘																		
大経大	翠	忠明	八木田恭輔																	
天理大	堤	迪夫	岩谷 忠雄	平田 敏彦	伊藤 道郎															
京産大	伊東	輝雄	卯野 優	美田村克実																
大体大	豊岡	示朗	栗山 佳也																	
関外大	塩地	弘和																		
薫英短大	中嶋	輝雄																		
武庫女大	中西	匠																		
びわろ大	渋谷	俊浩																		

<勲功賞>

関学大	浅井	浄	寺田 恵	多田 修平																
同大	西 貞一																			
京大	田島	直人	藤江(原田) 正夫	山西 利和																
関大	谷口	睦生																		
立命大	十倉	みゆき	加納 由理	大山 美樹	堀江新太郎	田中 華絵	岩川真知子													
	津田	真衣	三井 綾子	菅野 七虹	壹岐 いちこ															
龍谷大	高岡	寿成	洲瀬真寿美																	
京産大	泉	宜廣	佐藤 由美	木村 泰子	奥野有紀子															
大体大	辻下美代子		深尾 真美	妹尾 貴子																
				(金刺)																
佛教大	木崎	良子	西原 加純	石橋 麻衣	竹地 志帆															
大阪成蹊大	中村	水月																		

2021年度 関西学生陸上競技連盟 役員一覧

名誉 会 副 監 へ 普 及 距 離 顧 念 会	ド コ 一 員 長 間 賓	長 長 事 長 長 間 賓	蔭山 靖夫	津野 洋	北井 敏雄	小野 吉永	渋谷 俊浩	津田 忠雄	伊東 輝雄	前川 洋一郎	松本 正義	高岡 伸夫	杉田 義郎	三木 康詩	中尾 明	深尾 真美	浅見 公博	伊東 浩司	卯野 優	貴嶋 孝太	小山 宏之	杉村 憲一	十倉 みゆき	西尾 香穂	松尾 信之介	森田 陽子	北井 敏雄		
			熊谷 匡昭	栗山 佳也	水瀬 安春	矢代 雅昭	二之湯 智	吉井 道昭	奥村 展三	堀井 巖	三好 稔彦	稲原 敏弘	植田 真司	西 哲太郎	小谷 純一	竹田 博文	中西 匠	藤澤 政美	新井 彩	伊東 太郎	大江 秀和	北野 剛教	近藤 潤	妹尾 誠	友金 明香	林 直也	松村 浩貴	山方 諒平	
医 評	師 議	団 員	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千
事 務 局	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	

2021年度 関西学生陸上競技連盟 会友一覧

神 戸 大 学	藤井 一美 三芳 浩平 西内 浩太 郷原 一眞	橋川 武司 伊藤 勝啓 武田 惣太	前川 洋一郎 佐中 真司 高橋 圭	湯本 欣延 豊田 育美 木場 陽一朗	湯本 正 寶楽 美里 蛭原 一真 (以上16名)
関 西 学 院 大 学	上田 康 仙石 守 佐藤 泰章 中尾 裕行 川野 美香 荻田 大樹 多田 修平	蝦名 純 島崎 章 中村 明 植月 義夫 猪口 垂矢 藤田 大地 坂井 佑季香	坂上 恭而 浅井 浄 増田 学 近藤 一弘 寺田 惠 横野 高明 佐々木 努	正木 定雄 坂井 寛士 竹間 弘治 石田 幸子 江口 祐樹 山本 大輝 古川 弘基	藤野 忠 三宅 克宏 北井 敏雄 中浜 愛 齐藤 聡 岡田 啓佑 (以上34名)
同 志 社 大 学	飯田 義規 畑中 良樹 足立 長彦 朝原 宣治 荒川 大輔 鎌田 彬生 松岡 恭平	山本 貴美子 長田 義昭 杉本 好 早狩 実紀 我孫子 智美 谷本 寛	尾上 武 林 寿男 花岡 靖視 桜井 郁子 北村 弘展 神谷 慎	高田 利一 塩見 靖彦 岩佐 克俊 夏原 大輔 飯尾 尊優 折手 利行	的場 諄吉 名子 政志 石橋 大介 山口 紘子 原 佑介 前川 起慶 (以上31名)
京 都 大 学	山崎 稔 北村 公亮 杉浦 健 坂倉 周介 杉本 明洋 樋口 裕磨 山内 美佳	富島 紘一 鴨脚 佐 河村 隆文 堤 哲生 吉良 佳晃 山口 昌太 山西 利和	近藤 三郎 増田 憲二 齊藤 新理 堀内 知佳 田端 康平 伊藤 誠人 秋本 啓太	柳澤 哲明 三牧 義明 若月 一泰 田中 齊太郎 宿院 享 安邊 啓明 三田村 侑紀	久世 実 安藤 信夫 松山 真一 森 一 鈴木 大河 宮垣 寛之 (以上34名)
関 西 大 学	辰田 一 池田 豊 中野 裕次 川野 桂世 今中 康生 辻本 颯太	河野 八郎 迫川 叡作 笠原 啓二 矢持 宗一郎 畑野 有香 中阪 友翼	横山 弘 村上 範彦 銭本 護 早川 仁 伊藤 愛里 上田 敦也	吉川 勲 萩野 純人 藤原 宏之 田辺 大樹 東 佳弘 片岡 千英里	高橋 義明 岡本 泰幸 松井 元 小玉 亮平 山本 海斗 名免良 栗 (以上30名)
立 命 館 大 学	吉岡 茂 水野 永 濱 竜哉 村田 竜司 山中 正人 篠田 航 岩川 真知子	宮田 孜 村沢 延亮 田中 岳 中谷 圭吾 田井中 綾香 野々垣 夏美 小谷 優介	島田 隆之 高力 康 十倉 みゆき 西田 朋代 池田 惠美 齋藤 光 堀江 新太郎	沢田 忠篤 宇田 真彦 大山 美樹 五島 誠 三村 茉実 藪田 奈都子 津田 真衣	進藤 盛徳 光田 耕平 加納 由理 杉山 健太 小島 一恵 田中 華絵 三井 綾子

	前田 浩唯 青木 望美 小西 彩月	大森 菜月 石田 紗稀 吉野 未紗	菅野 七虹 壹岐 いちこ	小西 勇太 塩見 綾乃	本堂 翔太 佐々木 混平 (以上47名)
大 阪 市 立 大 学	前田 茂和 中沢 亮	阪上 光明	加瀬 和夫	松本 耕司	乾 善彦 (以上6名)
大 阪 大 学	福地 真 長谷川 竜 松田 直紀 清水 智可	生駒 莊太郎 出口 佳代 服部 陽平 大沼 響	土屋 泰博 長谷川 竜 祖父江 理明	寺澤 佳恵 森本 研一 岩田 尚樹	小林 祐 土井 勇介 堀中 智志 (以上17名)
龍 谷 大 学	鈴木 真樹 片倉 悠介 藤井 由香 和田 麻紀	宮武 麻里子 高岡 寿成 朋澤 融智 石田 大貴	梶尾 健一 井端 真一 山崎 竜暉 斎藤 大樹	小西 晃雄 上路 航希 吉田 哲也	安井 泰章 澤崎 智哉 瀧瀬 真寿美 (以上18名)
近 畿 大 学	村川 三郎 六間 口雅樹 河内 光起	志賀 俊作 大西 輝 渡辺 七菜	中村 勝機 地附 康平	浜口 晴一 樽沢 周	網谷 康平 北口 凜 (以上12名)
神 戸 商 科 大 学 (兵 庫 県 立 大 学)	今里 次郎	江端 哲也			(以上2名)
京 都 教 育 大 学	金本 仁 春山 亜沙子	澤井 治子 中津 浩貴	井上 哲 恩田 美咲	酒井 基文	寺谷 純子 (以上8名)
大 阪 教 育 大 学	横山 小枝 香西 直樹 小畑 貴義	大木 修 北野 萌 木村 一彦	岩永 かおり 小浜 浩司 小西 真由	浅田 清 佐藤 真介	西川 真也 松本 佳寿美 (以上13名)
大 阪 経 済 大 学	阿部 祥司	山田 里美	小野 正憲	庄田 修司	矢野 和博 (以上5名)
甲 南 大 学	野沢 太一郎 勝島 庸介 新井 初佳 豊浦 正起	岡島 俊雄 濱野 大介 福本 幸	藤本 久士 白木 剛 秋田 裕輔	島袋 孝則 岡崎 良太 湖東 雅仁	飯田 哲也 岡見 吉隆 有田 佳未 (以上16名)
帝 塚 山 学 院 短 期 大 学	吉川 綾子				(以上1名)
京 都 光 華 短 期 大 学	小林 祐子	鳥居 充子			(以上2名)
京 都 光 華 女 子 大 学	桑原 美代	浅井 妙子	小辻 芳枝	渥美 裕子	戸上 京子 (以上5名)
天 理 大 学	岡崎 貞雄 山田 公一 柴田 博之 武田 直子 鳥岩 みゆき	岩谷 忠雄 広瀬 栄明 北森 郁子 戸松 那美花 伊藤 大貴	橋本 和典 三浦 重則 高崎 賢一 楠見 耕平	池田 徹 池田 隆宏 釜田 祐也 矢目 理	森 康員 本鍋 田浩司 岡本 和洋 柏木 成彦 (以上22名)
大 阪 府 立 大 学	南 武夫	雲財 康雄	酒井 辰也		(以上3名)
武 庫 川 女 子 大 学	柳 恵美 西躰 直子 谷口 広恵 堂野 起佐	竹内 安子 井手 典子 油田 直子 足立 史歩	入谷 明美 梶川 彰子 長田 かおり 澤井 碧香	岡山 智美 内海 沙織 太田 陽子 長藤 由香	佐々木 理香 楠 亜希子 大場 咲衣子 松木 怜奈 (以上20名)
大 阪 体 育 大 学	清水 修 小西 清隆 辰巳 公子 山添 和重 原田 奈津子 堀岡 智子 大石 淳平 坂本 達哉	山口 君枝 増田 一雄 長東 智司 竹内 有記 黄瀬 洋司 左海 秀晃 十代 隼輔 浅田 恵利香	辻下 美代子 渡辺 吉一 伊藤 千寿子 藤井 貴子 北村 薫 田村 香奈枝 岩本 敏恵 美浦 尚行	小幡 修 森澤 一蔵 山本 文彦 北田 敏恵 西尾 有香 荒井 健次 太田 果歩	原 淳子 永福 栄 伊東 文彦 浅田 智美 儀満 大輔 田中 唯文 富田 信司 (以上38名)
桃 山 学 院 大 学	野田 嘉彦	山田 歩美	石橋 靖敬		(以上3名)
京 都 産 業 大 学	品川 真雄 木村 泰子 光川 愛 賀元 あすか 中平 弘	吉岡 義夫 河邊 崇雄 前田 貴史 渡邊 美都 新井 志織	溝口 和洋 山本 善之 森田 幸司 安保 優司 倉崎 愛那	大森 俊 佐藤 由美 吉田 恵美可 重田 円香 吉田 明星	小坂田 淳 小田 泰士 宇野 綾 奥野 有紀子 山中 花咲 (以上25名)
神 戸 学 院 大 学	森田 昌伸 山田 淳也	川立 義博	坂田 匡充	森口 耕次	飛松 真紀子 (以上6名)

摂南大学	金澤 識祥 内山 卓哉	土肥 慶太	福岡 毅	杉本 賢一	平井 修吾 (以上6名)
関西外国語大学	四津谷裕昭 林 美希	井上 千津 鷺田 昌平	岩崎 あや子 粕谷 智美	片山 一彦 浅田 周平	松田 巧 道白 翔太 (以上10名)
大阪学院大学	高橋 尚子	新井沙紀枝			(以上2名)
佛教大学	飯島 希望 西原 加純	木崎 良子 石橋 麻衣	野崎 千義 竹地 志帆	吉川 遼 高倉 綾乃	吉本 ひかり (以上9名)
大阪国際大学	塩谷友味子 巻田 知範	仲本恵美子	高山 真以	間壁 恵	西村 香保 (以上6名)
神戸国際大学	藤田 ゆま				(以上1名)
びわこ成蹊スポーツ大学	増田 豊	内藤 ちあき	十川 卓也	安田 惇平	島津 光佑 (以上5名)
園田学園女子大学	三好 夏未	三谷 眞由	谷垣歌悠里	富田 葵	(以上4名)
大阪成蹊大学	青山 聖佳	山内 愛	中村 水月	柳谷 朋美	(以上4名)

関西学連(現役・卒業生)の五輪・世界陸上・ユニバーシアード・アジア・極東選手権代表選手一覧

五輪

メダリスト	金メダル	田島 直人	京都帝大OB	ベルリン	三段跳
		高橋 尚子	大院大OG	シドニー	マラソン
	銀メダル	原田 正夫	京都帝大OB	ベルリン	三段跳
		朝原 宣治	同大OB	北京	4×100mR
	銅メダル	大島 鎌吉	関大	ロスアンゼルス	三段跳
		田島 直人	京都帝大OB	ベルリン	走幅跳
		山西 利和	京大OB	東京2020	20km競歩

1	1928(昭和3)年	アムステルダム	相沢 巖夫	京都帝大	100m 200m 4×100mR
2	1932(昭和7)年	ロスアンゼルス	西 貞一	同大	200m 400m 4×400mR(5位、3'14"6)
3			大島 鎌吉	関大	三段跳(3位、15m12)
4			長尾 三郎	関大	やり投
5	1936(昭和11)年	ベルリン	谷口 睦生	関大	100m 200m
6			古田 康治	関大	110mH
7			福田 時雄	関大	400mH
8			市原 正雄	立命大	400mH
9			田島 直人	京都帝大OB	走幅跳(3位、7m74w) 三段跳(1位、16m00)
10			戸上 研之	関大	走幅跳
11			原田 正夫	京都帝大OB	走幅跳 三段跳(2位、15m66)
12			大島 鎌吉	関大OB	三段跳(6位、15m07)
13			松野栄一郎	京都帝大	円盤投 ハンマー投
14			長尾 三郎	関大OB	やり投
15	1952(昭和27)年	ヘルシンキ	的場 諄吉	同大	400m 4×400mR
16			山本 弘一	京大	4×400mR
17			吉川 綾子	帝塚山学院短大	100m 走幅跳
18			宮下 美代	光華短大	80mH
19	1956(昭和31)年	メルボルン	園田裕四郎	関大OB	走幅跳
20	1960(昭和35)年	ローマ	蛭名 純	関学大	走幅跳
21	1964(昭和39)年	東京	田中 章	関学大OB	110mH
22			浅井 浄	関学大	4×100mR
23			林 寿男	同大OB	4×100mR
24			鳥居 充子	光華短大OG	走高跳
25	1972(昭和47)年	ミュンヘン	山 三保子	大体大OG	走高跳
26	1984(昭和59)年	ロスアンゼルス	溝口 和洋	京産大OB	やり投
27	1988(昭和63)年	ソウル	柴田 博之	天理大OB	走幅跳
28			溝口 和洋	京産大OB	やり投
29	1996(平成8)年	アトランタ	朝原 宣治	同大OB	100m 4×100mR 走幅跳
30			高岡 寿成	龍谷大OB	10000m
31			小坂田 淳	京産大	4×400mR(5位、3'00"76)
32	2000(平成12)年	シドニー	小坂田 淳	京産大OB	400m 4×400mR
33			高岡 寿成	龍谷大OB	5000m 10000m(7位、27'40"44)
34			朝原 宣治	同大OB	4×100mR(6位、38"66)
35			高橋 尚子	大院大OG	マラソン(1位、2°23'14")
36	2004(平成16)年	アテネ	朝原 宣治	同大OB	100m 4×100mR(4位、38"49)
37			小坂田 淳	京産大OB	4×400mR(4位、3'00"99)
38	2008(平成20)年	北京	朝原 宣治	同大OB	100m 4×100mR(2位、38"15)
39			早狩 実紀	同大OG	3000mSC
40	2012(平成24)年	ロンドン	東 佳弘	関大	4×400mR
41			木崎 良子	佛教大OG	マラソン
42			淵瀬真寿美	龍谷大OG	20km競歩
43			我孫子智美	同大OG	棒高跳

44	2016(平成28)年	リオデジャネイロ	荻田 大樹	関学大OB	棒高跳
45			伊藤 舞	京産大OG	マラソン
46	2021(令和3)年	東京	多田 修平	関学大OB	100m、4×100mR
47	*新型コロナウイルス感染症 のため1年延期		山西 利和	京大OB	20km競歩(3位、1'21'28")
48			丸尾 知司	びわろ大OB	50km競歩
49			河添 香織	立命大OG	20km競歩
50			齋藤 愛美	大阪成蹊大	4×100mR
51			壹岐 あいこ	立命大	4×100mR
52			青山 華依	甲南大	4×100mR

出場選手大学一覧(延べ人数で多い大学順)

	延べ人数	実人数
1 関大	10名	8名
2 同大	9名	6名
3 京大(京都帝大含む)	6名	6名
3 京産大	6名	3名
5 関学大	5名	5名
6 龍谷大	3名	2名
6 立命大	3名	3名
8 光華短大	2名	2名
9 帝塚山学院短大	1名	1名
9 大体大	1名	1名
9 天理大	1名	1名
9 大院大	1名	1名
9 佛教大	1名	1名
9 びわろ大	1名	1名
9 大阪成蹊大	1名	1名
9 甲南大	1名	1名

世界陸上

メダリスト	金メダル	山西 利和	京大OB	ドーハ	20km競歩
	銅メダル	多田 修平	関学大	ロンドン	4×100mR
			関学大OB	ドーハ	4×100mR

1	1991(平成3)年	東京	早狩 実紀	同大OG	3000mSC
2			北田 敏恵	大体大	4×100mR
3			北川 政代	大体大OG	4×100mR
4			北森 郁子	天理大OG	円盤投
5	1993(平成5)年	シユトウツガルト	高岡 寿成	龍谷大OB	5000m
6	1995(平成7)年	イェーテボリ	小坂田 淳	京産大	200m
7			朝原 宣治	同大OB	走幅跳
8			溝口 和洋	京産大OB	やり投
9			木村 泰子	京産大	10000m
10	1997(平成9)年	アテネ	朝原 宣治	同大OB	100m 4×100mR
11			高岡 寿成	龍谷大OB	10000m
12			高橋 尚子	大院大OG	5000m
13			藤村 信子	大体大OG	マラソン
14			岩本(北田)敏恵	大体大OG	4×100mR
15			新井 初佳	甲南大OG	4×100mR
16	1999(平成11)年	セビア	小坂田 淳	京産大OB	400m 4×400mR
17			高岡 寿成	龍谷大OB	5000m 10000m
18			新井 初佳	甲南大OG	100m 4×100mR
19			高橋 尚子	大院大OG	マラソン
20			岩本(北田)敏恵	大体大OG	4×100mR

21	2001(平成13)年	エドモントン	朝原 宣治	同大OB	100m 4×100mR(4位、38"96)
22			安井 章泰	龍谷大OB	100m
23			小坂田 淳	京産大OB	400m 4×400mR
24			高岡 寿成	龍谷大OB	10000m
25	2003(平成15)年	パリ	朝原 宣治	同大OB	100m 4×100mR(6位、39"05)
26			小坂田 淳	京産大OB	400m 4×400mR
27			小崎 まり	大短大OG	マラソン
28			新井 初佳	甲南大OG	4×100mR
29	2005(平成17)年	ヘルシンキ	朝原 宣治	同大OB	100m 4×100mR(8位、38"77)
30			高岡 寿成	龍谷大OB	マラソン(4位、2°11'53")
31			細川 道隆	京産大OB	マラソン
32			杉本 明洋	京大	20km競歩
33			小崎 まり	大短大OG	マラソン
34			早狩 実紀	同大OG	3000mSC
35	2007(平成19)年	大阪	朝原 宣治	同大OB	100m 4×100mR(5位、38"03)
36			杉本 明洋	京大OB	20km競歩
37			荒川 大輔	同大OB	走幅跳
38			小崎 まり	大短大OG	マラソン
39			加納 由理	立命大OG	マラソン
40			早狩 実紀	同大OG	3000mSC
41			瀧瀬真寿美	龍谷大	20km競歩
42			青山 幸	甲南大OG	走高跳
43			吉田恵美可	京産大	やり投
44	2009(平成21)年	ベルリン	荒川 大輔	同大OB	走幅跳
45			加納 由理	立命大OG	マラソン
46			早狩 実紀	同大OG	3000mSC
47			瀧瀬真寿美	龍谷大OG	20km競歩(7位、1°31'15")
48			和田 麻紀	龍谷大OG	4×100mR
49	2011(平成23)年	大邱	吉本ひかり	佛教大	10000m
50			伊藤 舞	京産大OG	マラソン
51			早狩 実紀	同大OG	3000mSC
52			瀧瀬真寿美	龍谷大OG	20km競歩
53			宮下 梨沙	大体大OG	やり投
54	2013(平成25)年	モスクワ	萩田 大樹	関学大OB	棒高跳
55			福本(青山)幸	甲南大OG	走高跳
56			木崎 良子	佛教大OG	マラソン(4位、2°31'28")
57			瀧瀬真寿美	龍谷大OG	20km競歩
58	2015(平成27)年	北京	小西 勇太	立命大OB	400mH
59			萩田 大樹	関学大OB	棒高跳
60			西原 加純	佛教大OG	10000m
61			伊藤 舞	京産大OG	マラソン(7位、2°29'48")
62			青山 聖佳	大阪成蹊大	4×400mR
63	2017(平成29)年	ロンドン	多田 修平	関学大	100m、 4×100mR(3位、38"04)
64			丸尾 知司	びわスポ大OB	50km競歩(5位、3°43'03")
65			萩田 大樹	関学大OB	棒高跳
66	2019(令和元年)	ドーハ	山西 利和	京大OB	20km競歩(1位、1°26'33")
67			多田 修平	関学大OB	4×100mR(3位、37"43)
68			河内 光起	近大	4×400mR
69			瀧瀬真寿美	龍谷大OG	50km競歩
70			佐藤 友佳	東大阪大OG	やり投
71			青山 聖佳	大阪成蹊大OG	混合4×400mR

出場選手大学一覧(延べ人数で多い大学順)

	延べ人数	実人数
1 同大	13名	3名
2 龍谷大	12名	4名
3 京産大	10名	6名
4 大体大	6名	4名
5 甲南大	5名	2名
5 関学大	5名	2名
7 佛教大	3名	3名
7 京大	3名	2名
7 立命大	3名	2名
7 大短大	3名	1名
11 大院大	2名	1名
11 大阪成蹊大	2名	1名
13 天理大	1名	1名
13 びわスポ大	1名	1名
13 近大	1名	1名
13 東大阪大	1名	1名

ユニバーシアード(旧国際学生、旧学生スポーツ週間)

メダリスト	金メダル	田島 直人	京都帝大	ブダベスト	走幅跳
		深尾 真美	大体大OG	神戸	マラソン
		泉 宜廣	京産大OB	ザグレブ	マラソン
		西原 加純	佛教大	ベオグラード	10000m
		岩川真知子	立命大	深圳	ハーフマラソン団体
		竹地 志帆	佛教大	深圳	ハーフマラソン団体
		津田 真衣	立命大	カザン	ハーフマラソン、ハーフマラソン団体
		奥野有紀子	京産大	カザン	ハーフマラソン団体
		三井 綾子	立命大	カザン	ハーフマラソン団体
		菅野 七虹	立命大	光州	ハーフマラソン団体
		新井沙紀枝	大院大	光州	ハーフマラソン団体
		山西 利和	京都大	台北	20km競歩
		多田 修平	関学大	台北	4×100mR
	銀メダル	浅井 浄	関学大	ソフィア	4×100mR
		辻下美代子	大体大	東京	4×100mR
		金刺 貴子	大体大OG	ザグレブ	マラソン
		加納 由理	立命大	バルマ・デ・マヨルカ	10000m
		大山 美樹	立命大	北京	ハーフマラソン
		木崎 良子	佛教大	イズミル	ハーフマラソン
		木崎 良子	佛教大	バンコク	10000m
		寺田 惠	関学大OG	バンコク	ハーフマラソン
		西原 加純	佛教大	ベオグラード	5000m
		瀧瀬真寿美	龍谷大OG	ベオグラード	20km競歩
		堀江新太郎	立命大	深圳	4×400mR
		田中 華絵	立命大	深圳	10000m
		菅野 七虹	立命大	光州	ハーフマラソン
	銅メダル	西 貞一	同大	ダルムシュタット	オリンピックリレー
		原田 正夫	京都帝大	ブダベスト	走幅跳
		谷口 睦生	関大OB	ウィーン	100m
		高岡 寿成	龍谷大OB	バツファロー	5000m
		佐藤 由美	京産大	福岡	5000m
		木村 泰子	京産大	福岡	10000m

十倉 みゆき	立命大OG	シチリア	ハーフマラソン
石橋 麻衣	佛教大	深圳	10000m
津田 真衣	立命大	カザン	10000m
奥野有紀子	京産大	カザン	ハーフマラソン
壹岐 いちこ	立命大	台北	4×100mR
中村 水月	大阪成蹊大	台北	4×100mR

1	1928(昭和3)年	パリ	相沢 巖夫	京都帝大	100m(4位) 200m
2	1930(昭和5)年	ダルムシュタット	大島 鎌吉	関大	走幅跳(6位、7m09)
3			西 貞一	同大	オリンピックリレー(3位、3'33"6) *オリンピックリレー→200m+200m+400m+800m
4	1935(昭和10)年	ブダペスト	田島 直人	京都帝大	走幅跳(1位、7m52) 4×100mR(4位、42"8)
5			原田 正夫	京都帝大	110mH(4位、15"5) 4×400mR(6位、3'27"2) 走幅跳(3位、7m37)
6			谷口 睦生	関大	4×100mR(4位、42"8) 4×400mR(6位、3'27"2) オリンピックリレー(4位、3'35"6)
7			長尾 三郎	関大	やり投(4位、57m70)
8	1939(昭和14)年	ウィーン	谷口 睦生	関大OB	100m(3位、10"9)
9			前田 巖	関学大OB	棒高跳
10	1953(昭和28)年	ドルトムント	園田裕四郎	関大	走幅跳(4位、7m29) 三段跳(4位、14m58) 4×100mR(5位、42"7)
11	1955(昭和30)年	サン・セバスティアン	園田裕四郎	関大OB	走幅跳(5位、7m13) 三段跳(4位、14m79) 4×100mR(4位、43"4) アカデミーリレー(4位、3'29"9) *アカデミーリレー→800m+400m+200m+100m
12	1957(昭和32)年	パリ	宮田 孜	立命大	100m 200m
13	1959(昭和34)年	トリノ	長田 義昭	同大	100m 4×100mR(6位、42"3)
14			河野 八郎	関大OB	走幅跳
*この大会より名称ユニバーシアード					
15	1961(昭和36)年	ソフィア	浅井 浄	関学大	100m 4×100mR(2位、41"2)
16			三宅 克宏	関学大	110mH
17			小林 祐子	光華短大OG	200m
18	1963(昭和38)年	ボルト・アレグレ	三宅 克宏	関学大	110mH 4×100mR(4位、42"3)
19			鳥居 充子	光華短大	80mH(4位、12"5) 走高跳(5位、1m56)
20	1965(昭和40)年	ブダペスト	田中 章	関学大OB	110mH(7位、14"4)
21	1967(昭和42)年	東京	池田 豊	関大	800m
22			星加 利樹	関学大	4×400mR(6位、3'09"5)
23			辻下美代子	大体大	200m(5位、25"0) 4×100mR(2位、46"5)
24			田中 君枝	大体大	走高跳(6位、1m65)
25	1973(昭和48)年	モスクワ	増田 学	関学大	走幅跳 4×100mR
26	1975(昭和50)年	ローマ	小西 清隆	大体大	棒高跳
27	1983(昭和58)年	エドモントン	辰巳 公子	大体大	七種競技
28	1985(昭和60)年	神戸	梅本 公士	大体大OB	走幅跳
29			溝口 和洋	京産大OB	やり投(6位、81m14)
30			黒田千寿子	大体大	10000m
31			深尾 真美	大体大OG	マラソン(1位、2°44'54")
32			北森 郁子	天理大OG	円盤投
33			辰巳 公子	大体大OG	七種競技
34	1987(昭和62)年	ザグレブ	泉 宜廣	京産大OB	マラソン(1位、2°24'23")
35			金刺 貴子	大体大OG	マラソン(2位、2°46'33")
36	1989(平成1)年	デュースブルグ	岩佐 克俊	同大	4×400mR
37	1991(平成3)年	シェフィールド	岸本 実	京産大OB	マラソン
38			寺澤 佳恵	阪大	10000m
39	1993(平成5)年	パッファロー	高岡 寿成	龍谷大OB	5000m(3位、14'06"21)

40	1995(平成7)年	福岡	河邊 崇雄	京産大	200m 4×100mR(6位、40"37)
41			小坂田 淳	京産大	200m
42			荻野 純人	関大	3000mSC(6位、8'41"70)
43			吉田 哲也	龍谷大	4×100mR(6位、40"37)
44			朝原 宣治	同大OB	走幅跳(7位、8m03)
45			山本 善之	京産大	やり投
46			北田 敏恵	大体大OG	100m 4×100mR(5位、44"80)
47			藤井 由香	龍谷大	200m
48			早狩 実紀	同大OG	1500m(6位、4'16"12)
49			佐藤 由美	京産大	1500m 5000m(3位、15'35"28)
50			木村 泰子	京産大	5000m(6位、15'59"49) 10000m(3位、33'03"01)
51			光川 愛	京産大	10000m(4位、33'16"41)
52			浅田 智美	大体大	100mH
53			佐々木美佳	関外大OG	400mH
54	1997(平成9)年	シチリア	十倉みゆき	立命大OG	ハーフマラソン(3位、1°13'20")
55	1999(平成11)年	パルマ・デ・マヨルカ	安井 泰章	龍谷大	100m 4×100mR(5位、39"37)
56			前田 貴史	京産大	ハーフマラソン(5位、1°04'50")
57			黄瀬 洋司	大体大	やり投
58			加納 由理	立命大	5000m(6位、16'11"15) 10000m(2位、33'16"41)
59	2001(平成13)年	北京	大山 美樹	立命大	ハーフマラソン(2位、1°15'31")
60	2003(平成15)年	大邱	荒川 大輔	同大	走幅跳
61			堀岡 智子	大体大	5000m(8位、16'22"17) 10000m(5位、34'12"37)
62			池田 恵美	立命大	5000m
63			飯島 希望	佛教大	ハーフマラソン(4位、1°15'18")
64			重田 円香	京産大	ハーフマラソン(7位、1°16'05")
65			三村 芙実	立命大	20km競歩(8位、1°49'05")
66	2005(平成17)年	イズミル	木崎 良子	佛教大	ハーフマラソン(2位、1°14'34")
67			寺田 恵	関学大	ハーフマラソン(6位、1°15'23")
68	2007(平成19)年	バンコク	木崎 良子	佛教大	5000m(4位、15'58"19) 10000m(2位、32'55"11)
69			小島 一恵	立命大	5000m(5位、16'04"55)
70			寺田 恵	関学大OG	ハーフマラソン(2位、1°12'37")
71	2009(平成21)年	ベオグラード	荻田 大樹	関学大	棒高跳
72			西原 加純	佛教大	5000m(2位、15'46"95) 10000m(1位、33'14"62)
73			小島 一恵	立命大	5000m(7位、16'03"45)
74			瀧瀬真寿美	龍谷大OG	20km競歩(2位、1°31'42")
75	2011(平成23)年	深圳	小谷 優介	立命大	100m 4×100mR
76			堀江新太郎	立命大	4×400mR(2位、3'05"16)
77			伊藤 愛里	関大	100mH
78			田中 華絵	立命大	5000m(6位、16'04"05) 10000m(2位、33'15"57)
79			石橋 麻衣	佛教大	10000m(3位、33'41"90)
80			岩川真知子	立命大	ハーフマラソン(4位、1°16'53"、団体1位)
81			竹地 志帆	佛教大	ハーフマラソン(7位、1°18'16"、団体1位)
82	2013(平成25)年	カザン	津田 真衣	立命大	10000m(3位、33'14"59) ハーフマラソン(1位、1°13'12"、団体1位)
83			奥野有紀子	京産大	ハーフマラソン(3位、1°13'24"、団体1位)
84			三井 綾子	立命大	ハーフマラソン(7位、1°14'10"、団体1位)
85			前田 浩唯	立命大	20km競歩
86	2015(平成27)年	光州	大森 菜月	立命大	5000m(7位、16'07"53)
87			新井沙紀枝	大院大	10000m ハーフマラソン(団体1位)
88			菅野 七虹	立命大	ハーフマラソン(2位、1°15'24"、団体1位)
89			山内 愛	大阪成蹊大	やり投
90	2017(平成29)年	台北	多田 修平	関学大	100m(7位、10"33) 4×100mR(1位、38"65)

91			山西 利和	京大	20km競歩(1位、1°27'30")
92			壹岐 いちこ	立命大	100m 4×100mR(3位、44"56)
93			中村 水月	大阪成蹊大	200m 4×100mR(3位、44"56)
94	2019(令和元年)	ナポリ	河内 光起	近大	400m(6位、46"62) 4×400mR(4位、3'04"34)
95			坂本 達哉	大体大	やり投
96			塩見 綾乃	立命大	800m、4×400mR
97			柳谷 朋美	大阪成蹊大	200m、4×100mR(5位、44"91)

出場選手大学一覧(延べ人数が多い大学順)

	延べ人数	実人数
1 立命大	19名	18名
2 大体大	14名	13名
3 京産大	12名	12名
4 関学大	11名	9名
5 関大	10名	8名
6 同大	6名	6名
6 佛教大	6名	5名
8 龍谷大	5名	5名
9 京大(京都帝大含む)	4名	4名
10 大阪成蹊大	3名	3名
11 光華短大	2名	2名
12 天理大	1名	1名
12 阪大	1名	1名
12 関外大	1名	1名
12 大院大	1名	1名
12 近大	1名	1名

アジア大会

メダリスト	金メダル	銀メダル	メダリスト	メダリスト	メダリスト
	南部 敦子	光華短大	マニラ	100m	
	藤井 芳枝	光華短大	東京	4×100mR	
	辻下美代子	大体大	バンコク	4×100mR	
	木口真佐江	大体大OG	バンコク	4×400mR	
	溝口 和洋	京産大OB	ソウル	やり投	
	岩佐 克俊	同大	北京	4×400mR	
	高岡 寿成	龍谷大OB	広島	5000m、10000m	
	小坂田 淳	京産大OB	バンコク	4×400mR	
	高橋 尚子	大院大OG	バンコク	マラソン	
	多田 修平	関学大	ジャカルタ	4×100mR	
	田尾 一郎	関大	ニューデリー	4×400mR	
	園田裕四郎	関大	マニラ	走幅跳	
	南部 敦子	光華短大	マニラ	200m、走幅跳、4×100mR	
	宮下 美代	光華短大OG	マニラ	80mH	
	岡本貴美子	同大	マニラ	4×100mR	
	柳 恭博	関学大	東京	4×100mR	
	浅井 浄	関学大	ジャカルタ	4×100mR	
	清水 修	大体大	バンコク	走高跳	
	辻下美代子	大体大	バンコク	200m	
	北森 郁子	天理大OG	広島	円盤投	
	朝原 宣治	同大OB	釜山	100m、4×100mR	
	瀧瀬真寿美	龍谷大OG	広州	20km競歩	
	木崎 良子	佛教大OG	仁川	マラソン	
	我孫子智美	同大OG	仁川	棒高跳	
	山西 利和	京大OB	ジャカルタ	20km競歩	

銅メダル	木口真佐江	大体大OG	バンコク	400mH
	岩佐 克俊	同大	北京	4×100mR
	溝口 和洋	京産大OB	北京	やり投
	北田 敏恵	大体大OG	広島	4×100mR
	藤村 信子	大体大OG	広島	マラソン
	早狩 美紀	同大OG	広島	3000mSC
	我孫子智美	同大OG	広島	棒高跳

1	1951(昭和26)年	ニューデリー	田尾 一郎	関大	800m 4×400mR(2位、3'24"4)
2	1954(昭和29)年	マニラ	園田裕四郎	関大	走幅跳(2位、6m94)
3			玉江 和男	関大OB	三段跳(4位、14m51)
4			南部 敦子	光華短大	100m(1位、12"5) 200m(2位、26"1)
5			岡本貴美子	同大	100m(6位、12"9) 200m(5位、26"6)
6					4×100mR(2位、49"6)
7			1958(昭和33)年	東京	柳 恭博
8	園田裕四郎	関大OB			走幅跳(5位、7m23)
9	藤井 芳枝	光華短大			4×100mR(1位、48"6)
10	1962(昭和37)年	ジャカルタ	浅井 浄	関学大	4×100mR(2位、41"5)
11	1966(昭和41)年	バンコク	佐藤 泰章	関学大	4×100mR(5位、42"2)
12			清水 修	大体大	走高跳(2位、2m03)
13			辻下美代子	大体大	200m(2位、25"3) 4×100mR(1位、47"1)
14	1974(昭和49)年	テヘラン	西村 彰	同大OB	400mH(4位、52"57) 4×400mR(4位、3'10"5)
15	1978(昭和53)年	バンコク	広瀬 栄明	天理大	200m(5位、21"74)
16			木口真佐江	大体大OG	400mH(3位、1'02"09) 4×400mR(1位、3'46"29)
17	1982(昭和57)年	ニューデリー	三浦 重則	天理大	砲丸投(6位、15m27)
18	1986(昭和61)年	ソウル	溝口 和洋	京産大OB	やり投(1位、76m60)
19			深尾 真美	大体大	10000m(4位、33'47"40)
20			北森 郁子	天理大OG	円盤投(4位、50m14)
21	1990(平成2)年	北京	泉 宜廣	京産大OB	マラソン(8位、2'21'01")
22			岩佐 克俊	同大	4×100mR(3位、39"61) 4×400mR(1位、3'05"82)
23			溝口 和洋	京産大OB	やり投(3位、75m84)
24			北川 政代	大体大	4×100mR(4位、45"67) 4×400mR(5位、3'40"65)
25	1994(平成6)年	広島	高岡 寿成	龍谷大OB	5000m(1位、13'38"37) 10000m(1位、28'15"48)
26			溝口 和洋	京産大OB	やり投(5位、71m74)
27			北田 敏恵	大体大OG	100m(4位、11"58) 4×100mR(3位、44"57)
28			藤村 信子	大体大OG	マラソン(3位、2'37"10")
29			北森 郁子	天理大OG	円盤投(2位、53m92)
30	1998(平成10)年	バンコク	小坂田 淳	京産大OB	4×400mR(1位、3'01"70)
31			新井 初佳	甲南大OG	100m(5位、11"59) 200m(6位、23"58)
32					4×100mR(5位、44"80)
33			高橋 尚子	大院大OG	マラソン(1位、2'21'47")
34			佐々木美佳	関外大OG	400mH(5位、58"78)
35			2002(平成14)年	釜山	朝原 宣治
36	笹野 浩志	立命大OB			800m
37	新井 初佳	甲南大OG			100m 200m 4×100mR(4位、44"59)
38	2006(平成18)年	ドーハ	青山 幸	甲南大OG	走高跳(5位、1m84)
39	2010(平成22)年	広島	木崎 良子	佛教大OG	5000m(8位、15'58"85)
40			吉本ひかり	佛教大	10000m(5位、32'06"73)
41			早狩 実紀	同大OG	3000mSC(3位、10'01"25)
42			淵瀬真寿美	龍谷大OG	20km競歩(2位、1'30"34')

43			我孫子智美	同大OG	棒高跳(3位、4m15)
44			加納 由理	立命大OG	マラソン(7位、2°36'40")
45	2014(平成26)年	仁川	西原 加純	佛教大OG	10000m(8位、32'41"49)
46			木崎 良子	佛教大OG	マラソン(2位、2°25'50")
47			福本(青山)幸	甲南大OG	走高跳
48			我孫子智美	同大OG	棒高跳(2位、4m25)
49	2018(平成30)年	ジャカルタ	山西 利和	京大OB	20km競歩(2位、1°22"10')
50			多田 修平	関学大	4×100mR(1位、38"16)

出場選手大学一覧(延べ人数が多い大学順)

	延べ人数	実人数
1 大体大	8名	7名
2 同大	7名	6名
3 京産大	5名	3名
4 関学大	4名	4名
4 関大	4名	3名
4 天理大	4名	3名
4 佛教大	4名	3名
4 甲南大	4名	2名
9 光華短大	3名	3名
10 龍谷大	2名	2名
10 立命大	2名	2名
12 大院大	1名	1名
12 関外大	1名	1名
12 京大	1名	1名

極東選手権大会(アジア大会の前身の大会)

メダリスト	金メダル	佐伯 巖	同大	マニラ	880y	
		中村 正祐	神戸高商OB	上海	砲丸投	
		毛利 一郎	大阪医大	大阪	半マイルR	
			津田晴一郎	関大	上海	1500m
			星名 泰	京都帝大	上海	五種競技
			西 貞一	同大	東京	4×400mR
			谷口 睦生	関大	マニラ	4×100mR
			田島 直人	京都帝大	マニラ	走幅跳
			大島 鎌吉	関大OB	マニラ	三段跳
			長尾 三郎	関大	マニラ	やり投
		銀メダル	渡辺 文吉	関学	上海	120yH、220yH
			榎原 如一	同大	大阪	120yH
			相沢 巖夫	京都帝大OB	上海	4×200mR
	矢柴 晴雄		関大	上海	800m	
	西 貞一		同大	東京	400m	
	谷口 睦生		関大	マニラ	200m	
	銅メダル	市原 正雄	立命大	マニラ	4×400mR	
		原田 正夫	京都帝大	マニラ	走幅跳、三段跳	
		佐伯 巖	同大	マニラ	440y	
		松川 省三	神戸高商OB	大阪	220yH	
		市原 正雄	立命大	マニラ	400mH	
		田島 直人	京都帝大	マニラ	三段跳	

1	1917(大正 6)年	東京	加藤富之助	同志社	10マイル
2	1919(大正 8)年	マニラ	佐伯 巖	同大	440y(3位) 880y(1位、2'05"0)
3	1921(大正10)年	上海	渡辺 文吉	関学	120yH(2位、16"6) 220yH(2位、26"4)
4			中村 正祐	神戸高商OB	砲丸投(1位、12m83)

5	1923(大正12)年	大阪	毛利 一郎	大阪医大	220y(4位) 半マイルR(1位、1'33"2)
6			榎原 如一	同大	120yH(2位)
7			松川 省三	神戸高商OB	220y(3位)
8			猿丸 吉雄	同大	砲丸投(4位、12m96)
9	1925(大正14)年	マニラ	岸 源左衛門	関大	800m(4位)
10	1927(昭和 2)年	上海	相沢 巖夫	京都帝大	200m(4位) 4×200mR(2位)
11			矢柴 晴雄	関大	800m(2位)
12			岸 源左衛門	関大	800m(4位)
13			津田晴一郎	関大	1500m(1位、4'14"1)
14			星名 泰	京都帝大	五種競技(1位、2542点)
15	1930(昭和 5)年	東京	西 貞一	同大	400m(2位) 4×400mR(1位、3'24"2)
16			岸 源左衛門	関大OB	10000m(4位)
17	1934(昭和 9)年	マニラ	谷口 睦生	関大	100m(4位) 200m(2位、21"9) 4×100mR(1位、42"3)
18			市原 正雄	立命大	400mH(3位) 4×400mR(2位)
19			田島 直人	京都帝大	走幅跳(1位、7m30) 三段跳(3位、14m95)
20			原田 正夫	京都帝大	走幅跳(2位、7m26) 三段跳(2位、14m98)
21			大島 鎌吉	関大OB	三段跳(1位、15m07)
22			長尾 三郎	関大	やり投(1位、59m813) 五種競技団体(1位、13180.425)

出場選手大学一覧(延べ人数で多い大学順)

	延べ人数	実人数
1 関大	8名	6名
2 同大	5名	5名
3 京都帝大	4名	4名
4 神戸高商	2名	2名
5 関学	1名	1名
5 大阪医大	1名	1名
5 立命大	1名	1名